

序

この八笑人といへる小冊、先年珍らしく發きそめたる脣の、花曆なる櫻木に、いよ／＼登る瀧亭主人は、吾が師狂訓亭の兄にして、彼の總領の童戯人、六々三十六鱗の、丈ある鯉の味噌煮は、美味を知らずる可笑しみに、一家の風味を現はして、腮のかきがね是れが爲に、外させんと要する、滑稽の妙臻れり竭せり。然るに柚人は篤實く、専ら世の人情を、ありのまに／＼綴りなして、假にも勸善ならざれば、毫を耕らず、懲惡ならねば、書録さすと四角ばりて、珍文漢語の遠説く、走るを止むる駒木履の、音のから／＼渡つた様な、所を約して皇國風、而も東都に流行す、人情史は著はせど、旨とせざる處なりと、自慢のすましで喰はせる。比するに方函圓蓋の、たがひの中に小子は、右へよつたり左へよつたり、合はせて不意叶八笑人の、中へ漕ぎ出す東の船、雪とすみだの川風に、吹かるる春の山出し男、笑ふ許りを用處にて、不屬一方の放蕩もの、此の序を書けと命はる、まゝに、漸う毫をとりが啼く、冠辭も久しいものにて、欺癡漢せず出題傍に、智慧の袋のふるうはござれど、この書の餘紙の填詞に、する事しかりといふものは、縁橋西岸市隱の食客、原の狂名瀧亭絲丈、今は流れを引きかへて、不至作者の其一個。

東船笑登滿人誌

花曆八笑人四編上卷

一切衆生の薄地、凡夫心に八葉の蓮華あつて、取りも直さず出来合の、如來なりとはざる説法場の
 耳學問、其の八葉の潔き、數にはあへど世の垢に、よごれた顔の八笑人、女を見る目と喰物に、グ
 ビ付く咽の其の外は、無能短才何事も、知らぬが佛骸中へ、箔のついたるなまけもの、人のそしりも
 不忍の、池の蓮の花盛り、折こそよけれと左次郎が、例の庵へ寄り集ひ、又もめぐらす茶番の趣向、
 舌を巻葉の横衝へ、直に立葉の早合點、仕損ツては二度三度、總身に流す汗の露、玉とあざむく一工
 夫、今度は是非にと無い智慧を、磨く光もとほくと、闇き高田の螢狩、團扇はもてど取りとめた、
 趣向なければ主の左次郎、左次「時に如斯八人りつばにそろつては居るが、毎度出かさねえにはこまる
 ノ。」野呂松「さうよ、きりやうばかりよくツても、運のわりいだから仕方がねえ。」アバ太郎「へんお目
 かけの様にいやアがる。ハ、、、。」左次「なるほど野呂松がいふ通り、都て案事はかなりだが、冤
 角悲運にして、かんじんの所へ行くと、仕くじりが出来る。どうも思ひきやといふ事が出来るのだか
 ら、最初の趣向の悪いといふでもなし、寔にこまるぢやアねえか。」圖武六「なんの其様に歎息する事が

あるものが、俺が一番、座直しをしてやるから、しつかりして居ネエ。」左次「ナニおらア咳は出やアしねえゼ。」圖武「アツア是非もない事だ。みやびた言葉を遣ふと、ひなびた輩には、解しがたいテ、なげかはしい事だア。」吞七「ナニおいら達がしなびるものか。」左次「マア、くだまつて聞かッし、圖武公もでえぶきつくなつたテ。フンそこでまづみやびた言葉といふは、どういふ人の遣ふのだ。」圖武みやびといふは、マア都ぶりといふ心サノ。」野呂「ハア一中節の言葉で、たんせきといふのは何の事だ。」アバ「大かた夕霞の中に、咳も出ぬのに重ね夜著といふのがあるから其の事だらう。」圖武「じれッたくわからねえ手合だゾ。みやびたのひなびたのと云ふは、都ぶり鄙ぶりといふ事で、まづ都ぶりとは、きんりんさまのお出で遊ばす土地は、下々までが、おのづから雲上で、言葉つかひも、まちがつた事や、ぞんざいな事は、いはねえわサ。そこで又ひなぶりといふは、まづ早くいへば。」左次「いんにや静かにいつてくだッし、かういふ事はよく聞いて置きてえ。フン引、ハテナ、ひなぶりといふのは。」眼七「きん玉の黒い物だらう。ソレ色の黒い事を、ひなぶりのきん玉の様だといふぜ。」左次「是れサ、マアまぜつ返しちやア悪い、まじめな噺だわ。フン其のひなぶりといふは。」圖武「マア俗に云へば。」左次「いんにや坊様でもいいから、本たうの事がいい。」圖武「チョツまぜッけへすならよさう。」左次「アアあやまり、サアまじめで。」圖武「何もむづかしい事ではねえ、田舎風といふ事サノ。」

テナそれでは都の方で、今のやうな時痰咳をすらば、ひなびとかいふ、田舎の方では屁でもひるか。」圖武「アツア、どうもならねえゾ。嘆息といへば、病と許り心得て居るから、田舎もんだといふ事よ。コレよく聞いて置きナ、ごほり、といふ許りが、たんせきぢやアねえ、今お前のやうに、ア、趣向もかなりに出来たけれど、運が悪くッて、しそなつて許り居る、何事も勞して功なし、アツア是非もなき浮世ぢやナア、なんぞといふのを、歎息するといふわ。」左次「へんべらほうめ、それは歎息といふものだ。」圖武「ハア歎息か、ちつとの違ひだ。」眼七「カラ人非人ぢやく、ちやく、むぢやくちやの癖に、イケ利いた風に、耳學問のこうぜえた口を、た、きたがるから仕くじるのだ。ハ、ハ、ハ。」圖武「なんの知つて居るくらゐなら、何も人にいきせえひつばらせる事はねえ、ばかくしい。エ、出目助よせえ、ナゼ人の天窗を押すのだ。」出目「此のくらゐひやかされたら、もう少しやはらかくなりさうなもんだが。」アバ「しかししなびたくといふから、ちつとひやかすもよからうヨ。ハ、ハ、ハ。」出目「時に痰咳が留つたら、世界を定めようではねえか。」吞七「よからう。」左次「さうよ、ア、サ松、卒八と、何れも立派に仕損つたが、さてまた次の軽業は、眼公が番だノ。」左次「さうよ、ア、サゾ重わざだらう。」卒八「イヤ猿わざだらうテ。」圖武「それだから、爰は一番順をくりけへて、おれが座直しをして、味方の英氣をひつたてようといふ氣だ。」野呂「へん今の痰咳のあんばいでは、やつぱり

味方の英氣が、ひッ居るだらう。」眼七「違へねえ。へんおめへはマア當分出かけねえかい。」圖武「ナゼ、ぶッさうか。」眼七「マア痰咳のきえねえうちを通りはわりい。」圖武「チョッいまえましい。乾生姜でも呑むべエ。」眼七「サア今度は人の番でもさしくつて、おれが自身に玉手を勞して、座を直さうと思つて居る所だ。今までと違つて大事の場だ。」出目「さういつて見ると、足下にもさせられさうもねえから、大儀ながら出目助、出馬とくるテ。」左次「東西々々、皆があらそふも尤ものやうだが、さうして見ると、又外のてえへも、今度はおれが／＼と、いつまでも論がひねえから、是れは斯うするがよからう。」眼七「いんにや、さうしまい。なんでもおれが番だから。」左次「エ、おれがいふ事をマア聞かつし、カラ素とんちきの癖に、強情でならねえ。」眼七「へん即功紙を張ったきん玉を見るやうに、ひどくひツかじめるぜ。どうも仕方がねえ、置候のいふ事だ。マアだまつて、聽聞いたしやせう。」左次「ム、ンうらみツほくいやアがる、すかねえべらほうだ、ハ、、、。併し是れでもいつばし、一方は拙者承るといふ料簡でゐるから、まんざら豆にしても承知しめえ。斯うやつたらどうだらう。」眼七「ム、さうやらう。」左次「エ、豆藏の様な事をいふなえ、をかしくもねえ。」野呂「コレじやうだんよ、り、さうだんに身を入れるがいいぜ。だれいふとなく春中からの事も、こつちの連だといふ噂から、仕くじツちやア、おいらまでの面がよこれらア。」番七「さうよおめへなんぞが、うまくやつたあそこだ

から。」野呂「アツアあやまりあんどん油さし、ヨオ、イ、サア引込みだ。コレ送りはどうしたのだ。」圖武「へんどんな狼でも、こんなものにはつくまい。」卒八「コウ／＼荒増世界の定まるうちは、閑話休題として、へん唯かういつた許りでは解しがたからう、閑話休題とは、むだばなしはさて置きといふことだぜ。」アバムン閑話休題の講釋、もんで張つて十六文か。へん讀本を學書と心得て、六冊物の二三部も見ると、學者になつたつもりだ。」出目「ム、ちけへねえ、よ、と泣いたり、かやく／＼と笑つたり、泥みたる聲音して、ほこりに話すやつか。へんよく出来た猿だゾ。」番七「サア／＼とかく相談を極めようといふと、稻荷町からまぜつ返して、くだらなく引ッぱつて居るも、久しいもんだ。てえけえにしやべつたら、なんとまじめな相談はどうだらう。」左次「さうよ、今野呂まがいふ通り、此の催しの事はうす／＼人も知つて居るから、番毎仕くじつて許り居ても、見ツとむ有りもしねえから、今度は一番氣をぬいてはどうだらう。」圖武「氣をぬくとはどうするのだ。」眼七「さうサ此の上へ氣をぬいたら、人間に似た獸が、八疋出来る許りだらう。」左次「いやサ今度の名代は高田の螢狩だらう。所で卒公が怪我の直るうちに、モウ螢も末になるし、殊に場所は高田だわサ。今時えつちらおつちらあそこまで、螢を取りに行く人もすくなし、人が出ねえで、こつち許りいつた所が、はじまるめえぢやアねえか。」出目「ム、成程それではやめか。」左次「イヤ最初の規定だから、途中で立ちぎえして

は、今まで磨いた男がよごれるから。」圖武「ハアいつみがいいたか、気がつかなんだ。」野呂「さうよ、つひぞ見た事もねえが、大かた天窗の事でもあらうヨ。さういはれて見れば、日増しにいいつやが出るやうすだ。」眼七「エ、やかましいわえ。ちつとは言葉の花といふ事があるものだわ、それをいち／＼咎められてたまるものか。マアだまって聞かッし。今いふ通り、かんじんの螢といふ景物はおくれるし、場所がらはわるし、座頭は眼七と、かう三拍子揃ったなアねえ。」圖武「此の芝居は、オロシヤへでも賣るがいい。」眼七「おめへ達は、とかくおれを唯の人のやうにとり扱ふが、チト御料簡違へかと存じられるテ。今までの鼻元思案とちがつて、まづ筋はかうだ。エヘン。」左次「エヘンも異變もいらねえが、足下の事だから、定めて趣向はよからうが、夜夜中高田まで行つても、荷負うといふ見物もなくつて、何を當てに茶番をする氣だ。」出目「ハア人は出ねえかノ。」左次「二三十年も以前は、風流がる奴がたまに行つたさうだが、今は餘り出ねえさうだテ。」出目「それ程知ツてるくらゐなら、こんな題を出す事もねえ。」眼七「何サ案じねえがいい、難題でも人にこそよるべしサ、其の時眼七すこしも騒がずサ。出ねえ人を無理に出したがる事もなし、時候はづれの螢をつかめへて、グヂ／＼して居ても始まらねえから、それは狂言名題として置いて、其のうそ寂しい所へ付け込んで趣向を付けるが、茶番師といふものだ。」左次「何だか頼みすくない奴等が、むしやうに氣許りたかぶつてゐるから元

ねえテ。」眼七「ナニサ心元有るヨ。」卒八「マアどんな事をいふか聞いてみるがいい。サア存念を残らず申し上げろ。」眼七「ヘン聞いて悔りするなよ。」野呂「卒八」三杯呑んだ、さかづ、オット合ひこう合ひこう。」アバ「ア、うるせえ。ふたアりで對々の對に地ぐるのだ。」眼七「どうもならねえ、まア少とだまらねえか。其様幕なしに地口つゞけで、どうして本讀がはじめられるものか。」左次「サア／＼眼公、よけいな口をきかずに、ざつと筋許り聞かう。」眼七「マツわたし獨り、晝の内さきへ行くのだ。しかし高田にちよいと一杯呑まうといふ家が有るかノ。」左次「それは有るのサ。」眼七「其の酒店へ上つて、獨りボツ／＼呑みながら、始終狐と見られるのだ。」圖武「どうして狐と見せる。」眼七「そりやア腹に有るのサ。」左次「其の腹が安心ならねえテ。」卒八「さうサ 狼とは思はれさうだが、狐の方はどうか。」眼七「何サ、鯉丈が出した和合人といふ中本のやうに、狐の尻尾をちらと遣ツて、後は思入いろ／＼、仕打たつぶりサ。そこは決して案じなさんな、萬事は胸にあるから。」出目「そりやこそ、たつた今腹にあつたのが、モウ胸へ來たから、程なく口元か、鼻の先へきさうな趣向だ。」眼七「マツサ、だまつて聞かッし。跡でもし悪くば、なんともいふがいい。どうも悪いくせだ。」出目「ヘンもし悪くばもいい、もしよくばほめてやらう。」眼七「左次さんちつとどうかしてくんなせえ、わたしには口をきかせねえ。」左次「ハ、ハ、ハ、東西々々。」眼七「其のくらゐな事だまるとつらか。」左次「そんなら南北南

北。」眼七「ム、よし、みんながさう向う面へまはるなら、おれも男だ、仕掛けた本讀をやめはし
ねえ。合手はいらねえ獨りでやるぞ。へっぴりども、なんともませっけへせエヘン。まづ本舞臺三
間の間。」出目「まづ本舞臺でいい、ハ、、、。」アバ「先づだらうヨ。どうせうまくはねえわサ。」眼七
言方、本讀のまね。「都て高田馬場の體、上のかたに料理茶屋一軒。」卒八「だいいふ荒ッほい書きやうだネ。」
横ぐはへにいふ。「筋書の方を間違へて持つて來たらう。」眼七「やかましいわえ、飾り附から小道具は、み
んな胸の内にならべて置くわ。」本讀「オイ女中、繚があらば、天麩羅にして貰ひてえもんだ。下女ハ
イ承つて見ませうト立つて行く。跡にて臺所より見ゆるやうに、何かきよろ／＼として、羽織の裾
より尻尾など少し見せ、思入有るべし。此の内さいぜんの下女來り、ハイどうも、繚の天麩羅は出來
かねます。」おのれが名も役者「眼七、ハアそんならたゞの油揚でもいいから、二三十枚出してくれ。女
アイ／＼引と立つて行く。眼七、コレ／＼ト呼び止め、其の油揚は女の手にかけて、よく切火を打
ちかけて焼かずに生でよし。女アイ／＼と下座へ這入る。此の鳴物にて向うより。」卒八「どんな鳴物
だか前にはなかつたぜ。」眼七「エ、そんならテンツ、でいい。向うより左次郎、アバ太郎、圖武六、
出目助、呑七、卒八、何れも町人の拵へ、螢籠、大團扇杯をもち出で來り、同じく此の酒店へくる。
下女出で迎へ、それ／＼に挨拶よろしく有つて、みな／＼稽臺詞にて、上のかた障子家臺へ這入る。」

野目「ム、ンやうかん色にいふナ。」眼七「ナゼ／＼。」野目「黒いやうにまかした事をいふから、やうか
ん色よ。」眼七「かまはねえ／＼。」本讀「このあたりより眼七は亭主を呼び、何か託宣めきたる事、都て
所繁昌、家繁昌其の外うれしがらせ、受けのよき事許りいひ並べ。」圖武「をかしな作者だナア。う
れしがらせる事をいひならべツ。臺詞もつけねえ本讀もをかしい。」出目「大方それも胸か腹だらう。」
眼七「うच्चちやツて置けエ。おれが役だから、どうでもいいわ。」左次「オットしばらく／＼。イヤなか
なかつりきな筋だ。マツ本讀をばあづからう、かいくつて聞いて居られねえ、まじめな相談にしよ
う。」眼七「ヘンどうでござえず、それだからあんまり人を見くびらねえもんだ。」左次「いいさ／＼、廣
言は跡の事。それからおいら達は脇の小座敷に居てどうするのだ。」眼七「おめへ方のはうでは呑みな
がら渡臺詞の雑談。そのうちに、せつかく螢を取りに來て、一疋もとらねえ、これで歸つてはいいわ
けがねえなぞと、わたしが方へ聞える様にいふを聞いて、亭主に向つて、鄰座敷のものどもは、螢狩
に來たやからと見ゆるが、其の螢が所になくては、かれら歸朝のうへ。」左次「唐へ行きアしめえし、
歸朝といふがあるものか。ハ、、、。」眼七「歸國か。」左次「歸宅さ。」眼七「マアちつとぐるな事は
いいわな。」呑七「唐と高田だからきつい違ひはねえ。」眼七「エ、又のたり出るよ。」ト、にら「エ、歸宅
のうへ、近所合璧の友子友達へ。」野目「ア、まづい言草ナ。稻荷さまだらうナ。」眼七「申しきかせるで

有らう。さすれば當所、不繁昌の元手なるべし。」左次「基だらう。」眼七「ム、基なるべし。我が通力をもつて、少々螢を取り集めてやるべし、といひながら、勝手の宜い方をむいて、チ、ンブイ、御代の御寶と、何か呪文をとなへると、向うの方へ螢があらはれる。」アバ「どうしてあらはれる。」左次「それは遠くで見せるのだから、花火でもよからうが、だれぞ向うへ廻つて居るのか。」眼七「さうよ、野呂公が役だ。」野呂「へんありがてえ、蚊に喫はれながら螢花火をボタリ、やつて居るのか。」眼七「そのねえ。」香七「其の役をしねえ所が、智慧のある方でもねえから、役不足をいふ事はねえ。」眼七「何サまだ外に大役があるよ。そこで皆が、ソリヤ花火があがるといつて驅け出して、螢籠へ入れるふり。」卒八「やつぱり花火があがると言つていいのか。」眼七「エ、何サ螢が。」卒八「あがるといふのか。」眼七「螢の揚るといふ事が有るものか、知れた事だわ。」卒八「作者のいひつけ通りにいふ氣だからヨ。」眼七「ちつとぐらゐの言ひそこなひをば、大概に推量するがいわ、こじれつてエ。」アバ「ハ、、、、じれ込みやアがるわ。」眼七「それから皆か螢を追ひまはして、取るふりをしながら、花火を遣ふのだ。いい程にとつて、籠へ入れたふりで兼て持參の螢を持って、元の家へかへる。」出目「内のものも同じく取りに出たらどうする。」眼七「そりやアおれが。」眼七「胸か。」眼七「むねの者どもは、エ、どうもませつけへしに、引きずりこまれて、のほせつけへるわ。」香七「ハ、、、、甘口な野郎だ、サアこれか

らおれがまじめに受けるから、おれに許り嘸す氣でやらツし。フウそこで、内の奴等も出ようとするを。」眼七「コリヤ、内の者どもは、決して出でる事無用と留めて見ねえ。ドロン、で螢をあらはすもんだから、内の奴等はおそれいつて、なんでも、おれがいふ通りになるだらう。」左次「さううまくさへいけば、眼七もてだらう。」眼七「所へ野呂公が獵人の拵へにて狐を待つて来て、其の庭へおき、少し思入ありて、すつと小陰へ這入る。それからわたしが、鼻をひこつかせて、そろ／＼亂れかゝつて、つる／＼と庭へ飛び下りる。内の奴等はあはやく驚くをかまはず、良のそばまでつかつかと行き、すつくと立つをきつかけに、『爰に獵人の、いつも掛けおく狐、さまざま懸け置きたり。』と一中節の信田妻を、左次さん一口おたのみだ。」出目「へん素人が呑口を抜くやうに、大層ひねるナ。」左次「ム、よし／＼。」眼七「そこで色言葉の切れるまで、少しづつ、思入の振があつて、『煩惱のきづなをかけ。』と言ふをきつかけに、皆一時に、高田の馬場の狐をつるな。テン／＼とツツン、テンツツンと、三味線茶碗皿、井、其の外見合が、り、手當り次第に、た、きたつて嘸す。わたしは大はだぬぎ、向う鉢巻のやけ踊となるといふのだ。」卒八「是れは眼公にしては出来たく。」眼七「なに眼公にしては、コレおれを何だと思ふ。」卒八「左次郎方に居候とおもふのサ。」左次「エ、やくたいもねえ事をこたつくなく。エ、引トなる程螢狩の題ではそこだらう。随分よからう。本當に踊らうとい

ふかと思つて大きに案じた。色言葉のうち、すこしの思入がありさへすればよし、其の思入も夜の事だから、おも入でも軽入でもよしと。アバ「そのあんばいでは、なにも稽古がましい事もいらす、直にやつてもいいノ。」左次「イヤ、さうでねえテ。獨舞臺のうちが、眼公にはチト大役だよ。」眼七「へん案じなさんな、腹がなくなつて正本をたてるものかな。」左次「女島の雪隠を見るやうに、其のくそすますが、不安心でならねえ。」眼七「是れほどの事を書く腹だから、安心しさうなもんだが。」圖武「ごたいそうにいふな。何もそれしきに腹も尻もいるものか。」卒八「さうよ。はら所か、少し明地があれば、出来る事だ。」アバ「へん洗張屋が見世を出すやうだ。」眼七「それ程不安心なら、誰ぞ亭主になつて見ねえ、一番うまくやつて見せよう。」圖武「ム、それがいい。おれが亭主に成つて受けよう。」眼七「サア皆ませつけへしなしたよ。」左次「しれた事よ。そつちよりこつちが、安心してえから見るのだ。サアまじめでやらツし。」圖武「よし、サア亭主に逢はうと、呼ばれて出てからだよ。」眼七「よし、サアアこい。」圖武「へいお呼びになりましたか。」眼七「オ、其方此の家の亭主か。」左次「亭主といふがいわ、あんまり御丁寧過ぎる。」眼七「亭主か。」圖武「ハイ左様でござります。」眼七「フン名は何と申す。」圖武「圖武六と申します。」眼七「年はいくつに成る。」圖武「へい三拾五歳でござります。」眼七「宗旨は何宗だ。」圖武「へい宗旨は、エ、引淨土宗でござります。」眼七「寺はどことだ。」圖武「淺草でござります。」

眼七「葬禮は何時だ。」圖武「へい葬禮、イヤ此のべらほう、うぬがませつけへしやアがる。」眼七「ア、あやまりあやまり。エ、女房はいくつだ。」圖武「餘りしつこいぢやアねえか。」眼七「マア何でもおれがいふ通り受けさつしな。」圖武「オ、エ、引二十五でござります。」眼七「ム、厄年だナ。」圖武「へい、イエ女は厄年ではござりますまい。」眼七「ハアさうかな。」圖武「へい男が二十五、女が十九と申す事でございます。」眼七「アア不便な事を致したナ。」圖武「なぜでござります。」眼七「おれは又心中かと思つた。」圖武「太神樂の神主さんをやりやアがるわ。べらほうめえ。」眼七「モウ、くまじめだまじめだ。ム、二十五歳では。」圖武「結構なお料理でござりますな。」眼七「是れサまじめだといふのに。ム、二十五歳ではモウ厄は濟んだナ。」圖武「イエまだ三十三と申すがござります。」眼七「ナニ三十三がある、それは丸か半札か。」圖武「へい丸でござりました。」眼七「フウ、それを貳朱と貳百に買はう。」圖武「どういたしまして、そろひ目は中間でもさうは買へません。」眼七「エ、モウ百遣れ。」圖武「チヨツ口あけだ上げませう。三百では寔に買値でござりますが、其のかはりお當りの節御祝儀をどうぞ。」眼七「コウコウそりやアいいが、きのふは何が出た。」圖武「おれもまだ出番を見ねえが、昨日はおれがべめた氣だが。」眼七「おれもしめた氣だヨ。出番を見ねえうちが樂しみだよナウ。」圖武「ちけへねえ。しかし出番を見ると、いつでもがツかりにはおそれるテ。コウこれは地金だが、實に一ツとらねえでは、

モウたちきれねえぜ。」左次「コレこいつらアどうしたのだ。」出目「さうよ、稽古だといふから、嘸もせず聞いてるのに、うぬらが勝手な咄をしてるぜ。」ト、いはれて兩人心付き、うる圖武「コリヤ〜亭主。」眼七「へい〜。」圖武「汝が心立のよきゆゑ、福徳をさづけてつかはす。」眼七「へい〜、それははや、ありがたい儀。」左次「コレサ眼七の方が狐ではねえか。」眼七「オ、ほんに左様でござります。まことに龜相仕りま。」左次「エ、なんだか、むちやくちやになつたわ。大きなべらぼうだ。」出目「ほんに、其様どち〜した事では、此の役はむづかしからう。」左次「さうだが、かなり筋が立つてるから、むづかしいのは亭主と應對ばかりだ。それも今夜中か、つて責めたら、ちつとは口がほぐれるだらうし、兔角口敷をきかぬやうにすればいい。それはまア扱置きとして、なんにしる腹の内が酒ぎれだ。ちよッぴり小酒としよう。」アバ「へんさつきからてん〜茶椀で、やつて居るのよ。」左次「如才のねえやつらだ。だうりで靜かだと思つた。サアさう聞いたら、たまらなくなつて來た、眼公々々、ちよいと何ぞのめるものをナ。」眼七「前齒のかけた下駄はどうだ。」左次「エ、古い〜。しやべらずと早くさつせえ。その内蠅帳のもので、蟲を押へてるよ。」ト、是れより例の大酒となり、暫しは雑談に時をうつしぬ。

四編 下卷

かかる折ふし庭口の、枝折戸明けて入りくる人は、勢州屋質兵衛とて、近所名うてのかた親父、平日は左次郎はじめ一座の能樂者などは、風上にも恐れ、又左次郎方にては、風下に居るさへきらふ釜違ひの人なるが、何思ひけんいそ〜にこ〜入り來り、質兵衛「左次郎さまは御在宿かな。」眼七「覗いて「オヤ〜とんだ獸が來た。」左次「だれだ〜。」眼「勢州屋のトンチキヨ。」左次「コリヤ妙だ。なんに來たらう。」眼「さればサ待ちねえヨ。かうだによつて。」質「おるすかな。」左次「イエ居ります〜。是れサ眼公何を考へて居るのだ。なんとか言はつせえナ。」眼「ム、さうだつけ。あんまり思ひがけねえ人が來たから、ツイ。」左次「エ、じれつてえ。」ト、左次郎 左次「イヤこれはおめづらしい、何と思召してお出でなかつた。マア〜こちらへ。」質「アツハ、、、イヤモウとんだ事で、チト、アツハ、ハ、座敷に 出目「なんだかむしやうに、アハ〜笑ふぜ。上り口を齒くそだらけにするだらう。サアサア上るわ、是れはたまらねえ〜。」アバ「マヅしばらく陶器類を持つて、昇天することだ。」圖武「ムムそれがいい〜。二階呑み靜かとかやらかせ。野呂公廣蓋を持つて來さつし。早く〜。」ト、皆々そ道具を持つて 質「チト折入りました、御相談申したい儀がござりました、わざ〜、アツハ、、、。」

左次「へエ、何御用か。マヅこちらへお上りなさいまし。」質「へい、左様なら眞平ごめん下さりまし。座敷へ通る。」左次「眼公お茶を上げてくだつし。」質「イエ、決しておかまひ下さりますナ。アツハ、。叔はやけしかりません暑でござります。しかしながら暑い時節はやはり暑いがよろしうござります。又寒い時節は寒いがいさうでござります。ア、當年などは出来ましたさうで、マヅ七十年來の豊作と申す事でございますナ。」左次「へエそれは結構な事でござります。」質「イエサ何程澤山出来ましたと申して、別段餘計にもたべられぬものなれども、豊作と承ると、なにか安心でござりますテ。ハ、。叔はや御近所ではござりますが、渡世にかまけて、とんと御不沙汰ばかり、何か用事がなければ上りません。ハ、。左次「それはお互でござります。ほんにおめづらしいお出でだ。」此の質兵衛は只商賣一ツ三まい、外事は一向何も知らぬ文盲おやぢなれど、そのくせ何か「時にお見かけ申して、是非々々御頼み申さねば相なりません儀が不圖出来いたしましたして、それ故わざく。」ト、兎しろくもない事をくだくなら、左次「へエ何御用かマア早くおつしやりまし。」質「へい、いえサ、それを申べ立てられ、よわりきつて、左次「へエ何御用かマア早くおつしやりまし。」質「へい、いえサ、それを申しに参りました故、申すなとおつしやつても申さねば、相なりません儀、イエサ外の儀でもござりませぬが、よい年を致してト思召しの程も、面目次第もござりませぬが、何れあなた方の愚案をおかり申さねば相成りませぬゆる、今日わざく。」ト、質「七ははれつたらぬ事をながり、そばかり口を出す故、」ト、

引、それでは何かア、引、イヤそれはぶしつけながら、幾つになつても、あの道ばかりは別なもので、私なんでも度々こつちの主人の世話にもなりますが。」質「イエサ餘の儀でもござりませぬが、わたくし方數代お出入いたしまするお屋敷様で、此の度御隠居様の賀の御祝ひがござりますところ、古いお出入町人共へ、高田の御隠館において、御酒をくださりますところ、イヤ有り難い事ではござりますが、それにつきまして、まことに難澀な儀が出来いたしました。茶番狂言とやらをいたさねばなりません譯に相成りました所が、おはづかしい事ながら、當年私は午の歳で六十五歳になりましたが、まだ芝居と申すものを、見ましたことがありませぬ故、狂言の儀はたつて御免を願ひましたれども、外お出入の衆が残らずお受けを致しましたに、私ばかりいなやを申しましては、斯様にお目出たい御祝儀のこと、又二ツにはお上の思召しをそむく同然と、お役人方からくれぐれ御内意もござります故、家内の者打寄りまして、一同當惑致しまして、寔にはや、どうもはや實に。」ト、引、茶番かえ。なんの其の様に苦勞なざる事アねえ。爲さいやしナ。」質「イエサなさられます程なら、此のやうに苦勞もいたしませんが。」左次「それでは何か題が参りましたらうね。」質「左様々々、その題とやらは、御廻狀に添へて参りましたが、エ、忠臣藏と申す事で、私方へ仰せ付けられましたは、五番目と申すこととござります故、マヅ支配人と談合致しましたところ、右支配人申しまするには、い

つたい忠臣藏五番目と申しまするは、エ、引まづかいつまんでお話し申しますが、さるお屋敷の浪人に、定九郎と申する者がござりまして、エ、ある田舎で寂しい場所を見立てまして、追剥を渡世にいたして居るところ、其の近在の百姓に、與一兵衛といふ親父がござりまして、是れがサ、私の運のよい處で、その親父が金を五十兩と申すもの、おまいさん懐中いたして通りか、ります處を、彼の定九郎めが付けて参じまして、年寄の夜道はあぶないから、送つてやらうと、深切らしく申しますが、こいつ油断のならぬ奴とは思ひましたなれども、其の様に奇特にいふものを、無下に斷りもなりませぬ故、何か浮世話をしながら参ります道、案のぢやう右盜賊の申しますには、貴様の懐にある五十兩をかしてくれろと申しますけれども、大枚五十金と申すものを、住所も知らぬ往來の人に、貸せぬは知れた事サネ。それでもさすが年寄だけ、そこは方便で、是れはけて金ではござりませぬ、娘がくれました反魂丹と、にぎり飯でござりますと、早速にうそをつきますけれども、それほどの盜賊がきつと見とめて、付けて來ましたから、其の手はくひませぬ。そこで彼是申しつので、最早亂鬢長髪となりまして、傍若美人に懐中へ手を入れて、縞の財布を引き出しまして。」ト、くだらぬことを長眼七はじ、眼「左様々々。それから與一兵衛をころして金を取る、猪がかけ出す、定九郎松の木へ上る、鐵砲ゾドン、定九郎ダァ、勘平が出てその金を取つていたゞ。チヨン／＼幕。」賈「さやう

さやう。イヤたいてい御存じだネ。ハ、ハ、ハ、。それでは格別お嘸しあひが早くつてようござります、どうでも通人づきあひばかりなさるから、なんでも御存じだ。ハ、ハ、ハ、。それ故にこそ番頭めも、あなたへ参つて皆様のお愚案をおかり申すがよからうと申しました。アツハ、ハ、ハ、。そこでサ、わたしの運のよろしいと申す譯は、私方は御存じさまの通り、先祖から勢州屋質兵衛と申します處、此の度の狂言は、夕方よりと申すお廻状でござります故、先づ一番目から五番目の私の番までには、大丈夫四時頃にはなりませんうから、右の百姓の役を、私が勤めまして、仕舞に夜の質兵衛ゆゑ、夜質兵衛になりましたと、カウ申し上げるがよからうかと、番頭申しますが、是れは成程よい思ひつきではござりませぬか。」左次「成程随分ようござりませう。」賈「ところでサ、その泥棒になりす者にさしつかへますテ。家内のものは番頭はじめ手代どもなどへ申し付けましても、なにぶん主人へ手むかひ致しますゆゑ、なんほ茶番狂言にいたせ、迷惑がりました、辭退いたしますゆゑ、よんどころなくこなたへ参じましたが、なにともはや申し兼ねましたが、その泥棒におなりなさつては下さりませまいか。」左次「エ、それはお安い御用。定九郎ぐらゐな役は、幾らも仕手は有りやすが、それではお前さんが與一兵衛かネ。」賈「へイ左様でござります。右夜の質兵衛ゆゑ、少しもぢりまして夜質。」佐次「エ、成程々々。チヨツ、それでなくとも、何か落ちはありやせうが。マア／＼それはさうと、そ

れにしても、定九郎許りではたりやせん。先づ五段目の役人は、勘平、彌五郎、定九郎、與一兵衛、猪と、五人に、其の外後見に囃かれこれ七八人はいりやすが。」質「へエ、しかし盗賊に百姓が殺されますばかり、外に踊がましい事をいたすではなし、はやし方までにはおよびますまいかと存じますか、それとも何れ此の一儀はおまかせ申しますゆゑ、如何様にもお差圖次第に、取りはからひます料簡で。」左次「素人狂言といふやつは、舞臺よりはうしろがしつかりしねえでは、うまくいかねえもので御座いやす。ぶしつけながら、芝居がおきらひだから、くはしいことは御存じねえが、いづれ私等にお任せなされば、まんざら素ドンチキのやうに、見ツともねえ事もしやすめえ。殊に五段目ぐらゐの一幕や二幕は、あんまり仕足らねえ、もうとつと身の有る事をしてえテ。」眼七「左様サ、ぜんとえ茶番に忠臣藏もあんまり古いネエ。」左次「イヤサ藏でもいいが、五段目なんぞはあんまり仕足りねえ。」質「左様サ、ぜんたいあなた方をお頼み申す程なら、十番目から上でも随分出來ますのに、をしい事で。何分お上から仰せ付けられました事故。」左次「マア、そりやア五段目でもようござりまするが、エ、そこで當日は、いつごろでござりまする。」質「へい當日は二十九日でござりまする。」左次「ハア二十九日、エ、そりやア妙だ。ちやうど與一兵衛が祥月命日だ。ハ、ハ、ハ。」質「へエ、左様カナ、フム、おまゝいさん方が、命日を御存じの程では、そのやうに久しい事ではござりませぬナ。ヤレ、不思議な縁で、わたくしがその百姓の名代を勤めまするも、因縁事でござりませう。南無阿彌。フム引それでは、自體御懇意でもござりましたカナ。」左次「なにサ、さういふわけでは御座りやせんが、マア、そんなことはどうでもいいとして、オイ眼公、マアみんなを呼ばッし。役をふつて見よう。」眼「時にみんなを呼ばねえうちに、少々内談ありだ。先づ今度の高田の螢狩は、わたしが座元だが、おめへのいひなさる通り、螢狩に出る人もなし、といつて場所をかへるも卑怯だから、筋をば立てたが、實は酒屋のうちばかりをひつかついだ所が、どつと腹にもたりず、殊に居候の身分なれば、斯う金主の有る芝居を、つとめずんば有るべからず。幸ひそのお下屋敷は高田邊といふ事、ネエ勢州屋の旦那。」質「左様々々、雜司谷のわきでござります。イヤ今度私も一生懸命、數代御高恩を蒙りますお屋鋪様の事のゑ、物入は厭ひませんから、お心置なくお指圖くださりまし。」眼七「そこで皆にばつと相談すると、名にしおふお屋敷の奥といふもんだから、定九郎と勘平のしてばかりあつて、役割がめんだうだから、勢州屋の旦那が名さしで、お前を勘平、わたしを定九郎と、當てて來さしつたつもりで。」左次「何サそれは螢狩の替りにするなら、勘平でも定九郎でも、足下のしたい役をするに、物いひはねえわサ。あれはどうでもいいから、マアみんなを早く呼ばッし。」眼七「ヤそれは妙だ、そんなら私が定九郎。」左次「ハアテようござえさア。」眼七「有り難し。」ト、いそぐ二階「オイ、皆が早

くおりて來たりく。三枚並大急ぎといふ相談が出来た。早くく。圖武「エ、何だいけさうくしい、ぎやうさんナ。」アバ「ホンニいつもがさつな野郎だ。丹前師の集まつて居る時は、あんまりものいひを荒々しくしねえもんだ、へん血の道があがらア。」野昌「ほんによ、あんまり下主に出來たやつだ。心だてならきりやうなら、ほんに女子のすかねえ眼と、いふやらうだぜ。いまくしい。」眼七「じやうだんではねえから、わりい地口をついて居すと、早く來て相談を聞いて見ねえ。おめへ達のぞくぞくする程うれしが話だ。」出目「へんめづらしさうに、又女のことか。もうどこからの言ひ込みでも、暑中即席戀事相休み申し候。新入りはお断りだ。」眼七「チョツいめえましい奴らだ、こじれつてえ。左次さんくどうも二階でたれてばかり居て下りやせん。」左次「ア、世話のやけたやつらだ、そして二階でたれられてたまるものか。ハ、、、。質べゑさんごらうじやし、此の通りだ。ハ、、、。ハ。」質「へエ、下生のかいなお方なら、全體二階住居はわるうござりますて。おいくつ許りのお人か。どうもサ、年を取つてのは、やまぬもので御座りますテ。」左次「ハ、、、。イヤモウ血氣さかななやつらで、どれもく達者にたれやすヨ。」つて階子の口に來り立。左次「オイくまじめに相談が出来たから早く來さつし、じやうだんぢやアねえぞ。ころへ歸り居る。」野昌「オット承知々々。もはや救應二度に及んだから、行かすはなるめえ。」アバ「サア行くべエ。何を又もくろんだしらん。」

みな何か捨てせりふにて煙管、煙草、アバ「眼公、勢州屋の藥罐はモウかへる。」ト、バ太郎が口へ手をとてへ指をさす。ついで野昌「ほんによ、如斯わからねえ、も、んじいはねえ。」圖武六「あれでなければ金は出來ねえわ。」出目「なんの茶粥ばかりくらつて。」ト、おひく、悪くいひながらおりに來るを、眼七は氣をも郎もたまりかね、なにか大聲にくだらぬ話をたて付けてまぎらして居る。皆々も階子の上り口に立つて、たがひに顔を見合はせ、首をちぢめ又は舌を出し、頭をおさへ暫くだんまりにて、しらげかへつてちぢみ居しが、少し取りなし心に、出目「しかし粥といふものは藥だとノ。」アバ「さうよ、藥罐で煮たのが格別きくとノ。」ト、いふきの苦しげなるを、皆々察して「フウ、、、。」ト、吹き出す。其の場白。左次「オイみんなは何をして居るのだ。下生のわるい話をしたとつて、今さらはづかしがる事アねえ。早く來さつしナ。」辛八「アイ今。」左次「今ちやアねえ、急ぎの用だ。何をぐづくして居るのだ。」アバ「何サ藥罐を一ツ頼まれたから、一寸買つてこようかと思つて。」左次「エ、モウ何といつても帳面はきえねえわ。そんな事よりマア早くこの相談を聞かッし。」ト、せき立てられて、やうく氣の毒さうに座敷へ來。左次「質兵衛さん、是れはみんな私の友達でござりますが、年中茶番のやうな事にばかり、身を入れて居る馬鹿どもで御座いやすから、さいはひ今度のお頼みに、此の手合をつかふのでござりますテ。御近處だから、たいていは皆御存じでも有りませうが。」つて引合はせる。質「へいく、イヤモウ私は御覽の通り、老母となりまして、とにかく入さまをお見それ申してなりません。ハ、、、。何分にも此の度の儀は宜

しうおたのみ申します。」卒「ハイ、いやモウおつしやる通り、男も年をとりますと、老母になりますので、實に難儀いたし。」左次「エ、引そんなつまらねえ話より、こつちの相談をよく聞かつし。モシ、質兵衛さん、おまへさんも其の様におかたく許りなさつては、かういふ相談は出来やせん。まづゆるりとお樂においでなさつて、お心安くお話なさらぬと、こいつらはみんな、根が下主でございますから、氣をつめてとんと御相談に乗りがきやせん。」卒八「左様々々、餘りへい、したしからすと申して、どうも打ちとけませんで、いつそ氣がつまつて。」吞七「何のいやらしく云やアがるわ。いつそ氣のつまるといふ面は、もうちつと齒がひつこんでるわ。」卒八「ナゼそつばで氣をつめてはわりいか。」吞七「わるくもねえが、マア氣の小さい人の事をば、うちばだといふから、そのくらの外ばなら、マア勞症の氣づかひは有るまい。ハ、ハ、ハ。」卒八「そねめ。」吞七「ム、引いい、まけるとそねめ。」ア、引手のねえぬしだナ。」このうち左次郎は圖 左次「サア、やかましい事をいはすと、此の圖を引いたり。」圖武「なんの圖だ。」左次「何でもいいからだまつて引いた。」ア「ヘン敷から棒ナ、何だしらん。」ト、みな、圖を取り 左次「オット待つたり、爰で話がある、叔當六月二十九日、與一兵衛が祥月命日に當つて、さるお屋鋪の奥に茶番がありやす。そこで題が忠臣蔵、しかも五段目で、わけ有つて定九郎と與一兵衛は、外にする者が有るから、其の外を圖にした

のだから、圖次第にして、役不足をいひつこなしだヨ。」出目「ハアさうか、さうと知つたら、身にしみて圖を引けばよかつた。」野呂「サア、愚痴をいはずと、おつびらけ。ヤア何だ、うしろト、是れは何だノ。」左次「そのうしろくとしたのは、後見や囃へ廻る印よ。」野呂「ハア、さうか、そりやアつまらねえ。ヘン花を取りそこなつたやうだ。」左次「ヤ、おいらのも實がねえ、同じくうしろヨ。吞」彌五郎か。」ア「是れもうしろ。」出目「ヤア、めめた勘平々々。妙々。」圖武「六はひらいて、圖武」チヨツ、ヘンちろのねえ。」出目「圖武公なんだ。」圖武「猪ヨ。」野呂「ハ、ハ、是れは本役だ。奇妙々々。」圖武「なんの猪なんぞは、圖へ入れずとものことだ。」出目「五段目に猪がなくつてつまるものか。役不足をいひつこなしといふ、きめだ。」圖武「うぬがよい役をとつたと思つて、ひとりでこゝしやアがる。おらア役不足はいはねえが、役足りをいひてえ。その面で勘平が出来るものか。」出目「ヘン捨て置きたまへ。」ツ。ヘン梅幸でいかうか、イヤ坂三津でいかうかしらん。」野呂「ヘン奥州へいかうか、仙臺へいかうかが、聞いてあきれらア。とんださつま芋だ。」左次「そこで爰にまだ、物いひのつかうといふことが有るが、是れはおれがお頼みだから、定九郎をば圖なしに貫ひてえ。そのわけは、今度こつちの催しは高田の螢狩だらう。そこで此の茶番に行くお屋敷も、高田邊だといふ事だから、幸ひ此の狂言をふり替へて、眼公にさせると、そりや金主は有るし、ちやうどよからう。」卒八「成

程そりやア妙だ。少し傍題にはなるが、エ、引コレ、六段目だと奇妙だが。」眼七「ナゼく。」卒八「高田の螢狩の地口で、高田のおかる買ひとやらかすわ。」アバ「ア、わりいく。しかし眼公も鬨なしに貰ふといふから、モウ六段目は六段目だけれど。」眼七「ア、鶴龜々々。併し此の相談さへ承知なら、なんといはれてもかまはねえく。」圖武「そこで與一兵衛早替りといふ筋か。」質「イエく尾籠ながら與一兵衛はわたくしがいたさねば、右夜の質兵衛故。」左次「左様々々。與一兵衛は少し此の旦那が山が有つてなざる積りだが、マテ暫し、殺された人が起きかへつて、へ一夜の質兵衛ゆる夜質兵衛でござりますといつても、をかしたもんだがム、かうしやせう、そのお屋敷も御祝儀の事だから、人の死なねえ五段目といふ筋にしやせう。マツ勘平、彌五郎の都合、立ちわかれと引込む。又も降りくる雨の足と、チヨボにかゝると、正面の稻村のかけで焼酎火をもやす、そこへ與一兵衛が出る、同じく定九郎も出て、いつもの通りあつて、止財布を引き出して、口に銜へると、唐茄子ヨ。與一兵衛は吹きけへで、案山子となる。所へテンテレツク、ツ、テンくで猪がでる。」出目「ム、圖武公だナ。コウいつもの様な歩きつきでは、牛と間違ふから、いせえよくかけださつしヨ。」圖武「大きにお世話だ、うつちやつておけ。」出目「ハ、、、、怪ききつて居るわ。」左次「ア、やかましい、からかふなく。」エ、そこでト、ム、いい事が有るく、圖武公は鑑ひぐるみの狐になるだ。」圖武「せめて一役は人間

を付けてくれても、いいぢやアねえか。」左次「何さ狐が本役だヨ。そこで稻村のかけからヒヨイと出て、倒れてある案山子を、チヨイと冠つて、猪の身振サ。始終定九郎は、化されてる思入で、猪とをかしみの立廻りをつけて、二人がおもひれ儲けさつしナ。」圖武「有り難いく。それで少し息をふつけへした。」左次「そこでいいほどに二人が仕ぬいたら、定九郎はかなはぬ體で逃げこむ。それをきつかけに鐵砲がヅドン。狐もこれに驚いて、案山子をはふり出して、稻村へかかれると、うしろが寐鳥になる、勘平が出て、案山子へ探り當つて驚く。これもいつもの通り、思入仕打勝手次第サ。好い時分に此の旦那が、ちやうちんをさけて出て来て、勘平が顔をすかし見て、勘平ではねえか。オヤおとつさんか、此のぶつさうな道を、どこへ行きなさるのだ、ひよつと定九郎にでもあつたらどうしなさる、あぶねえことだといふ。そこで旦那がいふには、馬鹿をいへ、與一兵衛ならあぶなからうが、おれは夜質兵衛だから氣遣ひはないト、爰で夜の質兵衛を被仰るがよからう。」質「成程夫れがようござりませう。」左次「それから勘平がいふには、モシおとつさん、お目出たいお座敷とは申しながら、此の様に怪我人のない五段目も珍らしい、祝つて一つめませうといふと、最前の狐も出て、シヤンシヤンく、オシヤ、シヤンくト狐拳になる。三人の見え宜しく幕としやせう。」アバ「奇妙々々。すつぱり筋が立つた。」番「サアそんならすぐに、稽古にかゝりやせう。」左次「よからうく。何でも素

人狂言は、稽古に遍かすがかゝらにやアいかねえ。」の「違へねえ、初日と千秋樂が一所だから、きまりはわりいはずだ。」ト、是れよりすぐに五段目の稽古、竝に當日狂言の滑稽草稿残らず出來致し候間、四編追加引續き賣り出し申し候。相替らず御見捨てなく御求め御高覽可被下候。

八笑人四編追加自序

什麼此の花曆の濫觴は、過ぎつるとし琴通舎の大人、江都名所の花を題として、諸君の玉詠を集め其の秀逸を撰りて出板したる摺本へ、チヨイトおまけの御愛敬、譬はば江戸節の會へ雇はれし能呂間人形、それさへ青は使はねば、四郎と仕組の池の端の茶番、井戸端の茶椀よりも、あぶなき趣向と思ひの外、今や四編に及ぶまで、看官の御待ちかねとは、盲人の打ちし眼七、思はぬ愛敬アバ太郎等が幸ひなれど、元來無四度童戯人、いつもながらの鮑屑、木端作者の著述ぶり、こつばづかしくの地口に通ひ、所謂下手の長咄、御見物の吠を恐れ、待たる、うちが花曆と、筆を置く事五七年。時に書肆は左にあらず。假令作者はどうなつても、己が竈をうるほさんと、心くつせず御催促、先生ごかしにおだてられ、さらば灰吹から蛇を出して見んと、嗽しながら筆を採る。

于時天保五年甲午正月

金龍山下の市隱

瀧亭鯉丈述

花 八 笑 人 四編追加上之卷

斯くて八人は五段目の趣向あらまし定まりしかば、例の酒盛となり、互に喰つつ喰はれつ、相かはらぬ悪地口、雑談に時をうつしける。然るに彼の勢州屋質兵衛は、ひとり煙艸入の底をはたき、あくびを呑みてたいくつの體。左次郎は氣の毒におもひ、左次「モシ質兵衛さん、一ツあけやせう。マアちつとこちらへおいでなさいまし。」質「へい、イヤもうおかまひくださりますな。わたくしはトツト御酒は不調法でハ、、、。」出見「さやうではござりませうが、平日は勢州屋の旦那様だが、此度の一件では、同じ役者仲間といふものだから、其様にかたく許りなすつては、稽古が仕悪うござりやす。まア御酒はともかくも一ツ上げやせう。」ト、させば、猪口を丁 質「へい、さやうならわざつとお杯ばかりいたゞきませうが、御酒は何分にもごめん下さりまし。」ト、迷惑さうに呑むまねをして、懐のみ口をていねいにふき、手に持 質「エ、ト是れは矢張あなたへ御返濟申しませう。」出見「へい私へ御返濟かネ。まづお静かに、これは御きんとうでござります。かうさへなさると、又いつでも御用立ちますハ、、、。」ト、冷かされて 質「イエ、私へは、もう御免下さいまし。おほしめしは有り難う存

つし。」香ム、行かうか、マア先へ行かつし。そつちで、「向うよりくる小提灯、是れもむかしは弓張の。」テンくくト語り出すと、おれがこゝから出て行つて丁度いいぜ。」出目「なんの面白くもねえどうでもいい事だ。サアそんなら早く来さつしヨ。」香「早くといふ譯にはいかねえ、マア先へいつて向うよりくる小提灯。」出目「エ、わかつて居るわしつツこい。」香ハ、、、實は小提灯のうち大きいもんで、キユウと一杯きめて行かうといふたくみヨ。」出目「いまくしいいぢツきたなだぞ。さういふ事なら、まづおれが先へ此の小提灯で、二三杯。オイ卒公ついで下つし。」香「そんなら己もこの提灯へ、たつぷりついで下つし。」眼セ「エ、うるさく呑みたがるぞ。コレ呑ませめえとは言はねえから、する事を了つてゆるりと呑むがいいぢやアねえか。」野呂「さうサ、そして提灯で餅といふ事はきいたが、提灯で酒を呑むやつはねえ。」圖武「そしてあんまり呑んで無法酔ひ喰ふ小ぢやうちんとなつては、稽古も何も出来はしめえ。」左次「サアく又地口盡しがはじまつては長い。いいかけんに呑んだら。」卒八「どうしてく幾ら喰らつても、いいかけんといふ限はねえから、此の小提灯をとり上げるが一番いい。」ト、茶碗を取 香「サア提灯を取り上げられては、一足もあるけねえく。」アバ「どういへば斯ういふとうるせえ口だ。そんならもうこのおちやうちん限りときめて、ぐいぐい呑んでやく六疊へ行かつし。」香ム、それではもう、おちやうちんのお替りとはいかぬえの。」

アうるせえく。コレほんたうにヨ、てえけえにふざけたら稽古にかゝらつし。番毎いたゞくくせにくそ落ちつきでならねえ。」香「ハイくもう参じます。サア勘平さん御一處に。」出目「サアく行かう行かう。オイ囉子町から二三人下座帳をもつて来さつし、いつもの五段目とは違つてよつほど誂へがあるぜ。」アバ「へんまた御たいそう許りいふわ。サア皆があゆびねえ、どんな事をこたつくか見よう見よう。」ト、みなく六疊の間へ入る。出目助は床の間の前へし 出目「サア、はれ間を爰に松ウのオ、かアア、けエ、引デ、ンくく。」と、正面に笠をかざして居て、女どもが顔を見たがるところを、しばらくじらしていいかけんじれつたがらせて、と笠を手にもつてそらを見る、をんなどもは顔を見る。」野呂「ム、一時にどつと吹き出す。」卒「子どもは泣き出す。」眼「猫は逃げだす神はほえる。」目出「そんなふしぎな面があるものか。サアく向うよりくる小提灯だ。香公々々。」香「オイもう一ぱい呑むのか。」出目「じやうだんではねえ早くたたつし。」香「サアおらア半合羽の上へ、坊主合羽深編笠といふ拵へだ。」卒八「馬鹿なつらな、雨装束に編笠をかぶるといふがあるものか。」香「そんなら竹の子笠の深いやつをかぶらう。」出目「なぜ其様にわるひねりな事をしたがるのだ。」香「おれも出から直に顔を見せたくねえて。」野呂「なんのそんな面を大事がる事があるものか。」香セ「さう言はつしやんな、出る時顔をかくして、正面へ直つてぐつと見せると、格別ひつたつぜ。」卒八「へんおもしろくもねえそ

んな面を、引立つもぶつつわるものか、どうせ引け物だア。あんまりかくしだてをして、だしぬげにびよいと見せたら、ヘン氣のよわい化物は先でぶちけへるわ。」吞七「サア又面不足がはじまつた。まづそんならさうとしてさア出て来たヨ。」出目「よし／＼サア行き合つてすれちがつた。」アイヤ申し／＼、卒爾ながら、火を一ツ御むしん。」ト立ち寄れば。」吞七「旅人もちやくと身がまへし、ム、此の街道はぶつさうと聞いて合點のひとりたび、見れば飛道具の一口商ひ。得こそはかさじ、出直せ出直せ。」オイお囃子、爰で一ツ付がいるぜ。下座帳へつけさつし。出直せ／＼ハタアリと。」アバ「ばかばかしい。そればかりな事を帳へつけられるものか。」吞七「ヘン貳文が酢をかりるやうだ。」アバ「それだといつて、容體ばかりやりたがつて、ヘン芝居ごつこをしてあそぶ氣で居やアがるわ、とんちきめ。」卒八「コレ付でも鳴物でも、うしろは大丈夫だから、指圖がましい事をいはずと、そつちの稽古を身にしみるがいい。」吞七「ハイ／＼。さアそんなら、ア、引、」なんとやらして、エ、まなこをくばれば。」サア出目公。」出目「オイ、」エ、盜賊とのお目たがひ御もつとも、エ、引なんとやらして、エ、鐵砲それへおわたし申す、自身に火を付けおんかしと。」サア爰にたつぶり思入ありだ。先年源之がした仕打がいいから、源之でやるぜ。」十郎の事。吞七「ナニ源之でやるぜ。ヘンふいご祭りに何かゆがんたやうだ。」アバ「天窓がさいづちで、仕打が源之か。句は付いてるの。しかし吞公には源之は差合だ

らう。」吞七「なぜ／＼。」アバ「面が殺生石に似てるから。」吞「エ、やかましい／＼。サアその源之でどうするのだ。」出目「斯うだ、マヅ一通り紋切形なら」たじなき詞に顔付を、きつとながめて、和殿は早野勘平ならずや。左云ふ貴殿は千崎彌五郎、是れはけんごで。貴殿も御無事で。ム、是れはしたり。『兩方一しよにボント膝をた、くやつだが、處を源之でやれば。』吞七「膝をぶつこはすだらう。」出目「ひざアぶつこは、エ、引まぜつけへすなえ、つりこまれるわ。エ、なんだか忘れてしまつたア。エ、」たじなき詞に顔付を、きつとながめて、和殿は早野勘平ならずや。さいふ貴殿は千崎彌五郎。是れはけんごで。貴殿も御無事で。』とはいつて見たが、古朋輩にこの姿を見られて、面目ないといふころで、ふりかへつて一足逃けるを、山刀の小尻を押へて、彌五郎ばかり、「是れはしたり。』ト膝をた、くやつだが、こりやアいいぜ。」吞七「それではおれひとり膝をぶつこはすのか。」卒八「ムムひとりなら油藥は、一貝頭取から渡したらよからう。」吞七「イヤおればかりなら鐵槌にしよう、源之では何分おそれる。」出目「コレ吞公なんとまじめにやつてくれねえか。囃子町や猪子なんぞは、役不足でまぜつけへすも仕方がねえが、彌五郎なんぞはまうけ役でるながら、身にしてみても稽古するがいいぢやアねえか。」吞「ヘン彌五郎ぐれゑ、あんまりまうけ處もねえ。こつちは由良之助でもする氣だア。」出目「そんなら由良之助になるがいい、さうさもねえ事だ、己さへ承知なら出来る事だ。和殿

は早野勘平ならずやといへば、左いふ貴殿は大星由良の介、ア、語路がわりいな。」野呂「その時はさ
いふ貴殿は大星由良介サ。」眼七「之の字を抜くとうぎと安ッほいの。ム、力彌がいいく。左いふ
貴殿は大星力彌。」卒八「向う通るは醫者ではないか。」吞七「湯の尾峠の御孫嫡子。」圖武「ハアうんと
こどつこい是れわいサ。」野呂「サアく身振付のまぜつけへしとなつた、たまらねえく。」吞七「是
れサどうもならねえ。もうく役のねえものはあつちへ行つてくだつし、かうさうくしくつて何が
きまるものか。」出目「なんの手前から、湯の尾たうけのおんまごちやくしなんぞといふからわりい。」
吞七「それでもあんまりませつけへすから、ツイつりこまれるのだ。」出目「つりこまれるといふやうな、
甘口なことがあるものか、やつぱり身にしみねえからのことだ。サアく皆あつちへ行つて下つし、
邪魔たく。」卒八「なんだ囃子町に下座帳をもつて来いと、いつたぢやアねえか。コレお江戸のお囃
子は、さう自由には追ひ廻されねえぞ。」出目「チョツいまくしく氣ばかり強くつてならねえ。素ド
ンチキめらにかまはず、ふたりは車輪玉でやるべエ、なア吞公。」吞七「ウ、無役どもは、うらやまし
がつてそねみだ、かまはねえく。極まじめでサアやるべエく。」貴殿もけんごで。是れはしたり。」
トきまつたわ。」出目「ム、よしく雙方しやがんで、爰にちよほがすこしあつた。エ、引何ヨ、「たえ
て久しき對面に、主人のお家没落の、むねにわすれね無念の思ひ、たがひにこふしを握りあふ。」ト雙

方思入だ。」野呂「フイ總一ツぱいは折り返しだらう。」出目「吞公なんといつてもかまはつしやんな。」
吞七「よしく極まじめだ。」出目「エ、勘平はさしうつむき、しばし言葉もなかりしが、「ハ、面目もな
きわが身のうへ、古傍輩の貴殿にさへ、顔も得上げぬ此の仕合、武士の冥加につきたるか。殿判官公
の御供先、お家の大事發りしも、是非に及ばぬ我が不運、その場にも有り合はさず。」コレサ吞公、何
をうつかりして居るのだ。おれがせりふのうちだとつて、さう氣ねけがして居ていけるものか、腹を
いれねえと見とむねえもんだぞ。」吞七「コウく奇妙なものだなう。」出目「何がヨ。」吞七「きん玉と
いふものは。」出目「何だだしぬけにふざけた事を。」吞七「口をきくたンびに上ツたり下ツたりするな
う。」出目「ナニ。」ト、心づき、おのれがしや「エ、馬鹿々々しい。こつちは脾腹もんで、せりふ廻しに
骨を折つて、車輪でやるから、ツイ取りみだすのだ。コレサ稽古事にか、つて、さう外へ氣がちなや
うな事ではいけねえぞ。」吞七「さうでもあらうが、其の品をば取り込んでもらはねえと、どうも眼ざ
はりでならねえ。そして上り下りのはたらきがあるだけ、どうも目についてならねえ。」出目「チョツ
マアサ、是れをば取り入れるが、ほんによ、身にしみさつし、おらア車輪玉だヨ。」卒「しやりん玉
ならいいが、しやがん玉ぶら付きでは、吞公も見氣になるはずだ。」出目「エ、又やじ馬が出るヨ。
サアく爰の長臺詞は、俺アぐつと承知だからいいとして、吞公ちつとやつて見さつし。エ、と、「ぜ

ん非をくいし男泣、ことわりせめてふびんなる。彌五郎も道理とは思へども、大事をむざと明かさじと。『サア詞だ。』吞七「何サおれもせりふは鶉だから、いち／＼申し上げるにおよばずだが、ちよいと山があるて、エ、『郷右衛門殿旅宿の、所書進上申す。』ト腰から矢立を出しやす。そこで鼻紙へ書かうとして、矢立の墨がかれたといふこなしあつて、あたりを見廻し、其所へぬいで置いた笠へ、雨水のたまつてある思入、笠をとつて墨壺へ雫を落して、書付をするといふ仕打はよからう。』野呂「ちくしやうめ、こまかにおほくるナ。しかし其の時提灯はどうする。』吞七「エ、提灯か。』アバ「四拾八文のぶらがいい、所書をする時、ト襟へさしやす。』圖武「へん、柳原で手の筋を見てるるやうだノ。』出目「それはおれが持つて居てもよし、また以前、出直せ／＼の時分に、松の枝へかけて置くなんぞもよし、そこに差間へはねえが、せりふは實にしようちか、よつほど長いぜ。』吞七「その儀はすこしも案じ給ふな。たかが彌五郎ぐらゐの端役は、朝飯前の仕事だ。どうせ總ざらひには、ほんたうにたつて見るからよしと。そこで、『さらば／＼』と両方へ、立ちわかれてぞいそぎ行く。』サア是れから今の、又もふりぐるまだ。眼公、質兵衛さんを呼んでやつて見さつし。へん丁度いい相手だ。』眼七「へん何とでもいはつし、どうせ圖なしにもらつた役だから、天窗はあがらねえ。』ト、左次郎が眼七「サア左次さん、ちよつとたつて見やせう。質兵衛さん、たいてい筋は通りやしたかね。』眼七「はい／＼、イヤ

何かどうも甚だ不調法で、へ、へ、へ、へ。』左次「今まで足下のかはりを勤めて、よつほどやつた處よ。』眼七「ハア、さアそんなら六疊へおいでなせえ。こゝからすぐに切幕を出たつもりで、うしろから私が呼びかけて出て行きやすぜ。』質「ハイ／＼。』左次「モシその棒を杖にして、今いつた通り、ふくらはぎへ力を入れて、前へかゝんで、ソレ今のやうに斯ういふ身で歩行くだ。』質「ハイ／＼此のあんばいかネ。』左次「マアさうさ、さつ／＼とおいでなせえ。』眼「オ、イ／＼、おとつさん／＼。是れささつきから呼んでるるに、おめへ耳がとほいの。コレこのぶつさうな街道を、年寄の夜道、おめへもよつほど大膽ものだけ。サ、わしがおくつてやりやせう。』質「へエ、もしおまへのお詞と、左次郎様のおつしやつたとは、餘程相違いたして居りますやうでござります。そして私の事を、おとつさんとおつしやつては、定九郎は與一兵衛の俸のやうに思はれませうが、外々なら大抵のまちがひは宜しうござりまするが、先刻申しますとほり、いたつて物がたいお屋敷さまで御座ります故、すべて申し上げる事にすこしでも間違がござりましては、お役人方までが落度と。』左次「なにさ質兵衛さん、それはふだんの御用向の事、狂言といふものは、先様で御存しの事でも、すこしづゝかはつてするのが、かへつてお慰みになるものでござりやす。まづサ本文の通りなら、オ、イ／＼親父どの、最前から呼んでるるに、こなたの耳へははひらぬのかトやるのだが、それは昔風で、大じまのどてらに丸術を縮めて、

山岡頭巾をかぶつた拵への詞、近年は黒羽二重に緋博多の帯、蛇の目の傘といふ粹にすごい拵へでいきやすから、ソレ詞も今風に、オイおとつさんと洒落ていふのサ。何でもつまる處は、定九郎といふ浪人が百姓の親父を殺して、金を取るといふ筋さへ通れば、詞はどう違つても構はずにおやんなせえ。ア、引咽がひつつくやうだ、眼公湯でも水でも一ぱい下つし。」質「へいへい、かしこまりました。しかしながらかやう申してはいかゞで御座りますが、あなた方はこのたび、わたくしが頼み申しておいで下さりまするわけ、エ、まつた私は、數代永久お出入をいたしまする事ゆゑ、あまりしやれがましい事を申しあげましては、後々身分にも相障ります故、私許りはやはり本文の通り、申し上げたうござりますて。」左次「ア、引どうもならねえぞ。其れはサ、するぶん本文の通りでいいのサ。いいけれどさうきちやうめんには、覺えられめえと思つて、あらまし大筋を覺えて、詞は出たらめにおやんなせえといふわけサ。オイ眼公、足下の料簡で一ばんあしらつて立つて見さつし、おれはしばらく見物だ。七山市十郎たのむく。」ト、さすがの左次郎ももてあましてぞ居たりける。

四編追加下之卷

扱其の日ははじめとして、質兵衛は早朝御にて辨當を持ち、毎日稽古に來るゆる、みなくも大き

によりければ、日數つもれば少しは形も出來て、あらましはこじ付くやうなり、誂へ置きし諸道具などもとり揃ひ、はや當日になりしかば、日雇をたのみ、諸色をもたせ、かねて仕組みしチヨボ語りの太夫を同道し、質兵衛が案内にて、かの御下館へ行きけるに、はや諸出入の町人、おひくつどひ來て、皆それぐに休足部屋仰せ付けられ、八人の僮忽者もいつぱし役者の氣取にて、とある部屋へ入り休息する。アバ「なんと左次さん、たいそう廣い御座敷だなう。まづ草履をぬいでから、凡そ小一里も歩行いたやうだが、歸りに道が知れようか。」左次「さうよ、迷子札でも付けてくれればよかつた。」質「イエ、その儀はけてお案じなさりますな、御用相濟みまして、おいとまさへ出ますれば、お役人様方へおねがひ申して御案内のお人をくだされば、もとのお口までは出られますに相違はござりません。」左次「ハア左様か、それでは安心だ。ナアアバ公。」など、皆うち寄り質兵衛をひやかす。扱まの役者の所持の鏡臺、又は化粧道具、湯呑の類まで、そのとほりに平日こしらへおく故、わづかの事にもかの諸道具をもちあるき、己が部屋とさだめし所へ鏡臺をすゑ、その外の調器をこしのまはりへうるさく並べ、おのれが役の二幕三幕も前より、あたまでは下地になほし、銅盥を取り寄せ棟をつかひ、樂屋著らしき浴衣に、ひらぐけの帯、上草履にまで心もちる、襟から胸へばかり白粉をつけ、しとねになほり、鏡とにらめくらをして、長煙管にてそばに居る人に煙草をつけさせなどして、すべて舞臺より樂屋ゴツコをおもに楽しみ、幕を引きずる事甚だな。役人「イヤ是れがし。見物の身にとりては、しごく迷惑なるものなり。〇扱しばらくあつて繼上下の役人きたり。はいづれも、今日は大きに御苦勞、上にも殊の外おたのしみで、ハ、ハ、ハ、ハ。時に質兵衛殿、お樂屋からおはしが、りのお幕まで、廻る間數が不勝手では、チト知れ兼ねる間がござる故、ちよつと案内

いたして置きませう。」質「へい／＼それははや御念の入りました有り難い仕合、さやうなら御無禮ながら御案内くださりまし。左次郎様あなたさまと御一處に御見分を。」左次「はい／＼、しかしそれは私より、むかうへ廻るものが呑込みさへ致せばようござります。出目公眼公呑公と質兵衛さん圖武公とちよつとあなたさまにお付き申して見て來さつし。」みな／＼「へい／＼、さやうならお世話さまながら、御案内くださりまし。」圖武「へん、なにおいらなんぞは見てくるにもおよぶめえ、どうでもいい。」眼七「コレサ馬鹿な事、猪がうしろから出て横から出て大變だ、ぶしやうな事をいはずと、一處に歩ばつし。」役人「ハ、ア貴公猪かな、ハ、、、。ヤそれは一しほ御大儀ナ。」呑七「へい是れは圖武六と申しまして、年中首が廻りませぬ身分で、毎年大晦日より松の内二十日ごろまでは、獅々をかむりまして忍び歩きます故、殊の外猪なれてをりますに付き、このたび役を申し付けました。この段お上へよろしう御披露くださりまし。」役人「ハ、、、それは格別おもしろい事でござらう。」圖武「ム、シうぬばかり役者の氣でへんつらがいい。イエわたくしは由良の助の役は、たび／＼つとめましたが、猪は今度が初役で、いつたい私は鬮弱いゆゑ、かやうな端役を取りまして。」左次「是れサ何をくだらねえ事をこたつくだ。あなたさまもおいそがしい、はやく御案内をながつて、見分して來さつし。」へい／＼「左様ならこのものどもを、お引きまはしくばさいまし。」

ざれ。」合はせ、臺衣裳等取調べなどするうち五人は部屋へかへる。眼七「なる程案内がなくつては知れぬえ知れぬえ。」野目「ハア西の下はよつほど長いかの。」呑「イヤサ長い許りならいいが、同じ座敷ばかりあつて、そのうへニツ三ツ曲りくねつてよつほど知れにくい。」卒八「ハアそれぢやア向うへまはる者は、するぶん手廻しをして早めに廻らねえとまごつくぜ。」ト、話の中おまかなひ。役人「これは何れも御退屈で、ヤ鹿末ながら上より御酒を下さる間、まづゆるりと參らしやれ。」質「へい／＼是れはまことに冥加至極、おありがたい仕合。はゞかり様ながらお上へ宜しうお禮を仰せ上げられ下さりまし。左様なら皆様お聞きの通りお上より、下しおかる、御酒、ア、有り難い事で。エ、私めは御存じの通り、御酒は一向に御不調法でござりまするが、是れは外なりませぬお上のおほしめし故、お杯に一ツ頂戴仕りませう。」ト、杯へなみ／＼と一ツ受け、ちび／＼と。質エ、是れは左次郎様へあけませう。」左次「へい／＼いたゞきませう。へいこれは皆の者へお手當下し置かれまして、有り難い仕合、お時宜なしに頂戴仕ります。併しながらあなたさまには、何かど御多用に入らつしやりませう。どうぞ是れへ差しおかれますして、おかまひ下さりますな。」役人「成程々々、しからば給仕のものを是れへさし置きますゆゑ、隨意に澤山まるらしやれ。何事にかぎらず手づかへの事がござらば、此の者へ申し聞けられい。ア、屋敷の料理は、貴公達の口には合ふまい、ハ、、、。」質「イエ／＼御勿體ない事、

にも及ばずと、あんまりお愛想がねえ、油墨をこせへて前歯を一本書かうか。」ト、聞いて質兵衛「質」イ
 エイエ、どうぞ齒は此のまゝ、差しおかれてくださいまし、あとくで難澀いたします。勿論與一兵衛
 の役に、齒がそろひまして相濟みませすは、御前へ向きます節は、ぬけた分で口をひらきませぬやう
 に心掛けましたら、夜分の事ゆゑ、遠目にはしかとわかりかねませう。」などくだらぬ事をわるくどく
 きをかしくも思はず、また、扱本舞臺には、はや大序始まりて、夫れより段々おひくく相濟み、いよ
 いよ五段目となるゆゑ、明手のものは、大道具を飾り付け、小道具諸色をもつて舞臺へ廻る。チヨボ
 語りは牀へ上り、左次郎は拍子木を持ち、上草履などはき、樂屋より知らせの木を入れ、すべて黒々
 とやる。残る三人は囃子へ廻り、出目助は勘平の拵へ、いつもの形にて松陰につくばひるる。吞七は
 彌五郎の拵へにて向うへまはる。樂屋は其の幕毎に連中入り替りく、他人無陀人はすこしもまじへ
 ず。こゝはお屋敷だけ極りはよし。扱口上濟めばチヨンくくくと、幕明く。牀にて、淨るり「鷹
 は死しても穂はつますと、たとへにもれずゆふ月や。」ト、だんく置淨瑠璃あつて、「はれ間を爰に松
 の陰、向うよりくる小提灯、これも昔はゆみはりのの、ともし火消さじぬらさじと、合羽の裾に大雨を
 しのぎていそぐ夜の道。」ト、詞のチヨボまで語れど、彌五郎出でざれば穴をふさがんと、牀にては、
 何かわからぬ出たらめを語れば、出目助もいらく思入にてつなげど、一向出ぬもことわり、先刻役

人の案内にて切幕へ廻る間取を承知しながら、例の早のみこみにて曲り所を違へしゆゑ、行けども行
 けども切幕へ出す、だんく手間取るにつき心はせき、如何はせんと取りのほせ、だんくくと奥深く
 ゆく程に明座敷ばかりゆゑ、人にたづねんにもせんかたなく茫然と立つたるが、はるか左の方にて、
 樂屋にて打つ雨の音少し聞ゆるを心當てに、一間をぐわらりと明くれば、内に繼袴著たる立派の役
 人三四人詰め合ひ居て、吞七を見てびつくり、さすがはめまり役の人と見え、押取り刀に立ち上り、
 物をもいはず吞七が胸のあたりをした、かに突けば、吞七はあふのけに二三間なけだされ、次の間の
 敷居にて、天窗をした、かうち、鉢巻と共に鬨ぶしはいづくへか飛び散り、しばらく氣絶して正體な
 し。残りの役人はたゞ、「シイッくシイッ。」トいふのみ。御前近くと見え、有無をいはず、先に突き
 倒したる役人、岩永左門は手ばやく吞七を押へ、はるか別間へ引きすりゆく。外役人もあつまり、
 左門「ヤイ、おのれ何やつなればお次まで尾籠の振舞、お座敷うちを土足にてしのびの體、コリヤ今晚
 のお取込に乗じて、盜賊に相違ない、ふとゞきなやつ。」と、懷中より早繩を出ししりあけ、手をう
 つて下役人を呼び、下役「吟味は追つていたす、まづおひけの相濟むまでは、物しづかにこやつ取りに
 がさぬやうに、大切に番をさつしやい。」下役「へいくかしこまりました、サアうぬ立ち居らう。」ト
 引立てる。吞七はいひわけせんにも、あまりに思ひがけなき災難、殊に胸をつよくつかれ、そのうへ

敷居にて頭をした、か打ちけるにぞ、いまだ生氣つかず、只ばうぜんと是れまで引きすられ、うつと
 りとして詞もいはず。役人のうちより、少しやはらぎたる人秩父繁太夫、驚岩永殿、チトおひかへ
 なされ。此の者最前より見分いたすところ、甚だ胡亂の體にはござれども、化粧どもいたし居る體、
 萬一今晚の役者どものうちかもはかり難うござる。コリヤ／＼われは若しや役者に上つたものではな
 いか。ト、この聲にてすこし正氣付き、香七「へい／＼役者でござります。」左門「ハ、ハ、ハ、イヤ盗人
 たけん／＼しいと、この方で役者かと申せば、すぐにその尾について、へい役者ぢやと申しをる。コリ
 ヤヤ此方どもいかに在勤もので、芝居事など不勝手ぢやとて、おのれがやうな見たうもない面の役
 者が有らうと思はれうか。推量にも知れて有るわ。イヤ秩父殿、これは今晚のお狂言に付き入りこむ
 やつゆゑ、わざとまぎらはしう出立ち居つたでござる、につくい奴。コリヤかやうな不時も有らうか
 と、上屋敷よりわれ／＼詰め合ひ居るわ、明日は急度吟味いたす。」手の侍打ちまじりかけ來り、岩永さ
 ま岩永さま、この者は只今お舞臺へまかり出でまするところ、延刻いたし殊の外差しつかへ、一同迷
 惑仕ります様子にて、諸方相尋ね居りますゆゑ、何か不調法の段は追つての御沙汰、唯今差しか、
 りお舞臺の手筈相違いたしましては、上の御不興の程もいかゞ、まづ／＼拙者どもへしばらくおあづ
 け下さりませし。」ト口々に詫言ければ、重役人も先刻より、香七がそぶり相違もあるまじくと心はつけ

ど、あまり手ひどく取り極めしゆゑ、すぐにも許しにくく、いかゞせんとためらひし折なれば、此の
 詫言をさいはひと、左門「フンしからば貴公達へまかせ申すが、以來かやうに御前ちかくへ、徘徊いたさ
 ぬやうに心付けさつしやい。」ト、是れをしほに繩をゆるし、重役人は立つて奥へ詰める。又若手の役
 人はすべて狂言どもにかゝる能樂人などには、何か親しみたく、樂屋のぞきをしたがる人物まゝ、あ
 るものなり。夫れより香七をいろ／＼介抱し、重役人をさみしなどして種々取りなし、若侍「時に最前
 から貴公が出ぬとて、仲間の衆が殊の外心配の様子ぢや。まづ些とも早く出さつしやい、早く／＼。」
 トせき立てられ、香七はたゞ取りのほせ、夢のやうにて何の思慮もなく、若侍の云ふにまかせ幕を
 きらせる。扱又舞臺にては、チヨボ語りもいろ／＼出たらめの淨瑠璃をかたり、もはやよき時分と、
 何とやらして千崎彌五郎、チ、チンチン／＼／＼などと呼び出して見ても、すこしも出でず。出目助
 も何かくだらぬ思ひつきなどいろ／＼仕盡し、せんかたつきて牀にて、淨り「さらば／＼と勘平は我
 が家をさして歸りゆく。」ト、出放題をかたれば、出目助も是れさいはひと、何かまご／＼しながら、
 花道へはひるゆるゑ、牀にては、淨り「又も降りくる雨の足、人の足音とほ／＼と、道は闇路にまよは
 ねど、子ゆゑのやみにつく杖も、すぐなる心かたおやぢ。」トこの淨瑠璃を聞き、質兵衛はこけの一心
 に、かたく覚えし事なれば、よき程に切幕より出で、だん／＼舞臺の方へ歩む。牀にては、淨り「一

筋道のうしろから。」ト呼び出せど、又定九郎いす。又も一同に氣をもみ、左次郎は拍子木にて向うを招きなどしてあせるところへ、切幕の音チャリ、と明くゆるゑ、うれしや定九郎と思ひの外、吞七は若侍にせき立てられ、のそりと出でたる形を見れば、提灯も笠もなく、鉢巻鬘ぶしの落ちたるも知らず、ばうぜんと出でたるを、舞臺よりみなく見付け、びつくりして後見囃子も一同氣をあせり、舞臺より手眞似にて、あとへもどれと教ふるもあり、又はやくこちらへ来て、樂屋へ入れとまねくもあり。吞七はうつゝの如く、泥に酔ひたる鯛のごとし。先刻よりの不始末、たれも知つたる五段目の事ゆゑ、御翠簾の外、諸家中の見物五節句の外、につこりともせぬ石部氏まで、一同たまりかね、御前も思はずどつとわらひ、しばし物音も聞えず。吞七はなほく取りのほせ、先を見れば與一兵衛が出てゐるゆゑ、猶又ハットどうてんし、今更あとへもはひられねば、下座の口へはひらんとこゝろざし、質兵衛が跡よりさつくと歩み、すれちがひさま黙つても通られずと、捨てざりふにいらざる思ひつきをいふ。吞七「親父どの此のぶつさうな街道、ア、氣丈な事な。」トいへば、質兵衛は元より取りのほせてゐるゆゑ、吞七を定九郎とこゝろえ、質「ハイ、年寄の夜道、いたしたくもござりませぬが、何處のうらでも金程大切なものはござりませぬ。」ト覺えたる通りさつくとせりふをいふ故、吞七すくにも引込みにくく、何かまごころしてゐる。又「眼七は質兵衛と一處に、最前切幕へ廻り

たりしが、吞七が行がしれず、しばらく間のぬけたるうち、吞七を尋ねんと、あちこちと見廻るに、不圖庭の井筒を見付け、總身をぬらして出でんと、まうけ氣をばづし、早々庭に飛び下り、大小を抜いて井の端へ置き、傘をひらき置きてつるべを釣り上げ、天窗より三四杯さつさとあびるうちに、彌五郎勘平の合もなく、勘平は閒ぬけに引込みしかば、思ひし程より與一兵衛の出早くなり、はるか舞臺のかたにて、淨より「一筋道のうしろより。」ト呼び出す聲におどろき、ハットうらたへ井戸端にて、眼七「オ、イ、く。」トいひながら、傘をもち水だらけの儘、遠慮もなく座敷へ飛び上り幕を明けさせ、眼七「オ、イ、く親父どん。」ト出づるにぞ、質兵衛は定九郎が二人出で來しかと、けでんしてふりかへれば、樂屋のものはたまりかね、吞七をひとつとらへ、有無をいはず下座へ引摺り込む。そのさま二丁町にてトンチキを引き出す様なり。あとは定九郎與一兵衛兩人となり、やう／＼すこし五段目らしくなる。質兵衛は律儀に覺えしゆゑ、仕打はなくとも約束のきつかけ、せりふまでも間違ひなければ、可なりに狂言めきたりしが、いろ／＼有つて、眼七「エ、むごい料理がいやさに手ぬるういへば付け上りのした、こゝなおいほれ親父め、サアたつて金を出さぬとぬかしやア、コレ二尺八寸。」ト腰を見れば、最前水をあびる時井筒のふちへ大小を置き、そのまゝうらたへ出でしゆゑ、大小はなし、今さら丸腰に心づき、ハット思へどせんかたなく、うしろに付を打つてゐる卒八に、小聲にて、「庭の

井筒に大小が有るから、早く取つて来て。「トいふも、與一兵衛に出たらめをいひながら、チラノと
いふ故聞きとれず。卒八「エ、エ何だと、エ、エ。」と一向わかりかねる。眼七はじれこめどせんかたな
く、眼「ヤイ親父め、此の貳尺貳寸の傘、伊達にやアささねえ。たつていやだとぬかしやア、此の
傘でた、き殺すが、おやぢめ返事アド、どうだ。」ト、これより眼七は口から出次第、仕打も仕次第
になれば、律儀に覺えし質兵衛は承知せず。小聲「質」モシそれではちがひます。」聲にて、眼「エ、
もう斯うなつてはしかたがねえから、早く死んで仕舞ひなせえ。」大聲「エ、しぶとい親父め、黙つて
くたばれ。」ト傘でしきりにぶちながら、小聲「早くだアといひなせえよ。」質「それでも傘では死
ねません。おまへ刀をなぜだしなさらぬ。」此の時眼七は大きにじれこみ、眼「エ、その刀がねえからの
ことだ、あんまり氣がきかねえ。なんでもいいから、ダアと倒れなせえよ、エ、不器用な。」トはすみ
に質兵衛をした、か打てば、質「アイタ、。コレ、なぜそのやうなひどい事をするのだ。みんな
そつちで間違へておいて、じれることがあるものか。」ト傘へ掴みつく。眼七はもてあまし、引つた
くらんと傘を引き合ひながらうしろへむき、眼「オイ早く引ッころばしてくれねえか。」トいへば、
焼酎火をつかつてる卒八はこ、ろ得、質兵衛が足を取つて引き倒し、やう／＼ふきかへの案山子を
出す。質兵衛はまづ黒になつて腹を立ち、質「コレ年寄をなぜよつてか、つて手ごめにするのだ。」ト

卒八にかゝるを、左次郎、アバ太郎、野呂松など取押へ、手返にしてやう／＼消幕にてかくし、うし
ろへ連れ行く。牀にて、淨り「あへなく息はたえにける。仕すましたりとくだんの財布、くらがりみ
みのつかみよみ。」眼七「フ、五十兩、久しぶりの御對面かたじけない。」ト、是れより眼七はひとり
舞臺、案山子を相手に唐茄子をくはへ、化されの仕打十分にやる。淨り「上置はねは我が身にかゝる
とも、しらす立つたるうしろより、一散にくる手負ひ猪。」テンテレックツ、テン／＼と太鼓につ
れ、圖武六は縫ひぐるみの狐にてヒヨイと出で、彼の案山子を冠り、約束のとほり猪の思入れ。うし
ろは化物めきたる鳴物にて、定九郎とのをかしみの立廻り、こればかりはかなり見物も受けたるやう
すゆる、兩人もぐつと乘氣になり、圖武六はしきりにはすみて飛びはねれば、うしろで遣ふ焼酎火へ
突き當り、かむりたる蓑へ火うつりて一度にくわつと燃えたてば、ワットおどろき案山子を捨てんと
すれど、繩が手足へからみ、うろつくうち一重の縫ひぐるみへも焼き付くにぞ、一生懸命にかなぐり
取つて投げ付くれば、眼七が顔へ打ち付けられ、胸より腹まで灼傷する。後見囃子もかけ出し、やう
やうと揉み消せば、眼七おもはず大聲に、眼七「アツ、。。」トいへば、圖武六は早速に、圖武「コオ
ン」眼七「アツ、。。」圖武「コオン。」ト、此のくるしがりの思ひ付きをしほに、左次郎は拍手木、
チヨン／＼／＼ト幕を引く。

相かはらずしくじりけれど、大序より十一段の内、五段目程をかき幕はなしと、殊の外御意にかなひ御機嫌よろしく、御賞美あつて御酒など下され、あやまちの高名にて、いづれも首尾よく歸宅する。

史記に滑稽傳有り。素滑稽とは滑稽の人、是を非の若く、非を是の若く、同異を亂す事を言ふ。洒落は物の洒落て濟ませし意なり。山谷が周茂叔を斥して、人品甚だ高し。胸中洒落たる事光風霽月の如しと云ひしは、更に物に貪著せず、串戯交りに風流に遊ぶを洒落た人も云ふべきか。舊友瀧亭鯉丈子は、常に滑稽洒落を弄び、世の中を絲瓜の皮とくらし、閑暇の筆すさみには策子を著はせり。所謂花曆八笑人、滑稽和合人、大山道中記、箱根草等則ち是れなり。克く看官の腮を解かせ、腹を抱へさせしより、童戯人の稱高く聞えたり。惜しいかな居を黄泉に移ししより其の遺稿絶えて有る事なし。發客遺憾に堪へず、此の頃予に其の嗣作を乞へり。從來孤陋にして世の流行を知らず、拙き著作を以て木に竹を接ぐ誹謗を得ば、先板の評判まで貶す基となるべしと、固辭して需めに應ぜざりしが、過日瀧亭子に、八笑人の復稿を談柄に聞く由有りけりと、大概を板元に告げしかば、其の儘稿を脱せよと、再應の求め黙止し難く、然れども机上繁多の故を以て筆を採るの違なく、既に中冬に至り漸く硯を是れが爲に發き、一員二員草稿成りしを備書削劂を勞して、以て新春發兌の售價に附す。倉卒の間疎漏急迫にして校正に給暇なく、他の胡盧とならん事、慙愧に堪へずと雖も、唯其の遺意を次ぎ、懷舊の情を述ぶるにあり。白樂天が舊詩卷を感じ十人の酬和九人はなしと吟ぜし憶ひありて、あるはなく、なきは數添ふ世の中と、小町の詠みしも年歲似たる花に浮氣れ、身の毫を忘れて謾に

花曆八笑人五編序
秃筆を走らす事しかり。

二〇四

東都楓川の市隠
一筆庵主人誌

維時丁未年仲冬稿成己酉年新發兌

隅田堤の秋の七草に蟲の音なら
ぬ狸はやしを聴く月見船の滑稽

世の噂

砧のおとを野狸

あは太郎「コウ左次さん聞かッし。此の名題は寶船の歌と同じことで、うへから讀んでも下から讀んでもおなじ事だぜ。マアざつとした事が、おいらたちの案事は名題からして斯う骨を折つて工夫するから、埒のあかね笥だらう。茶番に廻文の趣向はどうだ〜。」
「きぬたのおとをのたぬきサ、何くわいぶんもたうぶんもいらねえことはねえ、是れから脚色の本よみを聞かッし、とうざい〜。」

花曆八笑人五編前口上

二〇五

江戸一筆庵主人戯編

世の中の義理も絲瓜も瓢箪も、構はでぶらり日を送る、遊惰仲間なまけなまの八笑人はっせうじん、一別ひさし以來よりにて左次郎さじろうの蓮池亭れんちていに墨會すみあひる約束やくそく、卒八そつぱち、阿波太郎あはたろう、出目助でめすけの三人連さんにんづれ。あは「コウ出目公でめこう、廣小路ひろこうぢから橋はしの側そばへ斯かう曲まがつて木戸きどを這へ入ると係かけて主ぬしと解とくぞ。」卒そつ「ナゼく。」あは「どんくといふからヨ。」出目でめ「だしぬけに何を言いふかと思おもつた。鈍ど々とは其方そつちの事ことだア。」卒そつ「ナゼ。」出目でめ「なぜの神かみと竝ならんで幫閒たいこま許ゆるりしてゐるからヨ。」あは「太神樂たいかぐらの挾箱持はさみほこもちちやアあるめえし、太鼓たいこを持つもつ奴やつがあるものか。金持かねもちの旦那だんなを面白おもしろく遊あそばせてやる座持ざもちといふのだ。」卒そつ「癩癩持かんしゃもちや疝氣せんきもち、厄介やくかいもちの焼餅やきもちより些ちつとはいいな。」あは「また彌次馬やじうまに出でるヨ。それく足元あしもとの悪いわるい、よろけてぬかるみへ尻しりもちでも搗つくと節ふしころもちだせ。あは「ころんでも只是ただは起きねえからいいのサ。」卒そつ「主ぬしちやアあるめえし。」出目でめ「ぬしでねえ代かりに馬うまだらう。」あは「大福餅だいふくもちの懐ふところの暖あたたかいのを相手あひてにしねえけりやアつまらねえ。」卒そつ「大福餅だいふくもちといへば、モウ是これから寒ふくなる」と此處こゝは立ちたちきれねえぞ。」あは「ぬしだの出目公でめこうなんざア冬ふゆも夫それ、爰こゝの横町よこちょうと同じ

事だからヨ。」出目「吹抜でゐるといふ落ちか。」横町も皆此の邊にある地名なり。三人「ハ、ハ、ハ。」あは「甘く悟つたな。」卒「うまくささる筈だ。餅づくしで爰まで来て、出島と白下で喰へめえと思ふから、氷おろしと三盆を遣つて置いた。」あは「酒を止めて下戸になつたな。」卒「爰を歩行くうち下戸ヨ。」出目「コウ見ねえ杵屋の宅は綺麗で見晴らしがいいナア。」この杵屋六翁といへ。卒「きねやといふけれども、春くのぢやアねえ、引くのだから白屋といふといい。」出目「うさアねえ。」あは「嘘はねえといふ氣か。」出目「野暮をいふぜ、白はねえといふ洒落ヨ。」あは「それでも挽白と搗白の二種あるからヨ。」卒「貳朱あるなら穴甚か安達屋。チト廻りだが大和屋でもお供とやりてえ。」この名前は此の邊の鰻屋なり。あは「二種とは二色といふ事だア。二色と云つたら文盲な主達のゑ、役者の口眞似する事だとおもふだらうが、二品といふのだけ。」卒「扱は變だぜ、二品は臺一ひよこ三ひよこ。」出目「蛇ぬらくなめくで参りやしよ。」あは「サア來たぜ。」ト、左次郎の門口へ三人きたり、出目助と卒八かくれて居。あは「眼公々々、オイこんな物を持つて來た。こゝを明けて下つしな。」ト、聲をかけられ、がん七何か勝手に酒の肴を、がん「なにを持つて來たのだ。」ト、表の格子。あは「トいつて爰を明けてもらつたのヨ。出目公と卒八といふお土産だア、珍らしからう。」がん「そんな事だらうとおもつた、いめえましい板めへ最中だア。」いためへとは料理人。あは「庖丁は安齋だらう。」がん「北條時折ヨ。」出目助碎八遣。卒「庖丁全體今の間に、御席の喰ふ役はあれやこれ

やは知らなんだ。」ト、貝をとつて見せ。がん「赤貝なんぞにや克くさくさうだはどうか。」出目「こいつは丁度うまくはまつた。三杯酢か甘煮か。」がん「何でもいい、甘煮くはせるから二階へ往つてゐさつし。」出目「道端の槿花は甘煮喰はせけりか。」あは「それぢやア洒落にやアならねえぜ。」卒「洒落にやアならねえとお許しが出ねえでも、一杯のむと洒落が胸先へこみ揚けて來るから案じなさんな。」あは「しやれねばならぬといふのぢやアねえ、しやれにも地口にも聞えぬといふのヨ。」卒「しやれく口やかましい奴等だ。」出目「聞いてゐるものは耳やかましからう。」ト、二階へあがると、最早づぶ六、どん七、左次「出仕がおそい」判官どのだ。」圖武「鮒エ」くふな侍をよしにして鯰鍋だぜ、どうだ。」呑七「鯰侍ぢやア語路がわりい。」あは「鯰のさむらひ助安で、藏を曾我に書き替へはどうだらう。」くらとは、忠臣藏とばかりいふは、芝居通の詞に。左次「新市の三人で助けやすといつて、喰ひたてられてもモウ買はずの三郎だ。股の肴を出すまでヤおつこてへろエ。」ト、あさひなの身振をしてりきむ拍子に、杯「サア」大變だく大水々々。オイ雑巾でも何でも早くく。」づぶ「權現堂と猿が股がぎれたく、助けぶね助けぶねく。」卒「猿が股どつこいまた。」出目「これわいまた。」呑「よいやまた。」ト、皆々手拭雑巾などをあは「それでも大水が牀へ上らねえで仕合だつた。」左次「その筈だ、二階に居るから命に別條はなかつた。」あは「下になると大雨車軸を流す所だ。」ト、いふうちに野呂松裸になり、ひとへ物を抱へて、片「のろ」おら

アとんだめに逢つたぜ。この内へ来て表を明けてはひると、頭からはれみな、びつしより水をあびて單物も何もぐつすらぶぬれヨ。物干へ出して些とまあ干さう、膽をつぶしたぜ。」左次「おら、裸で来たから水の見舞に來たのだと思つて、背の立たねえ様な所をおよいで來たとおもつた。」左次「野呂公の來やうがおそいから、そんなめに逢つたのだ。」のろ「おら、先陣より後殿をする氣よ。」出目「しんがりより裸ついでに猪狩でもするがいい、物干で。」のろ「ちけへねえ。これは物干かねきんさんの籠、忍の岡の里に住む野呂松と申すものにて候。」ト、能狂言のまねをしながら、をかしなあしつきをして上を見 かん「なんだもろこしだ、唐の方に火事でも見えるのか。」これより八人のなまけもの顔がそろひ、思例の大酒盛となる。あるじの左次郎はほどよく酒を呑みよたんばうにはならず。左次「斯う皆久しぶりで顔が揃つた所はどうも有り難え。高田の茶番以來だぜ。」卒「七兵衛のだりむくれで、青菜に鹽を陣を引いてからは、斯う落合つた事はなしだ。」出目「全體此度は阿波公の番だッけ。」あは「それだから油断なしに案事をしてるのヨ。」左次「マア茶番もいいが、斯う爰へ寄り集まる呑み仲間は、梁山泊なら己アマッ裸宋公明だ。」かん「大わんぱくなら九紋龍か魯智深だ。」のろ「呑み倒れの豪傑、ちよいと寄り合つても一升づゝも呑むから、八升人といふのだらう。」出目「ナニちよいとなら五合づゝサ。」卒「どうして五合ぢやア生きぢやア居られねえ。」出目「ナゼ。」卒「一升の別れになるから。」かん「六合かイヤ七合宛と強めておかう、七の数は目出

たい。七福神、七珍萬寶、七人狸々、七賢人、天神七代、地神七代、ちん／＼。」卒「雷神。」ト、いひながら酒の「鱒、親父か。」のろ「これから八笑人七合神と、質素儉約に極めようぢやアねえか。」かん「おそれ入谷の七合神だ。」左次「オ、さうだッけ、皆顔のそろつた時分頼む事があつたッけ。」呑「何だ何だ／＼。」左次「なに膽をつぶす事ぢやアねえが、此の茶番連はマア洒落てあすんで暮して居て、わりい地口ばかり言つてゐるといふは有り難い。神の恵みだから洒落の氏神様へ冥加のために。」出目「若荷よりあたじけないから生姜のためにすればいい。」左次「馬鹿仲間だからみやうがの爲さ。お禮に額を奉納して八人の名をのこしてえと思ふが、昔から古いしやれの氏神は、今のおそれ入谷の鬼子母神様だから、斯う寄り合ふ度帳面をこしらへおいて、洒落一ツに付いて、二十四文、十六文、八文としやれの甲乙を付けておいて、錢をあつめて、額面は歌でも發句でも詩でも語でも、六でも七でもお望み次第書き入れ、奉納の寄進をしてえといふ御連中へお頼みサ。」あは「勸化なら卒八が一重羽織を著て帳面を以て歩行けば、打つて付け、俗願人紛ひなしの人品だ。」卒「妙見様へ銅の燈籠か。」のろ「い酒落は二十四文、わるいのが十六文八文ぢやア、おいら達のやうに好い洒落ばかりをいふものは錢炭が上るし、下手なてやひは仕合だ。見渡した所で洒落で錢炭を取られるやつは一人もなし、駄洒落仲間は安心なもんだ。」出「それぢやアうっかり口をきくと運上かあけ錢が出るのか。」卒「人の云つた古

いのなら帳面にあるから錢は出さずとよからう、二度取りばつとだ。」あは「そんなら、古いしやればかりいふがいい、犢鼻褌を臑へばさんでめめたり、帯を貝の口に結んで、前から後へ廻した時分の、かんに信濃の善光寺。」卒「ありがた山の鳶からす。」のろ「なんで有馬の人形筆。」出「逃げたの中によこ木瓜。」かん「まんざら坊主の柿の種。」あは「コレサくもういい加減にして置きねえ。」出「洒落仲間て初筆に付けねえちやア外聞かわりい、一番に付けてもらはう。」左「何といふ洒落だ。」のろ「エ、トまねえ。」ト、考へてもさしあたつて洒落が。左「サアどうだく。」のろ「マアまねえ今出る所だ。」左「がうぎに結するな、あとがつけへて居るぜ。」のろ「どうもさう世話しなくつちやア困る、今出る所だ。」ト、色々身悶え。左「コレサそんなにいきんで、洒落の代りに左ねぢりでも出されちやア大變だ。」卒「まだ出ねえのか。」左「そんなに急ぐなら總雪隠へでも行つてくんねえ。」出「ナニおいらたちは雪隠にかゝり合ひはねえ。しやれの事よ。」のろ「ほんに左様だつけ、あんまり苦しいから。」ト、いふ拍子に、と音が。卒「せつな屁をひる奴さ、せつな屁時の洒落頼みだ。」出「くるしい時に親を出せといふから、屁の親でも出すがいい。」卒「親ならいいが子は出さずともよからう。」アバ「めつたに出して雨でも降るとごめんだア。」出「ぜんてえみんな一所にかたまつて居るから案事がつかねえのだ。」ひとり、四所に分れて居るがいい。そつちのがへあば公ヨ、こつちのがへ出目公、むかうの鯨へ野目公、卒八はこ、へ

來ねえ。斯う四所へ分れるといひ洒落が出るぜ。」卒「ナゼそんなひちむづかしい事をいふのだ。」出「むづかしいことはねえ、下手の考へ四すみに居たりといふからヨ。長い女關付の洒落だ。」卒「なんでもいい是れが一筆見たかそんな角だ。」アバ「でえぶ八文洒落が出かけるぜ。」出「そねめく。」のろ「おらア洒落は地であるから、改めて帳へ付けねえでも、後で帳面を見せりやア出すだけは出すからよからう。」卒「それぢやア洒落は晦日拂ひだの。」出「はらひが滞ると引きしやれになるぜ。」のろ「ならうことなら五節句でも、一季でもいいがあきれらア。なんにしる額へ書く歌は、おれがソレ圖武公、主が棒端で飛鳥山へ花見に行つた時、卒八公と出目公に阿波公と五人連で、大酔にうだつて、歸り道に茶屋の婆アに道を聞いて、大損をして草臥れたといふ事を詠んだ短歌を書きてエから、聞いて左次さんなほしてくんねえ。斯うだ、主といふのは圖武公の事だぜ。」

主棒端五人で酒香で花見歸に茶婆に道よ聞て損して花臥た

どうだ、うまからう。其の時は讀人しらすと書いておいたがどうだらう。」ト、いへば皆。左「讀人しらすより待人來らずと書くがいい。」出「舌ッ足らずのやうな歌だの。」のろ「これ謹んできくがいい、是れが萬葉振といふ古往の口調を借りたのだ。」卒「口調かりかや女郎花か。」かん「口調ばかにした歌だ。」左「唐人の寐言の様だから唐歌といふのだらう。」出「それでも神妙に讀人しらすといふ内が殊勝だ。」

左「讀人が知れちやア恥のかきあけだ。」ト、いろく悪洒落にて、互しやれの勸化も、額の奉納も、しばらくあとの喇にして、後の條に説き解くるを聴きねかして、却説、阿波公の隅田川の花屋敷といふ題の茶番は、久しぶりで旨くやりてえもんだが、趣向は付いたか。」卒「肝心の咄だ彼岸前の蛇の様に、呑んでばかり居ても智慧のねえ理窟だ。」出「呑まねえでも智慧の有る氣遣ひはなしだ。」アバ「今度はおいらの番は先刻承知だから、モウ名題は出して置いた通りヨ。花屋敷といふ題ばかりぢやア茶番が仕悪いから、狂言の種にしたわけを聞いて下つし。」のろ「聞いてやるべい。」出「それよ思へば昔なり、大小鼓入りの合方で物語か。」卒「まぜつけへしは御免だ。」アバ「あつらへの七色唐辛子を賣る様に、あんまり交ぜつけへされると怯むぜ。斯ういふ譯だ、此間朝湯へ出目公の這入るのを見たから、急いで行つてみると、もう石榴口へ立つて體をしめしてゐるから、著物を棚へはふり上げて、驅けて行つて後から擧丸を蹴り握つて、サア出目公御免か、誤つたと言はねえけりやア、雷さまが鳴つても放さねえ、どうだくといふと、切ない物だから誤つた御免だといふから、そんなら放してやらうと、擧丸を掴んだ手で背中をびつしやり叩いて、這入らうと思つて顔を見ると、内の大家さんよ。出目公は奥の方の角に首つきり這入つて居てぐつぐつ笑つて居るだらう。大家さんは苦蟲を喰ひ潰した様な顔をして、阿波太郎さん、早朝から御機嫌と見えますすと、しかつべらしく言はれて、何分にも面

目次第もなく、穴へでも這入りたい様で、御免なさいと誤るもあやまられず、ひと風呂這入ると、どこかどう飛び出して歸つた所が、大家めエ湯から歸りに内へ寄つていふには、外の申戯と違つて金たまなんぞをつかむことは以來しねえがいい、モシ息でもとまると大變ができる、我等だから克かつたが、他のものだと喧嘩にでもなる所であつたと、した、か油を取られた。」圖武「きんたまの油を取つたら鐵瓶でも拭き込むによからう。」卒「きたねえ、その油をどうした。」出「太郎殿の犬と、次郎殿の犬と、みんな嘗めて仕舞つたとよ。」卒「それからモウきんたまを握る事はやめか。」がん「ふところ手をばして居ても、手持不沙汰だらう。」卒「なにいつも握るものは、きんたまより上だから、大家さんも構ふめえわサ。」あは「そのきんたまが茶番の種だ。今年は向島に狸囃子といふ事があると云つて、夏中すゝみ船が綾瀬のはうや三在橋の邊へ、たいそうに船ではやしを聞きに行つたぜ。なんでも猿若町なんぞぢやア、日暮がたからみんな出たア。」がん「そりやア聞いて知つて居らアな。」あは「今つからいつの幾日は、向島の洲崎でも水神の森でもいいから、狸ばやしがあるといふ噂を風聞しておいて、見物をあつめて野田の夜茶番をやらかす思ひつきだが、左次さんどうだらう。」左「月夜でなくつちやア面白くねえ。」がん「雨天日おくりとやらかさう。野茶番だから降る方がよからう。」あは「ナニいいものか。」卒「それでも雨の野茶ばんへはぜを入れて、四文でございといふから。」出「あめの中からおたぬが

出たヨ、にこく笑つて飛んで出たヨ。」圖武「おたぬがいやなら金玉が出たヨ。」が「狸にはどうも動かねえぜ。」あは「たぬき囃子には大太鼓はねえ、小太鼓許りで旨く拍子をうつもんだぜ。」が「大太鼓がなくつちやア、風呂吹にはならねえの。」卒「細かいのは糠味噌よ。波多菜大根や細根は干大根になるだらう。」左「そんな世話はせずともいいぢやアねえかな。」のろ「向島は百姓地だから、些とは作物の事も辨へざアなるめえと思つてヨ。」あは「マア黙つて聞きねえ。」卒「だまつて聞いて居るヨ。」あは「そこで何だアな。」出「なんだ。」あは「なによ。」が「なには甲良に似せて穴を掘るのか。」あは「何の甲より年の功だ。本讀の筋をきいて殆んど肝心してから、外の話をしねえな。」卒「年の功よりべつかつかうが似合ふぜ。」出「按摩膏を張ると丸で瘡ツかきだ。」が「そして妙な所へ殆んどが出たぜ。」のろ「頗るの間違へだらう。」あは「ナニおれがそんな尾籠なことをいふものか。」香「こいつは大笑ひだハ、ハ。」ト、皆々笑ふうち、またあは「本讀を追ひなくしちやアいけねえぜ。」左「ぜんてえ狸の囃子といふニア近頃の時花言葉で、むかしからいふ通り、腹鼓といふがほんたうだ。桶の底を叩くやうな音をさせ、直そばで音がするから出て見ると、遠く聞えるから内へ這入ると、また頭の上でたたく様にきこえるもんだが、近頃は鼓を止して、太鼓になつたうちが洒落て居るぢやアねえか。」左「そりやアどうでもいいから、其の後はどうするのだ。」が「その先は榮切庵丁長刀だらう。」あは「そこで遠くと近く

の囃子が入用だから、桶の底のやうに、大小の鼓ばかり一所、小太鼓ばかり一所、三味線入の囃子と、清元連中の淨瑠璃と誂へて置いて、そこで狸が一疋入用だ。連中から頼みてえ。はなづらの尖つたしやくんだ面だから、さしづめ呑公、見廻した所で外にはねえ。御苦勞ながら狸をやつて下つし。」出「狸の役當で面不足をいふものは、是ればつかりはあるめえぜ。」香「お互に友達つくの事だから、入用の面なら遠慮なしに使ふがいいけれど、こんな色の白い目鼻立のいい狸ぢやア、見物がうけめえぜ。」卒「色の白のは面白狸といふ事が有るからよからうが、小鼻が横にひらいて、唇が小夜著の袖口といふもんだから、口ののがつた所と、額の出てしやくんだのが屑だ。かなつほ眼の狸といふがあるものか、猿なら大丈夫だ。アハ、ハ、ハ、ハ。」

五編中之卷（江戸與鳳亭枝成戲作）

再説、蓮池亭の佳景といつば、不忍辨財天の御社直に向ひ、三伏の暑さといへども、池中の芬陀利花涼風をもよほし、六々六藏種類を集へて岸にうかべり。實に仙境といへども及び難かりぬべし。爰に昨夜より呑み臥れ、巳の時頃に目をさまし、ゆつぷくと楊枝をつかひ、半丁の奴豆腐より、百宛の割合に、鴈鍋のあなごに移り、五合徳利も四ツ五ツ、ごろつちやらと取りちらし、はや鮮魚屋も来る時分。あは「時に昨夜もいふ通り、呑七先生は狸の拵へで生寫しの面、紋羽の彩色の著附よ。腹を白く見せて、誂への小道具稻村二つの間に足をなけ出して、腹鼓を打つてゐる。何ほ月夜でも、船からははつきりとは見えぬえから、焼酎火で差出しを兼ね、よしか。」卒、別段よくもねえノ。」あは「マア聞きねエ。下座一組は、堤の茶屋の牀の下で囃子を遠くきかせ、一組は水神の森の内近く、此のかね合ひはよろしくサ。彼の焼酎火を消すをキツカケにして、兩方の下座が一所によると、狸は黒幕で、十六七の美しい娘よ。鬘は羽二重で、紫縮緬松に鶯の裾模様振袖よ。」卒、オット十六七ト美しいとの二所は、犬の糞の無エ所へそつと置いておくれ。もし見物が美しくない、抱道跡面なきたかな

い男だと思つた日にやア、跡へも先へも参り難しだ。涼みを止めて最明寺雪の段と爲ざアなるめえ。」あは「何様も本讀中交ぜられるには困る、筋を聞いて仕舞ひな。そこで左次さんが差詰め長右衛門よ、おいらを背負つて出るノ。眼公の三絲で月の友、桂の川浪をまるで一段、呑公たのみやす。」左眼「お頼みなら弾きもする、語りもしようが、茶番をする所が隅田川で、狸が腹鼓を打つて仕舞ひノ、黒幕の内へ引込むと、お半長右衛門とは何の筋だか、何が落ちになるのか、あんまり分らねえちやアねえか。」あは「イヤおめへ達は兎角、おれが上作を出すと嫉むが、呑七が間の抜けた狸を見せて、おいらと左次さんが美しいお半と長右衛門を見れば、桂川が隅田川でも何にもかまふ事アねエ、船の見物にドット言はせせへすりやアいいちアねえか。」呑なんほ友達づくだといつても、呑七が間の抜けたまで聞けば澤山から駒込、王子板橋、それから先は忘れたが、上州信州善光寺の本尊が、本多義光におんぶした道行だとか何とか言つて、見物が南無阿彌陀佛と褒めるだらう。」あは「呑公がうぎに交ぜるの、ヤンヤと言はせへすりやアいいちやねえか。」眼「やんやと言へば何にも言はねえが、分らねえと思はれたからは、八人の恥になる事ゆるのことヨ。」あは「左様おめへ達のやうに下手な按摩が肩を揉むやうに、おつうひねられちやア可笑しくねえ。一體今度の茶番はおれが番でおれが作者なり、中二階こそすれ座頭の事だから、親方とか太夫さんとかいつて、妙でござります、いづれよろしくと

言ひさうな所を。」丑「安波さん、左様手前が強くッては仕方がねえが、筋がわからねえから、わか
らねえと言つたのサ。」あは「おめへ左様いふけれども、今まで皆が随分面白い趣向をしたけれど、い
つでもやんやと仕舞まで見せた事はなからう。斯ういつちやアをかしいが、わつちが茶番ばかりは
憚りながら始終やんやとやつて見せよう。細工は流々仕上げを御覽じろ。」眼「左様さ、お前の番だか
ら、誰だつて役不足を言ふといふ譯はねえが、よく積つても見ねえ、世間へばつと向島で、斯ういふ
事があるとかなんとか噂をさせて、ばつとした所で、茶番が放屁の中落ちるときは、種なし三番叟、
かいた恥を外へはやられ申さずだ。」あは「がうぎと腐すノ、いいわえよしねえ。筋がわからうがわか
るめえが、其所ア安婆さん江戸ッ子だ、時は橋の鯨を横目に白眼んで、淵田上水を産湯につかつた
男だ、地鐵が違はア。皆が不承知ならおれ獨りで爲るわエ、へちむくりめら。」左次「コウ安婆さん、
是れまで年來八笑人に限つては、朶洒落こそ言ひちらせ、つひに一度も喧嘩口論といふ不風流はなし
だ。能くつても悪くつても、手前々々の樂しみ、代り交代にする茶番だから、附合はねえといふほ
どの事もあるめえから、そんなに顔を赤め合はずとも、相談づくにするがよからう。先づ今日は是れ
ぎりにして、おめへの杯を順にまはして、一ツめて中直りと爲なせえ。いづれ此の茶番は月夜でな
くつちやア可笑しくねえから、八月十五日と極めやせう。雨天日送りで、翌日ッからてんんに、湯

屋髪結朶水茶屋なんぞへ流言が肝心だ。」あは「さう左次さんの様にいはれちやア、私が何か腹を立つ
て、野暮を言つた様で今さら恥かしい譯だ。中直りにちよつびり、潮と酢の物を私が奢らう。」丑「そ
いつアありがた山の鳶鳥、つ、き合つて喰ひあふ中だ、跡は根も葉も骨も残るめエ。」のろ「皆さん
一ツめて。」シヤン「くくくくくく。左次「そんなら安波さん、翌日書拔を渡しねえ、稽古もいるめ
え。十五日の晩がた柳橋の若竹で出合ふとしよう。しかし船は道具の稻村や鳴物があるから、三挺で
もいけめエ、荷足でなくちやアなるめえ。よし衣裳小切小道具一切呑みこんだの、忘れられていけ
ねえのは梅川の肴だぜ。夜が短いから歸りは朝だが、いつでも朝が早いとひもじいめを見るぜ。」内あ
つらへの肴も来り、いよく強酒となりて其の日もたそがれごろ、やうくおのれくが宿所に程なく八月十五日
かへり、喧嘩の次第をつぶやくやら、跡の肴でぢぎりを爲しなど、噂たらしくそしり合ひけり。
今年に残暑はけしき故、暮六つかぎりほつちほち、寄り集まりたる八笑人、柳橋なる若竹にて、かね
て雇ひし荷足船、割子竹筒の用意もと、のひ、時分はよしと漕ぎ出せり。卒次「トキニ安波さん、此の
あひだは皆が大とろんこで、お互に大きな聲も爲たが、今夜は兩國川の魚と水、いつも八笑人といへ
ば、朶洒落許り言つてゐる、あんまり風流氣がねえから、今夜は翌の朝まで善し悪しはともかくも、
酒落たもの一洒落、朝飯の五色茶漬、一人前づゝと極めよう。船中酒落禁制で、あまり慰みなしにも
いけめエ。狸の代りに狐といふ所だが、それも殺風景だから、膝まはしの歌仙が打つてつけた。なれ

ども不承知といふ顔もあるから、只四季戀雜去り嫌ひなしに、川柳を三十六句、一字段々同様に趣を尻どりに並べつこは何様だらう。」卒「そいつあ面白唐草、可樂、夢樂は咄の上手、手水の手拭臭くなり。」左次「オットいり豆腐で二人前。先づそれはさておき、今いつた川柳の立句は、昔から人口に膾炙したる、孝行に賣られ不孝に請出されといふ句に、わつちが脇を即詠さ。下女も口ぐせにさうざます。」卒「妙々、わつちが第三はやつつけやせう。」しばらく考へて、「ふウ縫へるかも針の筵なり。」左次「こいつア妙々。爰でづいと轉じて何様だね。」香「候、盗人と組打し。」卒「香七が覺えのある事だナ。」眼「今日は大平の蓋で酒を呑み。」左次「何か居候がお呼び出して、青物町の角で大屋さんにもはからず呑んだといふ事か。」卒「夷講せぬ隠宅も數萬兩。」左次「大平の蓋を夷講と見て。」香「こいつアむづが鹿しまの要いし。」左次「ソレお一人さま。」卒「植木屋の居残り天ふ八ッあたり。」左次「こいつアわからねえ。ハ、ア藥研堀の角だな。天浮八ッあたりとは、十一日に歸つて直賣を爲たといふ心持だな。」香「左次さん、ついでに足の筋も見ておくれ。」卒「御腰元三篇目には大欠。」左次「細竈彈きと見たナ。」圖武「何様もおれにやア洒落より外は出来ねえ。百や二百は出して仕方がねえ、先刻から胸がむか／＼する。」出目「せつなかなアさすらうか。」圖武「左様さ、どうもソレへど繪圖役人附。」眼「役人附しそのみ唐がらし。」香「唐がらしものは音にもまきけ。」出目「さけやまきけ。」此の車「車」のじや

れとは違ふぞよ。」左次「オットよし／＼、もう朝飯は澤山だ。」田川「水神の森に著きければ、隔かば「野呂さんおめへは道具方だから、今の内稻村は程よきところへ居るおきだ。所の者が來ても、稻村だけ何とも言ふめエ。今に見物が大勢になると妨げだ。」の「オット承知々々、あわ、かいぐり／＼と、のめ。」左次「時に堤の方から此の作道を見物が來た日にやア樂屋が見えるから、二所三所繩をはつて置き、此の所作場道通るけべらずと書いて置くはどうだらう。」あは「是れ則ち、天の時を量り、地の利を知るといふ、名將の謀だらう。士卒に言ひ付け早速、といつたら又、此間の様に誰が士卒だとか、何とかいふだらう、仕方がねえ、おれが行かう。」ト、竹切を拾ひ繩を張り紙札をあは「ときにもう日が暮れたから、見物が來さうなもんだ。」圖武「來るとも／＼、先刻から咄さうと思つて居たが、洒落禁制と歌仙とやらで、鴈々三ツ口跡のが先になつた。」左次「オット枕言葉なしに言ひねエ。」圖武「をと、ひ此の噂をしようと思つて、獨り大師河原へ行きやした。道々湯に入る事およそ十遍、その度々湯屋の二階の菓子代と、あたりめへの湯錢茶代、ならし五十づゝ、髪を結つた事五度、水茶屋と見ると休んだこと數知らず、持ちめへのえて事酒のは、兩國の四方で紅葉おろしで一よ、親父橋がいもで又一よ、京橋まで辛抱して角でさし身から汁だけ二ツよ、大門で蕎麥で一よ、高輪であなごは少し奢りだと思つたから、濱の葎賣張でどちやう汁で一よ、觀音前に蝦蛄が見えたから、又つい一よ、羽根田へまはつ

て蛤でまた一よ、飯も喰はずに大師へ参詣つた時分はもう七ツ半、それから仁田屋へ泊つて、歸りも同断よ。」あほ「そいつア御苦勞だつけ。しかし湯屋の二階水茶屋なんぞは尤もだが、今おめへの雙べた一々の所は、何れも下々の者の這入る所だから、狸の囃子でもといふ風流雄達はよるめエ。」圖武「左様いひなさるけれども、一體流言といふものは、軍中水虎の役で、何所といふ嫌ひなくしやべつて歩行くが專一よ。其の中にをかしかつたのは高輪の茶屋で、何所の侍か知らねえが、しかつべらしい帯刀が腰をかけて居るし、女の大師歸りが五六人ゐるゆゑ、得たりかしことしやべりちらして、當月十五日雨天日送りに、向島水神の森に、狸の囃子があると咄を仕出した所が、女連も茶屋の婆さんも随分請けやしたが、彼の侍が言ふには、狸のはやしをするといふ事を、誰が云ひ出した事ぢやと尋ねられ、尋常の者なら忽ち赤面といふ處を、エヘン／＼と咳拂ひをして、左様サ、私らん近所に居た法印、今は鼠山へ往つて居やんすが、その幼稚兒に狸が乗りうつて、當八月十五日の夜、向島水神の森において、囃子興行仕り候としやべつたのサ。すると此の侍が笑ひ出して、イケ馬鹿馬鹿しいと言ふから、もしあなた左様おつしやりますが、けれども、池馬鹿々々しいとは、どういふ譯でござります、池なら鯉、鮒、鰯、鰻、鯰、泥鰌なんぞは居ませうが、馬や鹿の居る所ではござります、又法印の子に狸が乗りうつるめえものでも御座りませぬ。昔から子どもが囃ひます明に、

狸にござる法印さん、といふ急度した證據がござりますといつたら、この侍が、まことに開口々々といつて歸つたがをかしかつた。」のろ「オヤ圖武さん味くやつたツけの。おいらア又王子の坊へ出かけて、十條で瀧をあびて居る所で、今の噂をはじめると、まじめらしい和尚が裸で涼みながら、夫れは愚僧も見物に参らう、もつとも拙僧も分福茶釜と申すを所持致して居るが、そこ許狸にゆかりのお方とあれば、どうぞ其の茶釜を拂ひ度いものでござる。何卒狸方へお咄しくださる様にと、眞顔でいふから、かねて名高い茶釜ゆゑ、こいつア金まうけと思つたゆゑ、もし此度御持参かと聞いたところが、イヤ持つてはまるらぬが、御覽なされたくば、愚僧と御一處に今晚お出でなされといふ故、モシ分福茶釜は上州茂林寺といふ寺にあるといふ事は、誰もよく存じて居る事、それに一寸見に来いとは天狗ではあるまいし、左様無造作往かれもしさうもないものと言つたら、イヤ愚僧はもつと遠い所でござる。シテ何方でござりますと尋ねたら、狸の國象頭山でござると、一ぱいかつがれた。」アバ「コイツアいいコイツアいい。私やア山谷の湯屋の二階でしやべくつて居ると、側に居た人が、夫れは近頃面白い、私も連中を誘引ひ合はせて参らうといつて歸つたが、跡で何所の人だと聞いたたら、十返舎一丸先生ださうよ。何様か先生、この茶番の趣向でも盗みはせまいかと案じられる。」左次「コイツア餘程の手前勘だ。」斯くて此の兩三日、八人の面々思ひ／＼に流言をなし置きける故、物見高きは都會

の習ひ、あるひは屋根船、猪牙三挺、中にも目立ちし汁こほし一艘、天満に荷足をつれ、森の此方にもやひをすれば、其の外岸の杭瀬につなぎ棹に止め、其の員凡そ二十艘、も出したき見物なり。今や囃子のはじまるかと、勸進能を見るごとく、面白くないもかねて承知なれども、何をがな名目にて遊ばんものとの風流雄達、棊、將棊、雙六はさらなり、長屋の娘を雇ひ来て、三味線ひかせ、拳酒に現をぬかし、屋根ある船も屋根なきも、中々をかしき遊びなり。かかる賑ふ中なれば、およその古狸も指をくはへて引込む所を、物におそれぬ八笑人、一人々々に船より上り、呑七、圖武、出目、眼七の四人は土手にて相圖を待ち、左次、安波、卒八、野呂は稻村の陰にひそみ、時分をうかひ焼酎火、それを相圖に遠音のはやし、あるひは近くも囃し立て、稻村の陰よりは、呑七が狸のこしらへ、腹鼓を打ち居る様、寔らしくは見えねども、狸の趣なかくにをかしく、船中しばし興を催す折から、ふつと消えたる焼酎火、夫れをきつかけにて、土手の四人もはしり来れば、稻村ひらけてあまたの蠟燭燈しつらねて其の中に、お半を背に長右衛門、衣装かつらは左許りに見にくきほどにもあらねども、いやみたつぷり、下座には鳴物打ち鳴らし、三味線二挺に清元の、鹽辛聲も何とやら、今まで呑みしほろ酔ひも、興さへさめてつぷやく折から、いつの程にや見物の、中より工み拵へけん、松よりに世懸けたる雨傘にてばらりと、降り出させたる血の雨の、先に立ちたるお半長右衛門、二人が衣装かつらまで、眞赤くなしたる其の臭氣、鮎のわたの腐りたる、夫れかあらぬか知らねども、鼻を貫き堪へかねれば、自然と雨に燈火消え、雪間の月も薄雲に、半ばかり程よき頃ほひ、木陰をみしくのそりくと、歩み出で来る誠の狸、大ぎん玉を引きずりく、のツさくと出で来れば、血の雨にて魂を挫かれ、途方に暮れし八笑人、「そりやこそ寔の狸が出て、我々をとり喰らふぞよ。逃げよく」といふ程こそあれ、四角八方へ散々に亂れ立ち、乗り來し船を探せども、何地へ行きけん行方なく、爲方なくて蘆の中、小溝なんどに這ひかゝみ、かけを隠してためらふ内、見物の船は輿をさまし、遙かに隔てし事なれば、一伍一仕のわからぬゆるゑ、つぷやきく乗り出せり。その中に只一艘の汁こほしのみ、天満とともにいまだもやひを解かざりけり。かかる折から堤の方より、**隅田村**と印をうつたる提灯あまたともし連れたる、若い衆大勢押し來り、其所よ此所よと八笑人をあなぐりもとめ、かねて用意の細引にて、一人々々にぐるぐる巻、莊屋が許へ連れ行かんと、ひしめき騒ぐ折からに、汁こほしの船の中より、「暫くく」と聲も艶しき鶯の、初音にひとしき女の聲々。そも此所に立ち出づる人々は、何等の方にて在するや、次の巻を見て知るべし。

五編下之卷

船の中より出でたるは四十三四の奥女中、大川端造ともいふべき御局役、髪はかたはづし御遊山船のしどけなき衣装にて、縞數寄屋のかたびらに、鼠繻珍の金糸にて、立涌を縫はせたる帯、箱狭子の間より銀ぐさりのさがりたる、まだ枯れきらぬ老木の花、見所のある姿にて、今一人は三十位、いはねどしるき中老役、紅入の大縞越後、金銀入のわな天の帯、これも箱狭子を胸の前につき出し、其の外御末、御仲居、御はした召しつれ、下部二人に提灯もたせ、奥家老の胡麻鹽頭、上布のかたびら黒縞の羽織、鮫鞘の細い短い大小をたばさみ、悠悠然と上陸なし、つほち今日姫君さま淺草寺御參詣の御歸りがけ、是れなる水神の森にて蟲ききの御遊、しかるに大勢人数をあつめ、深更に及ぶまで狸の囃子となぞらへ、鳴物をならし物さわがしく致したる段、爰を何處と心得候や、當所は我が君畠山家の乗船場、殊に御先祖奎阿彌さまの御墓の前、言語に絶えたるうつけのものども、扱また皆の者に繩を打つたるは、當所の者どもなるべし、莊屋方へ引き行くはさる事ながら、折よくわれ／＼居合はせられたれば、そのまゝ、繩付にて請取り、館へ引き行くべし。皆のもの左様心得てよからう。」所のものハ

まのせず、茶番を致しまして御座りまする段、恐れ入りました。何卒お慈悲にお許しなされ下されまし、皆々御免をお願ひ申しな。」アバハイ／＼寔に恐れ入りました。どうぞ御免遊ばして下されまし。一體私は茶番は嫌ひでござりますが、皆がよつてたかつて勧めました故、據なく致しまして御座ります。どうぞ御免遊ばして下されまし。」吾ハイあの者が申すは、みんな偽りで御座ります、今日の茶番の作者なり、座頭なり、親方とか、太夫さんとか云はれる身分の者でござります。罪はいつち重いのでござります。顔が正銘 阿波太郎と申すものでござります。」卒も

う斯様になりましたは是非におよびませんが、先刻出ました狸に喰はれて仕舞ひましたら、今の思ひはござりますまいと存じますれば、寔に悲しうござります。」中老尾上あまりに見かね、尾「まうしお局さま、此のものどもを見ますれば、さのみ悪意を工みまする族とも見えませず、今日は姫君様まれの御遊山にもござりますれば、繩目をお許しあそばされては如何でござりませう。」つほね「コレハコレハ尾上どのの御挨拶、しかしながら見ました所が、いづれを見ても山家の猿、お身替りになりさうなは一人も見えませぬ。以後の見せしめ矢張御館へ引きまして、お表へさし出しますがよろしうござりませう。」尾「左様ではござりますれど、

堪忍のなる堪忍が堪忍かならぬ堪忍するが堪忍

と申す歌もござりますれば、彼の者どもへ難題を申し付けまして、夫れが出来いたさずは、御館へ引きたて行きませう。」つほね「コレハ／＼お中老の御發明、なか／＼此の局はあつてないも同然、何様なりと思しめし次第。シテ難題と申すはナ。」尾「左様でござります、用意の御銚子もあり、お肴もある事なれば、此の者どもへ大きな器にて呑ませ、手より手にわたし、少しも下に置くとときは、館へ引きたてませう。幸ひ酌人には、最前出でたるふりちふぐりの大きな漢子、是れへ／＼。」トありければ、「ハッ。」ト出で来る以前の狸、大ぎん玉を引きずり／＼、身にはつゞれを著ひながら、「何ぞ御用でござりますか。」尾「いかにも其のはう、此の八人が酒宴の酌人相手を申し付ける。汝が身のきたなきを嫌ひ、とやかく申すものあらば、早速召取り館へ引かん。所の者は、此の者どもが酒宴の相濟むまで、出口々々をさしかため、蟻の這ひ出る所もなき様、用心きびしく守つてよからう。お局さまいざ先づ御船へ。」女中「御立ちあらませう。」入り交つて奥家老、「コリヤヤイ中老尾上どのが格別の慈悲、只今御酒お肴もくださる程に、有り難く頂戴いたせ。尾籠の振舞あるときは、誰かれの用捨はな いぞ。」此の時所の者は出口をまもり、船の中よりは、大ひろぶたに井、大鉢三ツ、八人のその内にも、左次は分別有り顔に、左次「もし御前達やア何と思ふか、先刻血の雨が降つて生膽をとられて、此の狸さんが出たもんだからいよ／＼びつくりさ。夫れも今見れば此の人は、御藏前へ出てゐる大隠者よ。左様して見

れば此の船の内の人達が、一つ穴の狸で、一杯喰つたのだらうか。」ア「コウ金玉さん、おめへはど ういふ譯でおいらたちを驚かしたのだ。」金「ハイ何か存じませんが、昨日の夕方羽織を著たいきなお方が二人お出でなさいまして、手前に用があるから、自己達のいふ通りになれとおつしやつて、額を二ツ紙につゝんで下されたゆゑ、一月の持ぎが一晩にあるといふもの故、何も存じませず参りましたが、私も狸に化されはせぬかと安心いたしませんから、懐の額がもし木の葉にでもなりは致しませんかと、先程より捻つて見ましたが、先づ／＼と存じて居ります。」香「皆がそんなに評議許りして居て、又船の内からしぶを喰つて縛られてもつまらねエ。」至「サウ／＼、しかしおいらが思ふには、此の肴がどうも合點がいかぬ。御姫様の御遊山に、此のおさかなは何事だらう。大鉢に冷麥、こいつア繪に書いてある跡で蚯蚓になりやアしめえか。そつちのひたし物は馬の糞を散らして、花鯉をかけたやうに見えるし、大井の内は飛龍頭の味煮、此奴アキツ公狸印も大好物だと聞いてゐる油揚げ。何様も喰ひにくいぢアアねえか。」圖武「それでも呑んだり喰つたりしねえと又繩目だ。なんとぶしつけどが藏前の親方、毒味をして呉んなな。」野且「わつちがお酌。」金「ハイ／＼それには及びません、左様ならお先へ。」ト、垢だらけの手にて柄 金「コレハ／＼極上酒、ハイ／＼これは有り難うござります。左様なら。」ト左次郎へさすと、苦い顔をして、せめて杯洗ひでもと思へども、左次「時に金玉さん、

お前の手は昔がはえてゐるが、いつ湯へ這入んなすつた。」金「ハイ五年此の方湯に這入つた事はござりませぬ。それに隠囊がかゆいので掻きますから、爪の間はみんな金玉の油でござります。」左次「エエゲツプ、何様もたまらねえ。夫れを聞いてまだどうも化されてゐる様な心持だから呑みたくねえ。」圖武「呑まねえ時にやアまた繩目、どう爲たらよからう。」左次「しかたがねえ、一杯やれか。」と、ゲツト「こいつアいい酒だ。圖武さんささう。」圖武「ハイ。」一ツ「左次さんが能い酒だと言ひなすつたけれどよもやと思つたら、こんないい酒はおらア生まれてから今まで呑んだ事アねエ。」卒「ほんたうか、早くさしねエ。」ア「夫れぢやア肴もよからう、その油揚を一つやつて見よう。ウメイ、此奴ア海老糝薯へ鶏卵を入れて、きくらげ、蓮根、牛房を交ぜたのを揚げたのだ。何様もうまい。」圖武「それぢやアそつちの蚯蚓も喰へるだらう。」左次「ドレ、こいつもうめいの何のといふどころぢやアねえ、是れは吉原の土手の向うの裏のやうな所の蕎麥屋で賣る、鯛蕎麥といふのを饅飩で打つのだらう。丸で鯛を喰ふやうだ。うめエ、」卒「ひたし物は何だらう、三葉でなし菜でなし何だらう。山葵がきいてゐるぜ。」左次「是りやア藜よ。こいつアみんな此間の趣向を島山様の奥女中が聞いて、おいら達のいい男振を見物がてら、すつぱりかつぎに來たのだらう。金公の酌は少しむさいが、酒がいいに肴がいいときてゐるから、猪口を離すがをしい。」卒「モシ左次さん、先刻から一件で職が

つぶれて仕舞つたから、此の八人が洒落といつちやア一ツも出ねえ、大きに酔ひもまはつて來たし、ちつと洒落は何様だらう。」出目「ヨカ、さつき出た女中衆が衣類は、數寄屋に越後、私やア膽がつぶれて、きんちやみはどうだらう。」呑太「長え前書だナア、ふんどしの脇からすきやきんちやみは味からう。」出目「おめへの川柳とかけて鏝錢ととく、心は悪錢りうだ。」呑太「一文で大金を見る御藏前はどうだ。」卒「何様も猪口のまはりの遅いにはこまる。オヤ、蚯蚓はもうおつもりか。」ア「金公が爰をせんど喰ふからヨ。」左次「こいつア併し尤もサノ。」金「何様いふ譯か御前様方と御一所に御酒を頂戴いたすとは、寔に冥加至極。」卒「冥加至極、極樂の追分といふはこんな所だらう。」眼「ナゼナゼ。」卒「苦しみを忘れたり、嬉しさを忘れたりするからヨ。」出目「サアサ、おいら先刻縛られた時にやア、實に悲しかつた。」ア「出目公は實に泣いたツけノ。」出目「わしや泣くまいと思へども、何様も涙が合點せぬ。」卒「今こそ一口出るけれど、先刻は御同然に。」呑「そりやア誰でもヨ。」斯くて手より手に廻す大杯の事なれば、忽ち酔ひて金玉を一番とし、宵より勞れし八笑人、はや丑みつにも近ければ、一人こけ二人こけ、八人とも正體なく、ごろりくと倒れ臥す。寐息を伺ひ所の若者、取りちらしたる杯盤をとり片付け、船の内へ持ち運び、何か代りにとりちらす、品はそれとも白川夜船、軒は車をひくが如く、時分はよしと皆々船に乗り移り、洲のある方へ漕ぎて行き、夜網を引かせ

て遊んで居れり。秋の夜のならひにて、はや東の方にたな引く横雲、美人の眼ぶち彷彿と、ほんのり赤くなりければ、鳥みつよつ二つ森を放れて、かア／＼と啼きわたれども、酔ひしれし八笑人は高野、浅草寺の鐘の音も五ツをうつころ左次郎目をさまし、あたりを詠めてびつくり驚天。左次「コレ皆が起きねえか、大變だ／＼／＼。」トゆすり起され、七人諸共大金玉も目をさまし、「こいつア大變大變。」と皆々さわぎ立ち、ゲツフウ／＼、吐逆せぬもの一人もなく、大金玉さへゲロ／＼、戻す片手に懐の額を探りて莞爾とわらひ、金モシ旦那様方、わたくしは足も遅うござりますれば、お先へ参じます。寔に失禮をいたしましたして御座ります、御ゆるり是れに。」と言ひ捨て、よろ／＼として立ち歸る。左次「時にいよく狸に化された。ゆうべあんなに味かつた。」辛「酒樽だと思つたは小便田籠か、エ、穢い。」辛「それこそ、らに喰ひ零してあるのは馬の糞だ、此所には蚯蚓が這つてゐる。何様したらよからう、腹の内が引つくり返るやうだ。又出るぜ、ゲロ／＼／＼。」左次「眼公ちつとおいらの背中をさすつてくんねえ、ア、せつねえ。そして爰にいつまでも居たら、又所の者にやかましくいはれるだらう。夜前は若竹の船を探したが居なんだが、今あすこにか、つて居るぜ。船頭をおこして歸らう。阿婆さん呼んで呉んな。」アバ「おらア思ひ出すと込み上げて、どうも大きな聲なんぞは出ねえ、眼公呼んでくんねえ。」眼「オ、イ若竹の船やア、若竹やア、ト呼びけるゆる、漸と目をさ

まして、船「お歸んなさるのかネ。あゆびを掛けて置きやしたから此方へお出でなせエ。」皆々色は青菜のごとく、中には歩行も出来兼ねて、四這ひに這ふもあり、四邊に落ちし竹をひろひ、杖にすがりて歩行くもあり、鳴物小道具すべて船頭をたのみ運びもらひ、少しも早く漕ぎ出して、尻を喰はぬが專一と、船頭二人に貳朱づ、はずみ、辛うじて半町ばかり乗り出し、顔を洗ひ嗽ひをして、やう／＼人心地はつきたれども、腹合甚だよろしからず、船中ひつそとしてありけるが、あは「時に船公、夜前おいら達が所の者にしばられた時、逃げ込まうと思つて、もやつてあつた所へ行くと船はなし、それゆゑ一人ものこらす繩目の恥、おめへ達やア何所へ行つたのだ。」船「ハイわつちが傍に付けてる汁こほしは、神田川の船で、船頭はわつちが友達サ。こつちの船に来て、少しわけがあるから、此の船を少との閒洲へかけて置いて呉れと頼みやんした。勿論お辭儀もさせるし酒も呑ませるから、此の汁こほしの行くまで待つて居ると言ひやすから、それゆゑ洲につけて居やした。」左次「サウカ、あの船は畠山様の御姫様の納涼船だといふ事だが、さうか。」船「大違ひこん／＼ちきサ。」辛「こん／＼ちきとは狸ではなくつて狐か。」船「エ狐だかなんだか知りやせんが、暫くすると船を洲へ付けて、別に網船が来て夜網サ。」眼「それでも奥女中は居たらう。」船「それも大違ひサ。」左次「そして何者が乗つて居たえ。」船「友公、何とかいつたつけなア、色の白い丸顔な人が大將よ、ソレ／＼十返舎ヨ。それに十

手とか實體とかいふ人が。」船友「爲永とかいふ人も居たつけ。夫れに町の人達が、大勢女形のかづらをかけて居るもありやした。衣装をぬいで丸裸でゐた衆もありやした。」舂「そしておいら達の事をなんぞと噂でもしたか。」船友「爲た所ではござりやせん。」アバ「なんと云つたネ。」船「左様サ、お前さん方の前では言ひ憎い。」眼「何の遠慮は無沙汰だ、有體に言ひねエ。」出且「とんだ所へ無沙汰が出たノ。」

船友「丸顔な人がいふにやア、世の中にとんちきも澤山あるもんだ、金玉男の正體が知れた日にやア、そこへ奥女中の拵へで出たつて、性が男だから気が付きさうなもんだト言ひやした。」船「爲永さんとやらも、岩藤のせりふまはしに、御先祖奎阿彌様の御墓の前とはあんまり人もなけの言ひ様だッけ、鏡山と寺子屋と梅の由兵衛も交つてゐる出たらめの長文句故しどろもどろだつけ、先がよく／＼とちつて居ればこそ味くいつたものの、危い藝だつけと言ひやした。」舂「夫れぢやア所の若い衆とおもつた奴等も。」船友「さん谷吉原人達サ。」のろ「あいつらも何ぞと言ひやしたか。」船友「十手とか笠亭とかいふ人が、一體瀧亭が八笑人は實に滑稽たつぷりだが、一筆庵がそれを眞似てよく書きやした。をしいかな遠行せられて、板元が上の巻ばかり彫りかけて仕方がねえから、奥山の黒い男に書き足したのんださうさ、元より作者がとんちきだから、前後ふそろひはもつともの事サ。」左次「左様か、何も意趣も遺恨もなささうなものを、なぜこんなめにあはせたらう。是れからすぐに追打ちに汁こほし

へ乗り込まうか。」舂「それもいいが、先も大勢乗つてゐるから、喧嘩にでもなつちやアをかしくねえから、一先歸りやせう。」舂「そりよう聞いては何もゲツフウと戻す程の事もなかつた。思へば悔しい、喰ひものの意趣はいつまでも忘れるこつちやアねえ。おほえてけつかれ戯作者ども。」眼「あんまり力身なさんな。今流行の作者達がお揃ひで書いた狂言だものを、素人のこちとら及ばぬ事だ。」左次「しかしいめえましいなア、どうも腹の内が何にか當つた様な心もちだ。一首うかんだ。

戯作者の穴はひとつの古狸書きひろけたるきん玉の春。」

斯く打興じつ、船は淺みどりなる柳橋、香やはかくるゝと詠みたる梅川の河岸にぞ著きにける。

花 八 笑 人 終

林妙
話竹
七
偏
人

梅
亭
金
鵝

林妙竹 七偏人初編序

唐山晉の七賢人は、豹脚の多き所とも、しるや知らずや酔ひ蕩け、竹の林にしやれ塌して、阮咸などは三線の、元祖と呼ばれし蠢龜、夫れすら今に名は遺る。兔角浮世はをかしみの、笑ふ門には七福や、春の始めの寶船、七種の粥には命を延ばし、天神七代北斗の七掌、七堂伽藍に七觀音、始皇の七馬鳳の七德、何れも七の數をもて、愛でたきものと世にしらる。夫れから思ひつくるの上、こゝに彰はす七偏人は、全部合はせて七編揃ひ、七むづかしきことをば言はず、作者が得意の滑稽笑譚、看る人ごとにふきだすとは、富貴を出すの詞にかよひて、當り外さぬ妙安新奇、販元大喜の喜の字をば、俗に花の賀と、いはふも矢張七の數、この戲書を鐫るときは、七珍萬寶集まる前兆、六十餘州の看官、みな御らうじて可笑しいと、御評判の高わらひを、被るならば忽ちに、一夜の東風南枝にわたりて、ひと花ひらく梅亭の、名は高砂の松が枝に、巢をくふ田鶴も久方の、雲居はるかに羽を翺して、聲も八千代の壽や、盡させぬ春の初笑ひ、社中擧つて金鷺さん、おめでたう△りますとしかいふ。

丁巳 青陽

松亭 迂 叟 題

初編 卷之上

吳竹の代の人竝に松たてて破れ障子を春は來にけり

實にや千秋萬々歳、まつちやらこのえいやつと、春立ちかへる朝には、軒端にぎはふ七五三飾、のうべは鬼の提灯を、もつた小僧の長松が、親の名で來る年の禮、大々神樂、猿廻し、三絃ならして鳥追が、まるる惠方の繭玉や、一トごにニタご三な四ツて、遣羽子するやら手鞠唄、紙鳶のうなりも自然、長閑をさそふ往來の、表通りは五月蠅いと、すこし避けたる見識も、江湖上は風の柳橋、阪人の子の律儀より、老子莊子の新道こそ、住居ひよけれといふ氣にて、萬事茶にした家造りも、有徳の人の若隱居、遊ぶを日々の商賣にて、他に事なき能樂人、女房があつては俗ばると、おつなところへ風流がり、寡ぐらしの喜次郎が、火鉢のふちへよりかゝり、今年の茶番の初狂言、不動明王を工藤左衛門に見立て、制吒迦童子を八幡の三郎、矜羯羅童子を近江の小藤太、あすこの臺詞を此様つけて、此

處の身振をあ、やつてト、一人監へ居るところへ、同氣求むる茶芽吉虚呂松、裏口よりしてのつそりト案内もなく入り來り、茶め「イヤお目出たう御座いッ。」虚ろ「イヤお目出十一御座いッ。」茶め「オヤ何様した、なぜそんなえに塞いでゐるのだ。」虚ろ「願をふところへ仕舞ひこんで、頬ッ端へお手てを突つかい棒の、老木の松といふ身は宜いが、その肘が火鉢の縁をちよいと外れると、毛の生えてゐる藥罐と、茶の沸いてゐる土瓶と鉢合はせをするぜ。」茶め「なにか二人が來る早々、藥罐ましい事をいふ様だけれど、その肘がはづれて土瓶とそつちに倒れるひにやア、また火鉢はねえ。居眠なら晩に寢てからの仕事として、春は春らしく些と陽氣にやんねえナ。」喜次「へん元日や晴れて雀のものがたりサ。無智短才のやからは、一夜明けか明けねえに、陽氣がつて居ようけれど、まだ初春の内は、上べを陰にして腹へ陽を蓄へこむ時節だ。自己なんぞの爲ることは、天地の氣候と同體して往くところが妙といふのだ。」茶め「上が陰で中が陽なら、ざつと陰症の傷寒だから、熱がうきそびれると氣がたじれるぜ。」トいふとき、またも入り來るなまけ仲間の下太郎が、明けし障子の間から首ばかりつき出し、へた「彌うかねえけりやア、家鶏を戸板へ乗せてながすが宜からう。」喜次「何だか譯も知らねえで、來るとすぐにさしで口だア。」虚ろ「エ、イ氣の利かねえ、早く這入つてあとをみめねえと、風が來ていかねえわ。そしてその面は何様したんだ。煙にむせた絡の様に、目ばかりしよほくやつて、實に

重忠さまの御知行所と來て、ぢ、む郡を一ゑんに領して居るのだぜ。」へた「イヤこりやア面黒い、人のざんそうを岩永どころか、自分が御面色が悪七兵衛で、おまけに少々はねきよと來て居るくせに。」茶め「イヤモシ些とおことばの榛澤六郎だけれど、左様兩方が根をほり底を堀川御所で、悪口雜言をいふ君阿古屋なら、琴責どころか打捨つて置いても梵論が出て、今までせつかく宜い事をしたのも、みな此方らの威をかりてする狐だと思はれたらばつまるめえが。」へた「ナンノまた茶めきなぞが横合から口を出して、水責火責のくるしみを請けようと思つて。」喜次「コレサおめへたちの唾が、霧のやうに家中をまつてあるくわ。些としづかにしさつしナ。」へた「今虚呂松が自己の目をしよほくして居るといつたが、其の筈だといふ譯は、昨夕の寶船の一件だ。今年こそ宜い初夢を見ようとおもつて、無上に早寢をしたところが、サアその宜い夢／＼がみんな天窗へこみ上げたと見えて、五ツの鐘がなり四ツがなり。」茶め「九ツがなり八ツがなり。」虚ろ「七ツがなり六ツが。」へた「たうとう天道さまの昇るまで寐そびれて、まんぢりともしねえと思ひなせえ。」茶め「オット待ちな。アノ宜い夢を見ようと思つてト言つたのは、おめへが思つたので、こんどの思ひなせえは此方でおもふのか。」喜次「東西。」へた「エヘン、然れども眼の水晶の緒にてもあらざれば、此の時とろ／＼と眠りつくかと思ひなせえ。」虚ろ「亦思ふのか。」喜次「東西。」へた「忽然として三社祭の善玉惡玉のごとき寶珠の玉が二ツ雲の

なかから、自己が仰向に寐てるる天窓の上へ、ドロソソで舞ひ下つたと思ひなせえ。」茶め「イヤさうさう思つては、肩が張つて立ちきれぬえから、此度は抱くこととしよう。」喜次「東西々々。」へた「すると一ツの玉は左の小鬘、また一ツの玉は右の小鬘へ来て、ひつたりくつついたと。」虚ろ「思ひなせえか。」へた「東西。」茶め「やア此度は手前で東西をいやアがる。」へた「彼の兩の小鬘へくつついた玉が、肉をぶぐつてくり、くりめりこんで行くその痛さ、一生懸命こらへて居たがもうたまらず、アツといつて眼を醒したと思ひなせえ。」喜次「鬱陶しく思はせるぜ。」虚ろ「東西。」茶め「南北。」虚ろ「氣抜け氣の毒、屁のえ、茶のと、愚癡のえ、ぐづのと、我呑み、餓のど、むりのえ、無智のと、則ちこれは下太が身の上の十干で御座いッ。」へた「エヘン、さしかはりました十二支をまうし上げます。先づくつてはごろ／＼子、物事のろくつて丑ぐらる、ものの早きこと虎、はねたる所は卯、わけもわからずはらを辰、呑みたいが病の巳、前のものはお定まりの午、はなを垂らして紙をつひやす未、所作事すべて申、よくばつて何でも酉、うちには片時戌、借錢で首がまはらな亥といふのだ。オヤ此奴等ア何をくらふのだ、ヘン何時の間にやお燭を付けたナ。其處でお肴は重詰におせちの煮物を帆立貝であつためたやつか。イヤその中の芋で、寶珠の玉の咄を思ひだした。」喜次「芋を見て思ひ出すのなら、寶珠の玉でなくつて放屁の玉だらう。」へた「扱今の初夢の咄の後だが。」へた「サアその放屁の玉、イヤサ放

屁ぢやアねえ寶珠の玉だと思つたのは、目を明いて見ると野良七めが仕業で、自己の天窓へのしか、り、岩のやうな拳固をニツこしらへて、兩の小鬘をぐり／＼やりながら、サア起きねえか朝寢をするも方圖がある、是れほど強くやさう極めても、根ツから葉ツぱり痛がらねえのは、鐵槌あたまたか石天窓か、どうだ／＼と眞赤になつて押し居られた痛さくやしき。」虚ろ「さぞ穢え面をしたらうなア。」茶め「こいつア百ぐらる出しても見たかつた。」喜次「フム、其處で野良七がお前の天窓をぐり／＼の遣り逃げか。」へた「夫れだからヨ。その敵をとりてえと思ふのだ。その敵より自己の敵は何様した。早く一杯廻り逢はせて呉れねえか。」茶め「彌廻り逢つたら、助太刀は自己一人でもちきらう。」喜次「サアサア出来た、下太しう一杯やらかしねえ。」へた「そりやア有り難えオツトよし／＼。」喜次「よくなくつて、大晦日にやう／＼の思ひで取寄したのだ。」へた「ドレ／＼なるほど、こりやアがうてきたア。ア何様もしみて／＼、五臟六腑をたち切られる様な心持だ。して見るとこの御酒は劍菱か正宗といふ鑑定で御座います。」ト虚呂松へさせば、虚ろ「ドレ／＼成程よい御酒だ。」ト、注いだる酒を飲むまねのみして、何時までも飲みほさず。「是れは不思議、アレこの通り飲んでも／＼盡きません。して見ると私のききでは、泉川か瀧水だらうと存じます。」茶め「しからば身共も鑑定にとりか、らう。ナル、何さま上物だ。モウ一ぱい注いでくん。オツトよし、ソラ亦お酌だ、奇妙々々。此度は手酌でやら

う。ア、ちりますく。」へた「コレサ一人でそんなえに何様するつもりのだ。」茶め「ハテ是れで七獻頂戴いたしました、一杯毎にみな美味しう御座いましたから、先づ七ツ梅かと存じますが、皆様はまた私を狸々のやうだと被仰いませう。」虚ろ「イヤもう誠にお割合のよい御鑑定で、残心に堪へました。」喜次「愈さまの御鑑定、是れにてとつくりき酒仕りまして御座います。扱今日彼様に御集會ともしら梅で、一人つ九年酒といたして居りました故、誠に泡盛をくひまして、何様紫蘇酒にも焼酎にも寡ぐらしは手もまはらず、然りながら玉緑の御らい麟ゆる何がなト存じ、戸棚を明けて三ツ鱸のところ幸ひと彼方のすみ田川に到來の一瓶、お肴はなくとも元よりみなうちわ同然の中汲、たゞ濁りのないところを御馳走とおほしめし、足元も養老酒となるまでめしあがり、是れは江戸一と御保命酒にあづからば、私のみか孫古味淋の酢へまでも、難有う鹽醬油にぞんじ奉ります。」茶め「イヨく白ざけばなれの致した御挨拶、甘露酒に堪へましたぞ。」虚ろ「蜜柑酒があつて十分の御口上ぶり、なか／＼釀は置きませんツ。」へた「呑口のまはり鹽梅、徳利と聽聞いたし、樽わりのところ此のする一文もらひの薦ツかぶりと成り下り、道樂寺を嚙つても口過ぎは出來ると申します。」喜次「エ、この野郎、いんぎのわりい事を言やアがる。」茶め「ア、ソレ帆立貝へ袖が引つか、るわ。」虚ろ「ソラ芋が灰の中へ身を投けた。」へた「焼豆腐もつゝいて飛び込むわ。」茶め「牛房々々と沈んだら、引きずりあけて人參を飲ま。

せるがいい。」虚ろ「ヤレ／＼田作で御目出度かつた。」ト、灰のなかへ落ちた芋をはさみあける。へた「いやはや誠におせちない地口ばかり出來るゾ。」喜次「時に自己は毎度左様おもふが、正月の重詰と五節句の煮物、それに袴著髪置のいはひサ、あいつア何様な立派な人達でも、長い飴を二袋か三袋たか、是ればかりは古風のすたらずに居るところが難有えぢやアねえか。」虚ろ「一體おせちといふものは、茶め吉を見る様な意地穢しを誂めの爲に。」虚ろ「いましめぢやアあるめえ、おせちだからお煮染の爲だらう。」喜次「ハ、ア何か虚呂松のお説があると思えるネ。」へた「そいつもお説ぢやアあるめえおせちだらう。」喜次「エ、イしやべるなイ。」虚ろ「さておせちの煮ものの品は、田作に焼豆腐、芋、牛房、人參といふのが世間通例だ。そこで田作は元鯛だから、魚の中で一ばん下だ。亦焼豆腐は中にすがたつて居るだらう。さて芋と牛房で腹を膨らし、田作の下々、焼豆腐のなかのすうと屁を放れて、人參の様に赤い顔をするなといふお煮染だわ。」喜次「ア、ア穢いお煮染だ。」虚ろ「イヤサお煮染ではない誂めだといふことヨ。」虚ろ「いましめでもあるめえ屁ましめだらう。」へた「オヤそりやア宜いが、自己わすれた事をした。」と、周章てて立つて入口の玄關めきたるところへ行き、風呂敷包を持ち來り、その中より羊羹の折と香煎の竹筒を取り出し、へた「先刻來た時一寸あすこへ置いてさつぱりと失念、是れはこのたび新製の羊羹と香煎、わざとお年玉のしるし。」ト、喜次郎が前へさし置く時、表の方にて咳拂

ひオホン、「如何御在庵であらせられるかネ。」 虚ろ「サア〜事だ。誰だ〜、石田のも、んじいか。」
 茶め「御空庵だといはうか。」 喜次「ナニサ春はじめてだから左様も出来ねえ。お前たちやア此の皿ッ小鉢を持つて二階へ上つて仕舞ひねえ。」 虚ろ「オット承知。」 へた「極どい所で下卑ばるなイ。」 茶め「芋を一ッひようばつたは、熱ふつて口がひかれねえ。」 虚ろ「エ、エさもしい事をする奴だ。」 ト、人々に其處を取りかたづけ二階へ上れば、喜次郎は立ち出でて、「コレハ大愚大人、サア〜此方へ。」 たい「然らば御免。」とすつと通り、たい「今日は御年賀に出たのでは御座いやせん、昨日書畫の書初を兼ねて、應柳庵と源氏庵の評の年籠りを開卷するから、大人の鳳駕がきしらなくつては、座がしまつて來ねえト、波曉子のおだてにそ、なかされ、我にもあらでふら〜と、蘆光が猿江の別宅へ行きやした。すると彼人が相變らず才子ぶつて、座附の菓子から酒の肴、都て穴ぐり穿つて奇絶妙と、めづらしがらせる積りで出した奴を、是れは何屋彼は何處と一々星をさしたので、流石の我慢も鼻を折り、眞に大人は食物本草だ、太刀打は出来ねえといつて驚きやしたが、其のまゝでは何分にも腹が癒えねえと見えて、いつの間にか寮朋町から、お竹にお梅お松などといふ金毛九尾の面白を生捕つて來て、書畫も聞きもそちのけ、直に亂杯の大騒ぎといふ世界に變じ、てんと面白しで漏たけることを知らず、時に鶏鳴曉をうながすに驚いて、たうとう猿江へ一宿の、今歸りがけて御庵前をよぎりやすから、大

人の御起居いかゞ在らせられるやト、一寸窺ひ奉るし〜など、漢語まじりの釋らぬ事を頼りにならべ立てるうち、二階では彼の三人が残りの酒をのみながら、虚ろ「オホン、大人徳利は如何おはします、したんで見てもさえずやさえずかネ。」 茶め「ボタリ〜でも有るくらゐなら、此様に力をおとしはしねえワ。」 虚ろ「エ、仕方がねえ、重詰の煮豆でも食らひこめ、アツア此奴ア梅干だ。」 へた「エ、穢え、なぜその豆の中へ吐きだすのだい。」 へた「オット一番誤つた。とてものついでにかき廻して仕舞はうか。」 へた「とんだものが舞ひ込んだので、自己の思ひつきを題無しにして仕舞やアがつた。」 虚ろ「何か趣向があつたのか。」 へた「新製の羊羹香煎と表題して差出した土産は、實は羊羹でも香煎でもねえ。」 茶め「シテ本名をあかす時は。」 へた「鮪の正身の梅かんとでも言ひさうな所を、羊羹の折の中へすつほりときめこませ、亦香煎の筒の中へは、七色蕃椒の大辛といふのを詰めかへて來たのだ。其處で内々葱の用意もあるから、いざと言やア直に、鍋焼の七色蕃椒を振り掛けるといふだんどりだ。」 虚ろ「道理で羊羹の折が大きかつたと思つた。」 茶め「オヤ一寸したを見な。」 虚ろ「ナゼ〜。ホンニ喜次さんが、例の香煎の筒と羊羹の折をかつぎ出したぜ。」 へた「ドレ〜、イヤアこいつア面白。何様するか見じて居よう。」と、二階の口から三人は知れないやうに覗いて居ると、下では主人の喜次郎が、「夫れは夕はお楽しみ、例のおかし藝の面白づくしで、さぞおもて被成つた事で御座いませう。」 たい「其

處はなんといつても、無駄な孔方をなけうつて置きやしただけ、葉唄はござれ踊はよしと、まんざら野夫がられもしねえ積りさ。」喜次「時にお茶を入れようといふ所だが、僥倖新製の香煎だといふのを今もらひやしたから、湯を一ツ上げませう。其處でまたこの羊羹も、こんどはじめて出來たのだといふ觸れこみで到來しやしたが、切つて看ませう。」ト折の蓋を明けて見て、喜次「成程おつな色に出來てゐる、寄物には能くこんなのが有ります。」ト言ひながら、臺所より庖丁を持ち來り、六七分ぐらゐる厚みにすかりくと切り並べ、菓子鉢へのせて其處へだし、鐵瓶の湯を茶椀へつぎ、彼の香煎を振り蒔いて、喜次「ホイ是れは些と多すぎた。私は風を引いて居て匂ひも何にもわかりませんが、宜いか悪いか一ツ上つて御覽なさい。」ト茶臺へ乗せて差しいだせば、たいイヤ玉手を勞しておそれいつた。之れはこれは、ナニサたいがい煎茶よりは、かへつて香煎のほうが宜うけんす。」トいひながら、彼の湯を一口ちよいと飲み、何だか可笑しな顔をして口を少し尖らせ、スウ／＼と息をそとへ吹いて居る。喜次郎は氣が付かねど、二階に看て居る三人は、ふき出すばかりの可笑しさをちつとこらへて竊々聲、虛ろ「香煎より七色蕃椒の方が、利がよろしう御座いませう。」茶め「シイッ。」へた「臺所へ往つて銅壺のふたをお舐めなすつたら、早く辛みがとれませう。」虛ろ「それは山椒で御座いますッ。」へた「山椒も中に這入つてをりますッ。」茶め「すこしでなくつて、山椒はひつて居たから、スウ／＼

のホウ／＼で御座いませう。」虛ろ「シイッシイ。」ト三人は袖をひつぱり膝を突き、かたづを飲んで見て居るト、喜次郎は大意が前へ菓子皿押し遣り、喜次「この羊羹も新製だといふから、一ツあがつて御覽なせえ。併し食物本草とも云はれるくらゐな大意先生だから、この菓子もモウお口に觸れたで御座いませう。」と言はれて、例の知つたふり、たい「この赤煉で御座えやすか。ナニサ是れは然るところでまだ賣り出さねえのだが、先づ大人のお風味を願ふ、と言つて出しやしたから喰つて見たが、なか／＼妙に喰はせるので、其の後も一兩度取りよせて、人にも振舞ひやしたのサ。此の香煎も能くお手に入りやした。僕さへ他所で一寸飲んで見たまでの事で、お恥もじながらまだ出所だに定かならねえのに、流石は大人だ、妙に何かがお早く集まる。」ト言ひながら、彼の菓子鉢の羊羹を一切とつて口へ入れ、ぐしやりと噛むと生臭き匂ひがふんと胸へこだはり、煉とも付かず蒸とも付かず變な味ゆゑ、これは異だと顔を擧め、頬ツぺたを脹らしてむぐ／＼やれど、吐き出す譯にもいかねば、飲み込まんとするに、ゲツ／＼と咽喉のみ鳴つて下へおりぬを、思ひきつてゲツト飲むと、いよく變に生臭ければ、ゲツ／＼ト突き戻すを、眼を白黒して亦飲めど、胸のわるさに堪へられねば、飲みかけ置きたる香煎湯をあわてて取つて、一口にがぶりと飲むと、先とは違ひ底の方にこて／＼とをどみて有りし蕃椒の種が一度に口にはひれば、アツト言つて反り返り、あきたる口の唇をひつくり返し尖らせて、

ホウ／＼スウ／＼ハア／＼フウ／＼と、息を外へ吹いて居る内、涎はだら／＼懸へつたはり、鼻の上には汗をかき、額口より湯氣をたて、眞赤になつて居るところへ、野良七といふ能樂連中、「ハイ色師の問屋で御座い。御慶申します。」ト言ひながら、委細かまはず上り來り、「ホイ是れは大愚先生、大分よいお色で御座います。喜次さん連中はまだ來ねえか。」喜次「左様ス來たとも來ねえともどつち付かず。」のち「ハテ跛介や飛介は自己より先の筈だが。」ト首をまけて監へ居る。此の時二階の三人は先刻よりの可笑しさを堪へかねては、フツ／＼と吹き出す口を押へたり押へられたり、足ずりして面白がつて居るところへ、また野良七が來りし故、下太郎は天窓をたき、へた「コウ／＼、妙だ／＼。昨夕の寶珠の玉の意趣がけへせる。アレ今に見な、あの野郎も七色香煎湯をぐいと飲みの、龍宮城の煉羊羹をあめぐりと喰らつて、ゲエツゲとは有難山。こんな事と知つたら、牡丹餅だと言つて馬糞もちつと持つて來れば宜かつた。」虚ろ「イヤウ何さま彼奴も飲ませられさうな景色に成つた。アハ喜次さんが火鉢の引出から茶碗を出すわ。」へた「其の癖喜次さんは自分ぢやア飲まねえから、氣が付いてゐるのかしらん。」茶め「彼の人は一杯やるト、通例あの通り飲みも喰ひもしねえが、とてもものことに喰らかせば宜いとおもつてゐるのだ。」虚ろ「そりやア宜いが、餘り笑つたので小便がしたく成つてきた。へた「エ、もう些とだ堪へてゐるろイ。」虚ろ「何様も仕方がねえ我慢をすべエ。」茶め「是れサ聲が高い、シ

イツシ。」虚ろ「鮎と鯨とどぢやうが安い、シイツシ。」へた「すてきに古い、シイツシ。」ト譯らぬことを言ひながら、彼の三人は野良七が容子いかゞと窺ひ居る。

初編 卷之中

此の時下の座敷には、主人の喜次郎大愚にむかひ、喜次「時に先生香煎湯をもう一ツ獻じませうか。そして羊羹は如何、御意にいつたら、御遠慮なすつてはいけません。サア／＼何卒めしあがつて。」ト二切ばかり挟んで出され、「イエ／＼夫れへさし置かれて、自由にちやうだい。」喜次「夫れでも折角挟みましたから。」ト無理に強ひられ、よんどころなく手の平へ請けとり、「ナニサ彼様の珍物を、心なくむしやり／＼と下司ばるやからも有りやすが、得手左様いふ白痴にかぎつて、一ツ三欠する初茄子よ、一山三文の茄子の方が美味えなどと、とんだたはことを言ひやす。實に玉も瓦も辨へなく遣られた日にや、新製だの初物だのト、骨を折るがものは御座いやせんのだ。」喜次「アノ野良公、是れは新製の香煎だといふから、大愚先生にあけたのだが、お前も一椀やつて見ねえか。」ト茶碗取り出し湯を注いで、彼の香煎を振り塗り、サアと出せば、野良七が、「オットお茶臺でちやうだい。イエこれはこれ、左様なお見苦しいお手では恐れいります。ナニサお羊羹は自由に大ききうな所を選つていた。」

きます。必ずく澤山おかまひ被成つて下さいまし。イヤこれは熱いお湯だ。」ト、彼の湯の茶碗を下へ置き、大愚は挟んで貰ひたる羊羹をもて餘し、指の先にて推し潰したり丸めたりして居たりしが、兔角に生嗅き匂ひがすれば、何心なく其の手を嗅ぎ、顔をしかめてわきを向き、「ウ、ツア、ゲエイゲツ。」と身振ひすれど、野良七は氣が付かず、「ドレくもう飲みごろに冷めたらう。」ト茶碗をとり、「成程これが新製の香煎か。」ト言ひながら、茶碗を鼻へ押し附けフン／＼と嗅ぎ、野良「ハツ、ヘエツクシヤウ、え、畜生、あぶなく膝へ翻すとこだ。何だかめつばふ香ばしい。こいつア見體といひ匂ひと言ひ、まるで七色蕃椒といふ鹽梅だ。」ト、やがて一口にぐいと飲み、野良「ア、ア、ツ、ホウ是れは辛い。」ホウ辛イスウく。フウく。ア、ひどい物を飲ませやアはつた。フウくオ、く辛い辛い。早く口直しにその羊羹を喰はせてくれ。」と、甘味で口の辛いのを治す氣なれば、野色七が菓子皿にある羊羹を三切四切一所に摘み、口の中へへしこんで、あぐりと喰るとぐんにやりと血生臭きに「ア、ツこりやアなんだ。ア、くくく變な物をア、ゲエツゲエイツゲエイ、ア、こてへられねえ物をゲエツ喰はせやアがつた。ア、ゲエツゲエイ。」ト言ひながら縁頼へかけいだし、噛み散らしたる鱈の身を吐き出すを見て、先刻より胸の悪きをこらへて居た大愚も、堪らず顔をしかめ、大ゲエツ、ゲエ、ア、ア、これはゲツ、ゲエイ。」野良「ゲエツゲツ。」ト鬼灯ほどな涙を零し、この兩人が苦しむを、

何様した事と喜次郎が譯を知らねば、有漏々々するを、寢匍匐ひて先刻から二階の口より見て居る三人、ゲウツゲツとこみあける笑ひを、外へもらさじと眞赤になつて堪へて居しが、今野色七がゲツゲツと苦しむを見て、下太郎は我をわすれて飛んで起き、「妙だく、コイツア妙だ。」ト、拔足しながら踊り蹴ねるを、「エ、イ其様にドンくやつて、下へ聞えるといかねえワ。」ト、腰のあたりりを茶め吉に突き飛ばされて、踉蹌々々とするけかゝりて、虚呂松が匍匐ひたる脊中の上へ大きな五體で尻餅をどつさりと突くと、虚呂松は先の程より堪へて居た小便なれば、我知らず押されし却舎にツイと出るゆる、顔をしかめて身を震はせ、「ア、ア大變だ、ア、はやくどかねえと止らねえ。ア、小便が出るといへば。アレサ串戯ぢやアねえ。ア、くく苦しい。」と言ふを聞いて、下太郎はわざと尻へ力をいれ、へたしかしいきな年増にでも彼様いふあんべえに遣られたら、まんざら悪くもあるめえが。」ト、上からぐい／＼推し付ければ、虚ろ「ア、ア小便が出るといふに意地の悪い。アレ出るといへば。エ、此の野郎どうするか見やアがれ。」と一生懸命起き上る。この勢ひに下太郎は後の方へ跳ね飛ばされ、先刻下から運び上げた膳の所へ顛倒反ると、猪口も徳利もころがりいだす。虚呂松は尻腰をして、「ア、ア、ア、ア。」と身振ひしながら、「エ、いまくしい意地まがり野郎、こんなに小便をたれさしやアがつて、串戯も時による。何様したら宜からう。」ト困りきつたる顔をして監へ居れば、茶め吉が

「何だ小穢え顔をして、實正に小便をやらかしたのか。」虚ろ「ツイと出たから、まアやらかした様なものサ。」へた「やらかした様なものなら、衣類のつまが濡れて居なけりやアならねえ筈だが、何とも無えぢやアねえか。」虚ろ「其處は御法辨なもので、衣類はまくれて居たから濡らしやアしねえが、犢鼻褌は、オットこいつも彼様いふ事と蟲が知つたか、今日はしめて居なんだつけ。」へた「へん其様なつじ褌の合はねえ申し口といふが有るものか。コレ此處にある徳利の酒を、いつの間にか此様に疊へこほして置いて、小便などと偽つたつて、此の下太郎さまが欺かれる様な甘口なものと思ふか。一升四百の小便なら、彼様して掃除をしてやるわ、勿體ない。」ト言ひながら、虚呂松のした小便が疊にすこし溜つて居るを、酒と思へば平氣にて口を當ててチユツト吸ひ、へた「アツア、ツ、ベツ／＼ピヨツピヨツ、こりやア實正の小便だ。ア、臭えゲエツ、ゲ、ゲエツゲエ、たまらねえ。ゲエ、ツ、ゲ、エ、だれか早く嗽の水を持つて来てくれ。ア、ゲエツゲ、ベツ／＼ピヨツ／＼。」茶め「エ、イ穢え。何故人の顔へ唾をするンダイ。」へた「顔へ唾どころか、口の中へ小便をする奴さへあるわ。」茶め「何處の國に人の小便へ、口をたれこむやつが有るものか。」へた「夫れだつて自己が小便へ。」茶め「手前が好きこのんで小便へ口をしたのぢやねえか。」虚ろ「イヤサ小便へ随分丈夫に口をして置いたのだけれど、朝節に成つて居る脊の中の上へ、あの大きな尻をブンと乗せられた物だから、思はず知らずツイと出た

のだが、まだしも眼の玉が出なくつて仕合だつたナウ。下太公何様だ、このせつの小便は胃の臟に熱があると思えて、すこし濁つて居るから、不斷の様な香口には往くめえが、宜けりやアもう一合お燗を付けようか。」茶め「濁つて赤い小便なら味淋だと思ひさうなものだが、夫れを酒だと思ふのは、矢張醜ばかり飲みつけて居るせらう。」へた「チヨツ彼方も此方も人の胸の悪いのだと思つて、平氣な面をして居やアがる。」茶め「何様して平氣な顔をして居られるものか、先刻ツから眼をほそくしたり口を大きく明いたり、種々な顔をして笑つて居るのだ。」へた「彼様なるからは百年めだ。仕方がねえ、下へ往つて口を濯いで来よう。」ト階子の段を下りにかゝるを、虚呂松がつまへて、虚ろ「コレサ辛抱がひのねえ、下へ往かれるくらゐなら、先刻ツから俸にもぎれる様な苦しみをさせては置かねえわ。」へた「夫れだつて何様して口を此のま、で置かれるものか。」茶め「此のま、で置かれずば、お結びにでもして置いたら宜からう。」虚ろ「しめた／＼宜い者がある。」ト、喜次郎が机の上より筆洗ひの鉢を持ち來り、虚ろ「妙だ／＼、入れたばかりのしかも若水。」「ドレ／＼、成程こいつア天のお助けだ。」と、彼の筆洗ひを持ち窓を明けて首を出し、頻りにグヅ／＼口洗をしながら、小便をこほれし酒と思ひしは徳利看ざる不調法なり

斯かる二階の大騒ぎを知るや知らずや、下座敷の彼の三人は漸く落著き、香煎は七色蕃椒、羊羹は鮪

の切身と性が解れば、今更に知つた風して對へたる大愚も流石間の悪ければ、物に假託け早々に暇を告げて歸り行くを、見るより二階の虚呂松は階子段を馳け下りて、急ぎ廁へ往かんとするを、野良七は捕まへて胸ぐらを緊と取り、のら人に鮪を喰はせたのは此の野郎の仕業だらう、サア何様するか看やアがれ。」ト揺りまはせば虚呂松が、「コレサそんねえな事をする、小便が出るからよしねえといふに、エ、モ息さへそつとついて居るのだアナ。」のら「其様な甘口な言譯ではなすものか。サア何故人に彼様なものを飲ましやアがつた。」虚ろ「エ、揺つちやアいかねえ、アレサ出るから止しなといふのだ。そして自己が知つた事ぢやアねえ、ナウ喜次さん。」喜次「眞正に宜しくねえ洒落をしやアがる。大愚だから宜いけれど、あれが外の者でみねえ、何様に氣の毒だか知れやアしねえ。」のら「夫りやア違へねえ。なんにしても以來の見せしめ、此のまゝぢやア腹が癒えねえ。サア何様だあやまつたか。」虚ろ「コレサアイタ、、、、。エ、この野郎ふざけるな。ア、ア、ア力を入れると猶堪らねえ、あやまつたあやまつた。」と身振ひしながら青く成る故、のら「チョツ仕方がねえ料簡して遣らう。」ト突き飛ばされて、虚呂松は周章でて廁へかけ込んだり。この捫著を如何にぞと、二階の口より見て居たる二人も頼て下り來り、へた「何様だ野良公、新製の羊羹は美味かつたか。」のら「道理で天井が騒々しいと思つたら、何處も居たのだナ。」喜次「そりやア宜いが、喜次さん大變があるぜ。」喜次「ナ何が大變だ。」

茶め「へん何が處かイどしんツイの一件だ。」喜次「何様したと。」茶め「イヤサ下太がどしんと尻餅を搦くと、虚呂松がツイと小便をしたといふ事ヨ。だがその小便は大概嘗めて仕舞つたから宜いけれど、もう一度疊の清洗ひをせざアなるめえ。」喜次「眞正か。」茶め「論より證據だ、二階へ上つて疊の濡れて居る所を嗅いで見な。」喜次「困らせる奴らだなア、ドレ〜。」ト二階へ上る。其の時に虚呂松も廁より出で來り、流石に捨ても置かれぬ故水など汲みて持ち上り、寄つて集つて漸う掃除をして仕舞ふと、茶め「自己ア湯に往つて來るぜ。小便を嘗めた唾を吐つかけられた面の皮の洗濯をして來ねえぢやア、何分にも氣が濟まねえ。」虚ろ「自己も往つて清めて來べエ。」へた「自己も夫れぢやア一所に可往う。」と手拭下けて三人が、「喜次さん一寸洗湯へ往つて浴びて來るぜ。」喜次「二階の疊も連れて往つて洗つて遣つて呉れねえか。」虚ろ「イヤ〜、ありやア矢張あとへ残して疊わけにするがいい。左様すると、うた「疊こそ今は仇なれ、見染めてそめて逢うた其のときやつい轉び寐の。」へた「エ、イ氣障な身振をしやアがる。」と、是れより三人うち連れて程近き浴室へ行き、衣服を脱ぎ捨てその儘に石榴口へ驅け込むと、風呂の中は賑しく都々一などを唄つて居れど、人は纔かに五六人、思ひの外にすいて居る故三人は手足をしめしながら、虚ろ「がうてき〜、お客が少なくて湯がたつぶりだ。」へた「成程虚呂印は何處も彼處も眞黒だナア。」虚ろ「彼處が白ければお公家様だア。」へた「串戯ぢやアねえ三世相を出

して見な。お前は前世に佛の奉加帳を書く墨を三升盗んで、出来も仕ねえ艶文を書いた報いによつて今生へ眞黒に生まれて來ると書いて有るに違へねえ。眞にお前のは體といふのぢやアねえ、黒だといふのだ。湯へ這入るよりやア海の中へ這入つて、珊瑚樹を見附けたら宜からう。」虚ろ「是れが舌味のねえ十寸男色と申すのだわ。なんでも物は黒くなくつていけるものか。先づ神に大黒天佛に黒本尊、歌人には大伴黒主、智者には黒う源義經、黒丸子は腹の痛みを治し、黒塀は盜賊の難をふせぐ。物の上手を黒人と言ひ、通るものを黒う人と稱す。黒のお羽織に黒草をどし、淨まり「頭巾まぶかに身をかため、通ひなれたる朱雀の露、露ふみしだくじゆんそくは。」ト、へた「ひん／＼犬わん猫にやアちうアツ。こいつアすてきに沸いて居て、脚はなか／＼入れられねえぜ。」「體が冷えて居るから湯みて熱い様に思ふのだト、言つた許りぢやア文盲なやからには釋るめえが、湯みるといふのは湯が體へしみるといふを縮めた言葉で、酒がしみれば酒みる、茶なれば茶みるサ。都て彼様いふ處が詞のはたらきといふものだ。」へた「宜いサ夫れぢやア其の積りで這入ると仕よう。イヨ眞ツ風呂御湯う宛、ア、なかなかこいつア湯みる／＼。」虚ろ「ドレ成程よく沸かす、御まんざい湯とは、やたらに馬鹿氣て焚きんます。」へた「夫りやア宜いが茶め吉は何處に居るか、大分神妙だノ。」虚ろ「彼方の隅に居る様だ。オイ茶め公、些と五色の遠吠でもはじめねえか。」茶め「自己が語り出すト、女湯に長湯のものが出來て

氣の毒だから、夫れよりやア矢張りお前が木魚の聲色でも始めさつせえ。」ト、中段へ片足かけ變な身振をして居る故、へた「なんだ茶め公何様かしたのか、腕組をして米を搗く様な眞似をして居るぢやねえか。」茶め「燕雀なんぞ大鵬の心を知らんサ。彼様いふ形をして居るのが其方杯に釋るものか。是れは自己が工夫をして思ひ付いた事が有るから、やつて見て居るのだ。」虚ろ「足下の工夫ならどうせろくな事ぢやアあるめえ。」茶め「へん漢の相丞、忠武侯、諸葛孔明、南朝の廷尉楠、河内判官正成といへども、未だ心の付かざる處、和漢未發前代未聞の珍藝だ。眞に妙な所へ氣が付いたト、我ながら感激に堪へて居るのだ。」へた「何だか前文を聞いた處ぢやア餘程の事らしいが、本文は小便の泡程にも行きやアしめえ。」虚ろ「その腕組をして米を搗く様な眞似をして居るのが、楠も孔明も氣の付かねえ前代未聞の珍藝と言ふのか。」茶め「其様に氣が揉めるなら言つて聞かせよう。だが必ず後日に至つて自己が監へたなごと、人の工夫を盗むめえヨ。エへん先づ彼様そくに立つて兩の腕をしつかりと組み、十本の指を皆脇の下へ仕舞つて置いて、少しも手を出さずに足でばかり湯の中へ這入るといふ妙藝を工夫したのだ。」へた「ウ、ツ、アハ、ア夫れで先刻ツから米をつく様な腰ツつきをして居るのか。成程此處までは楠も孔明も氣が付くめえ。其の位なことを工夫をしだしたら、人に賊まれようと思つて氣の揉めるのは尤もだ。お前の慈母が道祖神様へ御願をかけ、その夜馬と鹿が跋ねて居る夢を見てか

ら、足下を孕んだと言つて咄したが、申し子といふものは諍はれねえもんで、果してこの位なことを監へだした。」 虚ろ「ハ、ア其處で中段へ足を乗せて、ちよい／＼と跛ねて見て居るのか。」 茶め「へん知慧のねえ奴等が寄つてたかつて嫉め／＼。其の代り跡で仕て見たく成つて、真似をすると承知しねえぞ。」 虚ろ「併し是れは拜見事で、何様して此の中へ手放して這入らうと言ふのは中々六ヶしい、オツト、浮雲し。又へんたらこか米も其の位に搗くと、餘程の上白に成るだらう。イヨどつこい／＼、此度は大分宜ささうだ。」 「ヨオ引イ／＼チンチリ／＼、評判ちや／＼。」 ト、下太郎虚呂松が雑ツかへすを、耳にも懸けず茶め吉は一人真に成つて腕ぐみなし、中段まで上りたれど、並より深き風呂箱のゑ、なか／＼這入り兼ねたるを、亦種々に渾身をやつて、漸うに上の板を跨ぎ中の段へ足を踏みかけしめた／＼と言ひながら外の段の足を上げて這入らんとするその拍子に、中の段の足が二つて、余らこと横ざまに風呂の中へ轉がり込み、「ア、ツフ、ブク／＼、ア、／＼、ガブ／＼、ブク、ア、ツ。」ともがきまはる其の手先が、傍に這入つて居る人の臈丸へさはると其の儘緊りと捕まる故、先の男は顔を皺め、「ア、ツア、痛た、此の愚鈍め何をする。」と、漸う湯から首を出し、立ちあがらんとする横ツ小鬘を、力まかせに突き飛ばされ、亦余りと向うへ倒れ、隅の方に都々／＼を唄つて居たる人の天窗へ否といふ程湯をあびせれば、物をも言はず彼の男が両手を出し突き戻すに、奥の方の板羽目へゲワン

と言ふほど天窗を打ち付け、「ア、いた、／＼、／＼、此奴等ア何をひどい事を仕やアがる。」ト眼をむき出せば、都々／＼を唄つて居たる彼の男、「ナニ糞でも食らへ、糞取めエ。何だイ人の天窗から湯を浴せやアがつて、ぐず／＼言かしやアがる」と、獅子ツ鼻を捻り切つて、眼鏡屋の看板にするぞ。」ト言ひつ、ずつと立ち上る。茶め吉も勃然となり、「ナニ自己が鼻が獅子ツ鼻だと。」ト言ひながら先の男を一寸見ると、薄暗ければ能くは知れねど、腕から胸へ真黒に見ゆるは慥かに彫物にて、角力取とも言ふべき程な大男故、ぎよつとして後の方へ尻込しながら、「ナンノ獅子ツ鼻だつて鼻は鼻だ。手前の鼻が高いつて其様に誇ることアねえ。是れでも随分勻ひはすらア。」ト、何かグヅ／＼いひながら餘所の人の陰の方からこそ／＼と逃げ上り、流しの隅に何くはぬ顔して洗つて居る。下太郎と虚呂松は頻りにクツクツ笑ひながら、つゞいて後から上つて来、へち茶め公感心々々、真に前代未聞の珍藝だ。へんたらこの仕打から余りと中へ落ちて、其方へ突き飛ばされ此方へ突き飛ばされ、一番の打留めに羽目へコツキリ天窗を打付けた所なんざア働いたもんだ。芝居でするト彼のコツキりが幕切の拍子木だらう。」 虚ろ「後生恐るべし、人は見かけに寄らねえものサ。盗むなど言つたのは尤もだ、自己ア彼の位の離れ術ぢやアあるめえト思つた。」 茶め「エ、イゲラ／＼人の愁へを見て面白さうに、自己が楽しみにして居やアがる。お前達やア不實の上なしだ。加勢をしてくれようとはしねえで、同じ様に遠くから手を

伸ばして毛を引張つたり、尻を突衝いたりしやアがるのだものヲ。」 虚ろ「夫れだつて楠でも孔明でも氣の付かねえ程な事を監へるお前だから、脇から尻腰な様に見えても、何様言ふ謀畧があるか心底が釋らねえから、空然口は出せねえぢアねえか。」 茶め「夫りやア自己だものヲ、慮りがなくつて何様するものか。彼の野郎に泡を吹かせる様な仕返しをするのは方寸の内に有るのだ。」 虚ろ「夫れ見ねえ亦前代未聞の工夫をしだしたらう、智者は智者だヨ。」 へた「だけれど藥箱を持たねえから、天窗を羽目へ打付けた時なんぞに不自由だ。」 茶め「へん其様見くびつた事を言つて後で悔りしなさんな。織田信長なんぞも始めは空馬鹿を遣つて居たぜ。」 ト、言ひつ、脇を一寸見ると、突き飛ばしたる彫物だらけの大男が、何時の間にか風呂を出て水船の方へ來る故、茶め吉は周章てて風呂の中へ驅け込み、隅の方へ縮んで居るト、暫時して彼の男が這入つて來り、茶め吉が居るを知るや知らずや、立ち發騰つて胸の四邊を洗ひながら、側に竝んで這入つて居る五十許りの男に向ひ、「モシ源兵衛さん、世の中にやアおへねえ愚鈍が有りやすネエ。風呂の中へ手放して這入ると言つて、足を迂らしやアがつて湯の中へのめすり込み、私が天窗から題無しあびせやアがつたから、はたき飛ばして獅子ッ鼻ト言つたらブツ／＼脹れて居やアがつたが、獅子ッ鼻所か穴が竝んでホント明けてるといふ許り、糞桶の紐通しにやア劣るのだア。其のくせ口のへらねえことを言やアがるから、捻り潰して遣らうかと思ひやし

たのサ。」 虚ろ「ほんにナウ、お前の力で捻られては堪るめえアハ、、、。」 大男「しかし彼様な野郎でも、豆腐の殻や小豆の糟で育つたのぢやア有りやすめえ、矢張飯は十人竝に喰らやアがるだらう。勿體ねえぢやア御座せんか。」 ト、頻りに諷つて咄して居るを、後の方に聞いて居た茶め吉が、餘りの事の悔しさに引摺り倒して遣らんと思へど、根が大の臆病者故、躍起と成つても恐怖が一ぱい、ガタガタ震へながら徐々と手を伸ばし、彼の大男の脚と思ひ、竝んで嘯を聞いて居る鄰の老父の足首を緊と捕へて、一生懸命力に任せてウンと引けば、思ひもかけぬ不意を打たれ、アツト言つて彼の老父が余り風呂へ顛倒るを見るより、四邊の人々は何様した事かと立ち騒ぐ。茶め吉は呆れかへり、あつけに取られて居たりしが、「コリヤ間違つた大變。」と、人を掻き除け突き除けて風呂の中より飛び出し、逃げ出でんとする石榴口、此の物音に驚いて何事にやと表より這入つて來たる下太郎が、天窗へ天窗をグワント打ち付け、雙方後にとつさり尻餅。 へた「ア、いた、、、。」 茶め「ア、いた、、、た、、。」 へた「目から火が出た。」 茶め「鼻から出ないで仕合。」 へた「エ、洒落所か龜の尾を。」 茶め「自己も矢張龜の尾を。」 へた「互にとつさり腰折が一首浮んだ、式子内親王の地ぐりく、」 龜の尾よ腫れなばはれね流しにて打ちしこの湯ぞ今は忌しき。」

初編 卷之下

再説喜次郎が家なる能樂亭には、茶め吉、下太郎、虚呂松の三人が沐浴するとて出て往けば、嵐の吹きし後のごとく寂寥とする其の折から、裏口の戸を瓦落裏と明け、「へい鳥花屋で御ざいます。只今にお客さまが被爲入と被仰いました。」ト、言ひつ、突き出す廣蓋の酒の肴に、喜次郎は首を傾け、「ハテナ誰だらう。」のら「跛助か飛八のうちサ、先刻其様なことを言つて居たから。」喜次「彼奴等にしてはチト氣張名古屋ぢやア代の都合が出来たト見えるノ。」のら「やアとこそといふ玄關つきで、懐の都合がよおんやなト成ると、奴等の口が直におごつて来て、彼りや否々此りやいや〜と言つたら、この欄でもせえと臺所のすみへ追ひやつて置くがいい。」喜次「其處でもつて来たものはなんだ、刺身に煮魚。シテ鍋は。」と蓋をとり、「白魚に生海苔、貝のはしらに萌し三ツ葉も、些と代脈の調合めくノ。」のら「ドレ〜代脈の調合を一ツくはせて見な。」ト鍋の中へ指を突込み、「ア、ツ、オ、オウ熱かつた。」喜次「コレサ何様したものだ。そして汁ものなかへ手を突込むやつが有るものか。」のら「左様いふけれど、刺身に烹肴鍋ばかりぢやア寂しいから、指の先を焼肴で少々不間にも添へるつもりだト言つたら、おめへが成程野良七も粹の酢のものだ、ぬたには置けねえと言つて、潮やたらに譽めるだらう。」

喜次「なんのまはりもしねえ口取で、言譯をしたし者だけ、かへつて味噌汁をつけるのだ。」のら「オヤ大平な事をいふの。」喜次「エ、サしつツこい、何の道當人の知れるまでは町内の係りあひだから、そつくり此方へ入れて置かッし。」のら「ヘン洒落に負けた悔しんほうに、權柄で用向を言ひ付けやアがる。」ト、彼の廣蓋の酒の肴を座敷の方へ持ち込んだり。此の時表の格子戸がぐわらりひつしやり、どたばたとするかと思ふと、茶め吉が息もせい〜遽しきけんまくにて、履物掴み驅け上り、茶め「おいらをオおつかけて来る者が有るかも知れねえが、モもしキ來たらシ知らねえト云つてくんねえヨ。」ト言ひ捨ててあわてふためき、二階へ往きしが、直ばたく〜と下り來り、茶め「ニ二階の戸とだなは一杯でカ隠れる事が出来ねえ。」ト、四邊をきよろ〜見廻して、一人何やら點頭きつ、手に持ちたりし駒下駄を懐へ押つべしこみ、周章てて雪隠へ驅け込んだり。喜次郎と野良七は此の有様を茫然とあつけにとられて見て居たりしが、少し聲を低くして、喜次「何様したのだらう、何でも唯事ではねえト思はれるぜ。」ト言ふを聞いて、野良七も小聲になり、のら「左様ス、目の逆つた鹽梅から帶の結び様を見ると、野狐でも付いたのぢやアねえか知らんテ。」喜次「何様それだ、夫れに違へねえ、察する處その捕付いた狐が犬に追はれたのだらう。」のら「何にしても此の儘ぢやア釋らねえから、一番素引いて見よう。オイ茶め公お前は何様かしたのか、茶め公といへば是れサ茶め公、何故返辭をしねえの

だ。ト、言はれて茶め吉は、雪隠の中よりちひさな聲にて力をいれ、茶め「エ、イ其様な大きな聲で自己が名を呼ぶな、追蒐けて来た奴等が立聞をして居めえものでもねえわ。ア、何にしても息が切れて、咽喉が乾つ付くやうだ。茶でも湯でも浪々と、大きなもので一杯持つて来てくだッし。」喜次「ア、彼様な事をいやアがる。」のろ「エ、イ愚鈍な、雪隠のなかへ湯茶をはこぶ奴があるものかい。」ト、言ふを聞いて、喜次郎は野良七が袖を引き目で知らせ、喜次「夫れでも、鱈か鱈のやうなものなら、雪隠へ持つていつて遣つても宜いぢやアねえか。」のら「左様サ、オ、茶め公、鼠の天麩羅か油揚げの極上ものぢやア何様だ。」茶め「エ、イじれつてえ、お前たちやア狐にでも化されたのか、雪隠の中で咽喉のかわいたのに、其様なものが何になるのだ。」ト言はれて二人は顔見合はせ、またく少し小聲になり、「アレ彼方で自己達のことを化されたんぢやアねえかト言やアがる、成程狐といふものは、早く人の氣をとるものだ。」喜次「何にしても茶をくれの湯をくれのト、飲みたがる所を見ると酔醒の狐だらう。」のら「左様サ、若し後引の狐なら、モウ五合と來るとこだ。」喜次「袖の梅か紫金錠でも飲まねえかと言つて見ようか。」のら「何様して、其様な甘口な事ぢやア追付くめえ。」喜次「凶な事はじまつたなう。」のら「楯籠つたとこが悪いから、蕃椒でいぶすといふ譯にもいかずサ。」喜次「雪隠を住居にしたとこを見ると、何でも葛西街道の狐に違へねえぞ。」のら「左様サ、半田の稻荷の眷屬かも知れねえ。」喜次「何故履物を懐へ入れたのだらう。」のら「ナニサ畜生にも容赦のがあるといふから、人にも履かれるトいけねえと思つてだらうサ。」ト、一人は少し不氣味になり竊々評議して居る所へ、下太郎と虚呂松が急ぎ足にて歸り來り、虚ろ「オヤ茶め吉はまだ歸つて來ねえか。」のら「歸つてこねえ所の騒ぎぢやアねえ、これに捕付かれての。」ト、額の處へ手を遣つて、狐の眞似をして見せれば、エト悔り、虚ろ「ナニれこが付いたと。」下太「何か眞面目になつて謀るぜ。」喜次「ウムにやサ眞正だヨ。」へた「夫れだつて今湯の中で。」ト是れより彼の喧嘩の次第を委しく嘸し、「トいふ譯で相手にあぶなく捕まらうといふ所を逃げ出して來たものヲ。」ト咄すを聞いて喜次郎が、フムと言ひつゝ、手を拍き、「左様か、夫れでよめた。相手が追驅けて來るかト思つて、見つからねえ様に履物を懐へ入れて、雪隠へ逃げ込みやアがつたのだ。」のら「左様サ、大方横町の斑犬に外交したのだらう。」下太「ア、レ矢張狐だト思つて居やアがらア。」のら「フムウ狐ぢアねえのか、して見ると狸か貉の仕業だらう。」へた「釋らざアいいよう、忌々しい。」虚ろ「茶め吉の野郎めえ、雪隠へ楯籠つて、いざと言つたら屁ツ放を打ち出さうトいふ料簡だらう。」下太「違へねえ、屁け田尻ツ頼が屁ん目山か、屁田尻ぶ長の屁ん能寺氣どりで居るのか。ドレ、一寸屁臭見舞に往つて來よう。」ト雪隠の所へ行き、へた「オ、茶め、將軍和睦が調つたから城を出なせえ。此のせまい所へ糞の如く鎖籠つて居たら、劔戟を置くすぎがへしも

無くつて、嘸不自由だらう。」ト開きのさるへ手を懸けて引張れば、内よりしつかり押へて居るゆゑ、
 下太「コレサ何故其様な事をして居るのだ、城門を開きねえといへば。」茶め「何様して此處を出られる
 ものか。然してお前達も朋友甲斐のねえ、其様な事を言つて自己をおびき出し、相手方へ渡さうと言
 つたつて左様はいかねえ。」下太「其様な裏切をするものか、和睦が調つたから開城しろといふのだ。」
 茶め「真正に調はせて呉れたか。」へた「免も角も大手の木戸を御明け候へ。」茶め「エ、夫れだから此處を
 はなすことは出来ねえといふのだ。」へた「ハ、アべらほうにおびえやアがつた。其様に出たく無けり
 やア何時までも這入つて居さつし。」茶め「ト言はれるト亦出城を仕たくなるやつヨ。」ト言ひながら
 雪隠の戸を明けて顔を出し、茶め「ばア。」下太「エ、此の野郎、ばアもねえもんだ。人に散々骨を折ら
 せやアがつて。」茶め「自己ア追蒐けて来るだらうト思つて、實に氣をも、ちがさ、彼様安々と濟まう
 とは白はりの。」ト言ひながら座敷の方へ往かんとする故、下太「手を洗はねえのかイ。」茶め「夫れだつ
 て只楯籠つたばかりだものを。」下太「楯籠つたとつて穢えやイ。」茶め「チヨツやかまし百成野郎だぞ。」
 ト、不承々に手を洗ひ此方へ来れば、喜次「ハ、アたうとう城からでかけたノ。」虚ろ「夫りやア宜い
 が茶め公、お前の引きすり倒した男は此處の長屋の家主様だとヨ。」下太公と二人で詮言をいつて濟ま
 しては来たけれど、お前も無言つて居ちやア能くねえ、喜次さんに連れて往つて貰つてあやまつて来

なせえ。」喜次「エナニ、夫れぢやアあの源兵衛さんの足をやらかしたのか。」虚ろ「左様サ、その源兵衛
 さんといふのサ。少しの事で辨慶さんだト強いけれどなり。」喜次「夫れぢやア何ほ彼の人気が宜い
 とつて打捨つちやア置けねえ。そして此處に遊んで居るから、猶の事一刻も早いが宜い。サア一所に
 往つて遣るから歩行びなせえ。」茶め「何様してとんだつまらねえ事を言つたものだ。」喜次「何故々々。」
 茶め「夫れだといつて敵の城地へ踏み込んで、萬一和議の破れた日にやア、帷幕のうちから伏勢が起つ
 たり、城門の外に落とし穴が有つたりして見なせえ、阿修羅王へ獅子奮迅の冠を著せ、悪鬼羅刹へ
 三面六臂の鬼神をしんにふに掛けたつて、敵は大勢味方は一人、頼むお前は二心、といふのだ物チ、
 防禦の便術があるめえぢやアねえかナ。」のら「ナニサ、敵城へ踏込んで、事破るゝに及んだら、
 豫ては腰に用意の山八煙草の煙をあけるが宜い、夫れを相圖に味方の貧勢、貧おどしの鎧を取つて肩
 になけかけ、貧の鉄方火の車の前立もの打つたるくる獅子頭の兜を猪首に著なし、困らせ丸と號けた
 る難澀代の太刀を横たへ、借金の利足高の羽に剥ぎたる言延三年竹の征矢を、無理の如く負ひ做し、
 借用證文の加印五人張の強弓を、慾の皮の鷲掴みに握り、家の前の瘦犬鹿毛へほんくら置いてのそ
 りとうち乗り、諛八百人の貧卒を前後左右に引きしたがへ、七偏人第二編ひき續き賣出しと書きたる
 大旗を、青柳橋の朝嵐に翩翩とひるがへし、案内は知つたる路次の細道、敷き連ねたる溝板を、勇み

にいさんで踏み轟かし、大手の門の格子先、雨だれ落の堀際までひしくと推し寄せたり。」ト、却舎にかゝる高調子、側にありたる年玉の、萬歳扇をひろひ取り、火鉢のふちを敲き立てる折から、表が瓦落裏ト明く故、喜次「サア、お肴のお客様がおいでなすつた。」茶め「お肴のお客様たア誰だ。」のら「飛八か跂助のうちサ。」茶め「左様か、そんなら一ばん驚かして遣るべえ。」ト、言ひつゝ、立つて這入口の、障子の陰にかくれて居るとは知らず、風呂の中にて茶め吉に引きたふされし家主の源兵衛、此の表を通りかゝり、下太郎が扇をもつて敲き立てしやべくるを聞き、講談が始まりたると思ひ、大の講釋好きゆゑ案内もなく上り來り、「イヤ御免なさい。」ト障子をあける顔を見て、喜次郎始め皆々、飛八か跂助とは思ひの外、茶め吉がことならんと察し、はつとして、喜次「コレハ源兵衛さん、サアサア此方へ。」ト言ひながら、陰に隠れてねらつてゐる茶め吉に目ませをもつて知らすれど、茶め吉は飛八か跂助の事を欺つて、源兵衛さんといふならんと思へば、少しも構はず、彼の源兵衛が敷居をまたぎ這入らんとするそのとたんに、「ワアツ。」ト言ひつゝ、妙な手をして飛び出づれば、源兵衛は不意を打たれて肝を潰し、「エ、冗談を。」と後へさがる。その顔を見て茶め吉も仰天し、突き出したる手を上げたり下げたり亦振りまはしたり、「ワア、ア、くわあ、あ、ん、くのわあ、わん、く、く、きやんきやんきやん。」ト、犬の吠える真似をしながら、鐵籠へかけ出し、亦も雪隠へ逃げ込んだり。源兵衛は是

れを見てあつけにとられ、空然として立つて居る。四人の者は吹き出す許りの可笑しさを、しつかり奥歯で噛みしめて、しばらくグツグツと言つて居たるが、喜次郎は漸く笑ひを飲み込んで、「イヤ是れは恐れいつた。今の男がお前さんとは知らず、跂助といふ朋友だと思つて、とんだ鹿相を、御免なすつて下せえ。」ト言ふを聞いて源兵衛は苦笑ひ、「ハ、ア夫れではその跂助さんの爲には、私が次信で、君のお馬の矢表へ駒をかけ居る立ちふさがりかね。」 虚ろ「是れは茶め吉が、なんほ平氣でも少々りの経であつたらう。」 喜次「何かとんだ壇の浦で、お氣の毒さまで御座います。」 源兵衛「それは宜いが、お講釋がはじまつて居た御様子故、私もお聞き申さうと思つて上つたのだから、サアお構ひなくお遣んなすつて下せえ。」 喜次「アハ、ア、イエ講釋とお聞きなさるのは御尤もだが、全く左様では御せえやせん。アノ茶め吉を、お前さんのお宅へ倍禮につれて出ようと存じて、其の事をはなして居たところ。」 虚ろ「すると茶め吉がお前さんのお家へ參つて、堪忍して下さらねえ日には大變だト申すト、此の下太郎が。」 下太「左様々々、諺をいへば、八百本のあやまり證文を青柳橋の朝嵐にひるがへし、貧の鉄形はおろか家の前の瘦犬をかけまに賣つても、自己が申へはひつて倍禮つてやるからト、勸めて居たところでお座います。」 源兵衛「ハ、ア夫れではお講釋ではなくつて、仲人にはひらうといふ御相談かエ、何様いふ理窟か知らないが、町内うちのことならば、及ばずながら、私も口をそへて上げませうか。」

喜次「ナニサ貴君へ倍禮につれて参らうといふので御座います。」源兵衛「フムウお長屋の行事は、今月は
お前さんか、ヤレ〜御苦勞千ばんな。」喜次「ナニサ長屋うちのことでは御座いません、先刻湯の中
でおまへさんに失禮をいたしましたのは、今亦人違ひでお前さんを驚かした男で御座いますから、その人
物を倍禮に。」源兵衛「ハ、ア成程。イヤ夫れならば別段御挨拶にはおよばない。風呂ぢうでは何本もあ
る足だものう、生憎つらまつたのが此方の不調法、時にとつての不仕合と申すものだ。」ト、此の源兵
衛もお心よしと見えて、何事も氣に留めぬ様子を、茶め吉は雪隠の中にて窺ひすまし、六ヶしきこと
もあるまじと高をく〜り、頓てのそ〜出で来り、源兵衛が前にもぢ〜とかしこまり、「是れはお家
主様、先達は洗湯で御失禮つかまつりました。ナニサアノ、彫物だらけな野郎が、餘りりきみやアが
るから、すんばらしいめに合はして遣らうトぞんじた所が、ツイお前さんの足をつらまへて引張りや
した。全體お前さんの足は大層なお毛がお生えなすつて御在でなさる、彼の御様子では東埔塞などを
いくらめし上つても、お氣づかひは御座いませぬ。何卒失禮のところは眞平御免なすつて、下さる様
にいたしました御座ります。」源兵衛「イエサ、御挨拶では痛みいる。必竟私が悪いところへ足を出して
居たので能くなかつた、出る足人にひかる、のたとへ。サア〜お構ひなく雪隠へおはひんなすつて
お在でなさい。左様なら喜次さん、お講釈が有るのだト思つて大きにお邪魔をした。何方も澤山お咄

しなさい。」ト言ひつゝ、表へ出でて行く。茶め「べらぼうに氣の宜い家主てきだなウ。」喜次「ア、見えて
もなか〜の通人サ。」茶め「道理で足にいかいこと髭が生えて居たツツけ。」下駄夫れは宜いが、彼處の
隅にある廣蓋の肴は何様したのだ。」盛「違へねえ、自己も先刻から左様おもつて居たが、出すもの
ならさつさと出して仕舞へばいい、冷く成るぜ。」喜次「出すものだかひつこます物だか、自己にも釋
らねえのだ。」のら「モウ野郎どもは出て来さうなものだなア、何をしてるやアがるか。人のぐびを咽
咽させやアがる。いつその事お施主に構はず、鍋炒喰ふれんけきやう、中の汁がだぶだぶ〜と、
お經をあけて仕舞はうぢやアねえか。」下「左様サ、こいつア上げて仕舞ふはうが宜い、夫れでねえ
と五人の亡者がうかび兼ねる。」ト、言ひつゝ、立つて廣蓋を持ち出でんとするその折柄、表の方にて大
聲上げ、「御上酒のお入イ引。ドン〜オヒウ、テン〜〜〜テレツク〜〜〜テン〜〜〜。」ト
言ひながら跂助が、片手には壹升樽、片手は突袖しながら威張りかへつて這入り来る。此の時裏口よ
りも障子引き明け、「御上酒のおいりイ引。ドン〜オヒウ、テン〜〜〜テレツク〜〜〜テン〜〜〜
テン〜〜。」ト言ひながら飛八が、片手には壹升樽、片手は突袖しながら、何か體をぎくしやくとしや
ツちこ張らせて入り来る様子、趣向ありけに見えければ、喜次郎はじめ四人のもの、顔見合はせてた
めらひ居るうち、跂助と飛八は、猶オヒウテン〜〜〜ト言ひながら、持ちたる酒樽を其處へさ

し置き、はね「扱上使なれば上座御めんと申すところなれど、上酒の儀に御座りますれば、上へはのほ
 らず則ち是れに居り著きまする様に御座ります。」七八「跂助は上酒々と申しますれど、私のは上酒
 では御座りません、誠にお龜酒玉のしるしまでに差し上げます。」喜次「是れは有り難うぞんじます。左
 様して何かいかめし氣な御容子なれど、御口上は夫れでお仕舞ひに御座りまするか。」跂飛「左様で御
 座います。もはや皆に相成りました。」虚ろ「御持參の樽の中は、全くの御酒で御座りますか。」飛八「左
 様で御座います。只今四方の見世にて、一樽に付き一朱を一ッ差し出し、上端ぐるみ三十二文、つり
 を取つて買ひ求めましたれば、酒かとぞんじまするやうに御座ります。」のら「シテその一朱は何様し
 て面工をなさいましたか、今日はお下著が一枚御不足のやうに思はれますが、若しや飛ばしでもなさ
 りは致しませぬか。」はね「イエサあれも飛ばさうとぞんじた所が、裾まではしが損じましたれば、漸く
 二朱ト六百しか用だたぬト申します。」茶め「夫れはけしからぬ下直なこと、私の目利では百疋一朱
 がものは有ると思はれます。」下太「左様にむごい事をまうすなら、いつそのこと屑は御座いにお賣り
 はらひの方が嵩が上りませう。」飛八「時に跂助どの、彼等はけしからぬ失禮を申すやつらでござる、
 もはや口をおきなさるナ。」はね「左様々々、夫れが宜しく御座る。イヤナニ喜次郎どの、先刻鳥花
 やへ申し付け、山賊の強盗を空ししよ置いたる時、定めて参つて御座らうナ。」

りたれど、是れなる四人の者共が悉く喰らひしめ、入物許りは残り置きましたる様に御座ります。」
 飛「エほんたうか。」はね「いけねえぞ〜。しどい事をしやアがつた。」ト、立ちにか、れば喜次郎が、
 「ト云つて驚かしたるまでのこと。サア〜意地きたなしが、執念のか、つた廣蓋を出したり出した
 り。」虚ろ「オット承知だ。」茶め「運ベナア引八里は馬アでも越すがナアエ、引はッはやつこりやどつ
 こい重いぞ〜。」下太「エ、イそれ傾けて持つと翻れるわ。」のら「鍋は冷えたから火鉢へ掛けることと
 しよう。」ト、是れより七人うち圓居飲むほどに喰ふほどに、跂介飛八が持ちきたりし二樽は、たちま
 ち枕をならべて板の間の隅にころけ、廣蓋の上には入物ばかり空然たり。喜次「既に先刻この亂軍に成
 らうといふ所を、大愚にさへられ酒戦なかばで終つたのだが、斯う見えても重詰許りぢやアねえ、
 いざと云へば持ち出す積りで、肴の用意はして有るのだ。」と、戸棚の中より二種三種のものを取り出
 し、是れは吸物是れは鍋と直にしかける肴の後釜、酒宴ます〜盛んにして、いつ果つべきとも見え
 ざりけり。跂「時に明後日は初卯といふのだから、連中一同で押出しちやアどうだらう。」のち「宜かる
 べしよかるべしダ。」茶め「亦婦人どもに惚れられようといふのか。」虚ろ「オット自己といふ好男子が往
 くから左様はいかねえ。」下太「エ、イ亦凸凹共がいがみ合ふのか。」飛「陸から押さうか船で往かうか。」
 のら「陸にもせよ船にもあれ、七偏人とも言はるべきものが、只往くといふ法は有るめえ。」はね「なん

の只往くものか、人々に何程でも面工をするが宜いワサ。」のら「エ、イ釋らねえ、只は往かれめえといふのは、何か趣向をせざア成るめえといふ事だワ。」はね「佗びて行けば吹筒、華美にやれば藝者を召し連れるのサ。」のら「夫れはサ、通例の人のする事だワ。左様でなく何かサ面白い趣向が、オット思ひだした、アノ池の端の和次さんの連中を見た様な事を遣りてえのだ。」茶め「人を荷がうといふのか。」下太「荷ぐのなら、ホイ駕籠の連中だらう。」「エ、イ無言つてゐるイ。」飛「茶番といふやつで往くのか。」のら「左様サ、その茶番サ。」喜次「夫れなら極面白い筋があるぜ。」はね「何のお前の智慧でろくなことが出来るものか。」喜次「左様いふけれど、是ればかりは年來監へておいたから、眞にどつと請ける積りのだ。マア彼様いふ趣向ヨ、一寸聞きねえ。ホイ紙數がみんなに成つたか、嗚呼惜しいけれども仕方がねえナア。」

林妙竹 七偏人二編序

似て非なり桐に鶏竹に猫と、例の善悪なき誹諷の、狂句に洒落た口號に、聊か因める竹林、ハア豹脚を相手に酔語を巻く、七賢人に似て非なる、妙竹林話の七變人、數も七色唐がらし、胡麻粉、芥子粉、山椒粉、甘いと辛いを春き交せて、爰に著述せし金鷺子の、滑稽笑話を一回開けば、堅面老爺の固藏も、思はず腮の掛鑰を脱して、御臍に茶を沸かし、怒氣顔の癖窟野郎も、フ、フ、フツト吹き出して、笑ふ門松福は内、鬼討豆で無事息才、笑ひの内病發表して、卽座に平快る良劑奇藥は、又と世界に人の穴、妙に穿つてごぜえヤス、ト僕も側から褒賞し、愚文ながらも三番叟、トツパヒヤロと鴉飛び、東天紅と告げ渡る、時を夜明の宮神樂、初卯參詣の戻り路、一寸一幕立茶ばん、たち廻りさへ太鼓橋の、音にかよひたる天神橋、人は巴に挑みあふ、下にははやし連中が、音曲入の一趣向、鳴り響くまで御最眞の、船が中ると聴くさへも、幸先よしと似て非なる、敍らしきものを有りツ丈、智慧をふるくも猫糞で、筆に頭顱を搔くのごとし。

清江舍秋水誌

林話 七 偏 人 二編卷之上

三人で三分なくなす智慧を出しとは、川柳者流の穿ちの妙句、實に若いどし打寄れば、寢いり貉も狼ものも、面白狸の腹鼓にそゝなかされて、磯端から船で往かうかお駕籠にしようか、夫れともずつと氣を替へて、二十四日は愛宕山、月の八日は茅場町、大師河原、堀の内、縁日あるき信心参り、あるは淨瑠璃茶番のくはだて、見世物芝居の見物に、とんだ二さいの散財を、オット來なせと呑みこんで、前後構はぬ無分別も、其の座の餘興といふべきなり。然れば七人の懶惰者も酔ひの廻るに隨つて、彌道化の枝葉をそへ、今年の春の初催し、恵方がてらの初卯まうで、往かずんばあるべからずと、連中ずつと乘氣に成り、思ひついたる茶番の趣向に、喜次郎鼻をうごめかし、扱自己が年來監へて置いた茶番の筋といふのは。」茶め「オット待つたり、此方にはその年來の天窗へ、數の字をとまらせて、數年來仕組んでおいた趣向といふのがあるから、平の年來は次へまはして、位のついた年來から先へ本讀に掛らう。」虚ろ「しかし數といふ冠り付きなら、申し上げてもお取り用るにはなるめえ。都てすの字の付いたものに、ろくなのはねえ、すこたん、素股、すほける、すかし屁サ。」茶め「イヤ

サ、すかし屁だか階子屁だか、本讀を嗅がねえで釋るものか。エヘンウフン、先づ。」下太「オットその先づといふのは、美味くねえといふ發語のことばか。」茶め「エ、手前も出るか、だまれ〜。ノホン扱。」のら「アハ、ア先づでなけなしの鼻ッばしらを捻ぢられたもんだから、扱といふ初聲を發したわ。」喜次「しづかに〜、本讀のすむまでは當人の外口を聞きツこなした。」茶め「夫れがいいそれがいい、ア、其處で當日は此處の河岸から一葉浮べるとして、大道具小道具鳴物類一切積み込み、朝まだけより棹さして、御道筋は豎川通りの天神橋から御上船で、妙義の社は申すに及ばず、天満大自在天印の瑞籬に額つき、茶番長久滑稽はんじやう、竝に女難除の祈りをあけ、かへりまうしの悦びに、何處ぞでちよつぴりきこしめし。」下太「エ、エ何のこつた、其様なむだ口を叩かねえで、はやく本讀にかゝらねえと、嗅いでやらねえぞ。」茶め「アアア釋らねえちい〜だぞ。料理を出せばとつて、膳立からしなけりやアならず、一寸した文章を書くにも、枕言葉といふがあるワサ。」跂「イイサク〜足下のすかし屁の臭いのは、屋守さんも御存じだわ。」喜次「ア、シツシ、夫れから其處で何様いふ筋になるのだ。」茶め「いよく〜人の出盛つて來る汐さきを見定め。」下太「沙魚か鱸でも釣るやうだノ。」茶め「夫れから沙魚をエ、じれつてえ、はたから口を出すので、釣り込まれてならねえ、だまれ〜。其處で押上の通りを中頭まで戻り立ち止つて、自己が田圃の方の空を詠め、不思議さうな顔をして、

イヤアアレ〜何だか降つて來る。オヤ〜田樂を見たやうなものだ。ソレ〜といふと、喜次さんと同じく空を見ながら、ホンニ何だか降つて來た、ヤア〜彌次郎兵衛ぢやアねえか。アレ〜彼處へも落ちた、ソレ〜むかうへも降るわト、頻りに二人が不思議がつて騒ぎたてるといふので、往來のものも何が降るのかと思ひ、立ちどまつて空を見るは必定ス。」跂「夫れにお前の顔は鼻の穴まで空をうかゞつて居るから、猶々人が正眞にするワ。」喜次「おつりきだ〜、シテ夫れからの獻立は。」茶め「盧呂松先生ト跂大將は、自己達のゐるところから、一町そこら隔れてゐて、同じく空を詠め、アレ何か降つて來るワをきめて、往來の人をたぶらかすサ。夫れからまた二町ばかりへだてて、下太の君と飛將軍が、その傳をやらかすといふもんだから、土手中の人が皆仰むいて空を見るやうになるわサ。」喜次「フム、なか〜たくらんだナ。」飛「奇てれつだ〜。」茶め「其處で野良大人は一人、かねてより川向うの土手の上にはまつて居て、其方へかけ歩行き、こつちへ驅け歩き、何か拾ふ身ぶりをしながら、

今夕吾妻の森において、七偏連中打ちより、一世一代の大茶番興行
仕候間、御勝手次第御入來御見物可被下候以上

妙竹林の

七 人 男

正月五日

大江戸御町中さま

ト書いた散しを三ツに折つて串へはさみ、妙義さまから出るお札といふ鹽梅に拵へて持つて居て、田のふち枯草の中へ、落して歩行かうといふのだ。」喜次「なる程拾ふふりをしてだノ。」茶め「さうス。其處で自己たちがアレ、彼處らへも降つたかして、彼の男が拾つてゐるから、何様なものだから往つて見ようと驅け出して行き、ホンニ大層落ちてゐる、オヤノ、なんだ初卯のお札の様なものだ、ソレ其處にもあるワ、アレ彼方にも落ちてゐると云ひながら、此方人等も拾ふふりで、袂や懷中に隠して持つてゐて、やたら無上に蒔いて歩行かうといふのだ。」喜次「フムウ美味々々。」飛「此方でも骨湯の湯骨か。美味々々。」喜次「チヨツ道理でしづかにして居ると思つたら、寄つてたかつて骨をしやぶつてゐるやアがる。そして銚子の中から屠蘇の袋を引出して、何様する積りのだイ。」跂「それだつて酒も此の通りなら。」ト徳利をさかさまにして尻をボンノと叩き、「屠蘇のお銚子もれこしきだわ。」ト振りちらかし、「其處でハア鼠がながいから、屠蘇の袋へしみこんだ味淋を、チユツバク吸ひまはしに

せるつもりのだ。」喜次「チヨツ誠にしようのねえ猿どもだぞ。モウ、茶番の筋道が付くまでは、飲ませも食はせもしねえから左様思ひねえ。」下太「へん左様思はなくつても、鍋や皿は喰ねえから、左様思ふのも同然だア。」喜次「ア、レ臺所の戸棚をぐわたくやつて居やアがる、エ、エ何奴だイ。」權助の聲、虚ろ餅ノオ焼いておつ喰らうベイとさがしごとをせるだに、何を呼ぶのだア、さうぐし色にて、「茶め」打捨つて置きねえ、どうせ仕方ねえ奴等だから。」喜次「いいい、勝手にしやアがれ。」ア、ア其處で、此方人らも拾ふ積りで蒔いてあるのか。」茶め「左様ス。夫れを見ると往來の人達が、われもくと皆拾ひに来るわス。すると其地此地に落ちてゐるといふもんだから、是れは不思議、ハテ何であらうト取り上げて、串を抜き開いて見る、ト例の散しだらう。」喜次「フム、ナル。左様來る日にやア、拾ひてで土手を埋めるから、本所はさて置きこつち兩國までも、時の間に廣まるだらう。」野「夫れにもう左様なるト、火消も手を引いて、見物してゐるからノ。」跂「しかし川を飛んで來られた日にやア、茶番どころの咄ではあるめえ。」喜次「エ、イ邂逅口をた、くろくな事アごた付きやアがらねえ。」跂「へんごた付くの付かねえのト、大層なことを云つたつて、足の甲でコレ斯様して歩行く事は、誰にも出來めえ。ソラ、は、よい。ト、どつこい。」茶め「ナンノ夫れしきな事アお茶の子だ。自己なンざア、ソレ右の足も、アレ左の足もみんな首へひつかけて、仕舞つて尻

でばかりるざるのだ。ソレ／＼、は、どつこいソレ／＼。」野ら「そんなら彼様して逆さかに成つて、手で歩あ行くことは出来めえ。」ト云ひながら、疊へ兩手を突き、足をひよいト上の方へあ蹴ね上げると、御含おんみすぎて仰向あふにぼつたり向うへひつくりかへり、火鉢ひばちの角へ踵かかとを打付け、「ア、ツタ、、、ア、痛いたえ痛いたえ。」喜次「此のべらほうめ、何をしやアがるのだ。」野ら「蟹かにもしねえがア、いてえ。鮎あひ鯛だひ、烏賊いかくつて鯛鯛へられねえ鱈たら、鰯いさなとおもつて、ひき鱈魚せうぎょで吳くんねえ。」喜次「チョツ此こ様なとんちきに構かまはねえで、サア／＼茶ちやめ公こう、其の後はどうだ／＼。」茶ちやめ「扱さも此方人こちとらは散ちしを蒔まいて、ぞんぶんに往わ來らの人をたぶらかし、ヨシと思ふ時分場所じぶんばしよを切り抜け、兼かねて船公せんこうに妙見下めうけんしたへ船をまはさせて置き、其の船へ乗つて直すに吾妻あづまの森へ乗りきり、神主かみぬしてきに談だんじこんで、お湯花ゆはなにつかふ大釜おほがまを借りこみ。」喜次「茶番ちやはんに遣つかふと云つちやア、お湯花ゆはなの道具たぐいは貸かすめえぜ。」茶ちやめ「まアサ聞きねえ、そのお湯花ゆはなの大釜おほがまを程ほどよき所へ居すゑて、吹ふきこほれるほど湯たぎを沸たぎらし、五六むい匆のちやの茶ちやを二三斤さんしんもさらけこみ、まづ煮花にばなをこしらへるのだ。」虚ろ「ハテネ。」飛「へ、エ。」喜次「シイツシ。」茶ちやめ「其處そこで自己おいらたちの形なりのこしらへは、釣士つりしが海うみの中で履はく脚榻きゃくたつといふ物より、もう一際丈ひときはせいの高い足駄あしだを履はきこみ、その上から大夜おほよ著ぎを著きて、身の丈八九尺たけぐらるに見みえる様やうにし、子供こどもが持遊もちあそびにする張は抜きの大天窓おほあたまを被かつて待ちか

心得こころえたりと大釜おほがまの茶ちやを茶椀ちやわんへ汲くみ、一人々々ひとりひとりに持もつていで、則すなはち吾妻あづまの森のの大茶番おほちやはんで御座ございますトいふ落ちだが、何様どうだ／＼。」飛「ウ、ツ。」茶ちやめ「何故人なにがの面おもてを覗のぞくんだい。」該こゝ始終しじうは其様そのような事ことだらうト思おもつた。」虚ろ「夫それだから數かずの字じのついたのなら云いひなさんなトいふのだ。」茶ちやめ「高足駄たかあしだの上うへへ大夜おほよ著ぎを著き込んで、丈たけを一丈いちじやうにもこしらへ、茶ちやの番人ばんにんをしてゐるから、大茶番おほちやはんだと云いふのが道理かみに協あはねえのか。」野ら「すつかり落ちてゐるヨ。始はじめまりから見れば、ぐつと趣向しゆかうが悪わるいから。」喜次「大序だいじよから三立目みたてめあたりまではなか／＼劫おびやかしたが、肝心かんじんの大詰おほづめが吾妻あづまの森のの大茶番おほちやはんでは、ヤンヤと云いはねえやうだ。」茶ちやめ「喜次きじさんまでが其様そのようなわからねえ事を云いふわス。」下太げた「ハ、ア涙なみだぐんで否いやに怨うらみつほくにらめやアがるぜ。」茶ちやめ「アツア吳子胥ごしよしんで吳國ごこくほろび、范蠡はんらいさつて越國えつこく衰おとろふ、是れ程ほどのことを監かんがへても用もちゐられねえ日にやア下和げわが玉たまだ。孔子こうしの聖せいなるも時にあはずス。」喜次「イヤサ足下そごの趣向しゆかうだつて、捨すてたのぢやアねえが、ト云つてひろはうといふにやア、ちつくりト色氣いろけが無くツちやアいかねえ。」茶ちやめ「へん出来できもしねえ奴やつに限かぎつて、色氣いろけ々と色氣いろけがりやアがるわ。」下太げた「そこで數年來すねんらいのはうの方はついたが、是れからまた、只ただの年來ねんらいの本讀ほんよみが始はまるのか。」野ら「ヤレモノ、情なさけない御事ごじだが、愈いは夫それをきく料簡りょうかんか。」飛「然さればサナウ、數年來すねんらいで手てごりをしたから。」虚ろ「夫それは今餅飯もちいひが焼やけるからノ。」喜次「オヤ、フン何か焦こける様な勻にひがするぜ。ア、フン／＼。」虚ろ「酒さけあれども肴さかな

下太「何のか、りあはねえといふが有るものか、自己の大和屋に似て居るといふのは、喜次さんも知つてゐるから、此の役をこしらへたのだ。」喜次「ヨシサ、氣を慥かに以て居さつシ。エ、エ其處で武者修行どのは、法恩寺をまつすぐに龜井戸の方へ来る、また自己は例の歌修行で、龜井戸から法恩寺の方へ行き、天神橋の上でばつたり行き合ふといふ手筈にして、行き違ひながら自己が武者修行どのをじろく見て、

劍術のこむ手薙ぐ手はならひても十文字さへ書けぬかなし

といふ古人の狂歌を口ずさむと、武者修行の男が聞きとがめて、ツカ／＼と立ち戻り、今吟じたる狂歌は、全く拙者をあざける一言、そのまゝには通さうかと、紙布の袂をしつかり取り。」飛「イヤしつかり取るのはよすがいい。若し結びでも切らすと、損料許りでは濟まねえから。」下太「シイツシ。」飛「だまれ／＼。」喜次「されども此方はぐつと落付き、コレハ近ごろ迷惑千萬、いかで貴殿の事を申さん、古人の狂歌の浮びしまゝに、思はず知らず詠ぜしのみ、そこ放して通し給へといふと、卑怯なり臆したり、人に雑言いひかけて、逃ぐるると逃さうやト、云ひつゝあとへ引きかへす、その手をとつて突き放せば、二足三足たじ／＼と、よろける足を踏みしめて、ヤア小ざかしい賣僧の腕だて観念しり云ひながら、背中の杖取掛き取つて、真向敷と打つてかゝるを、襟にさしたる如意を持ち、右

手にカツシと請けとめる、といふ此處からが武藏と笠原の鑓蓋のたてでいかうといふのだ。」野ら「フムウなか／＼をかしろさうだわえ。」喜次「其處で二人が宜い加減にたつき、左右へばつと身を開く所へ例の女形が、マア／＼待つてお二人さんと、聲かけながら駒下駄で、ト、ト、トんと足踏しながら中へわりこみ、そのトント踏み止めた足踏を相圖に、かねて橋下へ著けておく船のなかで、ヨオ引イ、ヤ、チャン／＼と三味するを切掛に、三人は、お前女でおいせさん、ト三國拳になり、めつちや踊と變じて、船のなかへ所作りこむト、直に三味線は佃と替り、吹けよ川風あけるよ簾、チャンチャ、チャン／＼スチャラカ、チャン／＼で、豎川通へ漕ぎもどさうといふ趣向だが、どうだ／＼。」下太「いつもの不手際にしては出かした／＼。」野ら「出かした／＼では可笑しろくねえ、喜次さんは天窓が大きいから、でこした／＼と云ひてえ。」飛「妙義參詣の人は繭玉をかつぐ、自己たちは參詣の人をかつがうといふのか。面白い／＼。」野ら「役割を極めずばなるめえが、武者修行といふのはさしづめ跂助さまと来るだらう。」野ら「どうして／＼左様はいかねえ。」虚ろ「そりやア野ら公の云ふ通り、自己といふ好男子があるから、他の者はともお聞だ。」茶め「へん何奴も此奴もおいらの趣向へは肩を入れねえで、主人に許りおべつかやアがらア、頼もしくもねえ。」虚ろ「おつう否んだことを云ふけれど、其處のは勞疾筋、成田屋筋なんのといふので筋立がよろしくねえから、僉がもちるねえのだわ。」

茶め「いいといふことヨ。ナンノ僉は何様な事でもしなせえ、自己は御免だ。」飛「コレサ其様な事を云つちやア納まりが付かねえわス。」茶め「納まりが付いてもつかねえでも、自己ア否だといふことサ。」喜次「夫れぢやア斯うしよう、お前の仕組んだ狂言を取らねえかはり、武者修行と云ふまうけ役をやるがいい、あれなら随分請けるぜ。」茶め「左様するとまた僉が種々なことをいふから、矢張よしにせやせう。」喜次「何の誰がなんといふものか、ナウ虚ろ公。」虚ろ「そりやア下太しうだつて跋公だつて、不承知はあるめえス。」野「全體武者修行の役は、茶め公一本槍だものヲ、誰がなんといふものか。」喜次「三階一同の見立てだから、其の意に随ふがいぢやアねえか。」茶め「其様な事を云つたつて、いざといふと面のさんそうが出たり何かして。」喜次「自己が請合ふよう。」茶め「いよ／＼か。」喜次「よいよだヨウ。」茶め「先づ斯う念を推して置いて、へエンウフン東西々々、叔此の度妙義まうで茶番武者修行宮本武藏相勤めする役人、色師の茶め吉、尤も當人役不足にはござりますれど、連中一同の頼みに付きもだしがたく。」飛「エ、エ横ちやく者めが、此の役を取らうと思つて、わざとすねやアがつたのだナ。」茶め「へん智慧のねえ奴等をだますのは、女に惚れられるよりさうさもねえわ。サアサア喜次さん、稽古に取りか、らう。」喜次「ハ、アおつう遣りくつて皆を出し抜いたナ。時に女形といふのだが、こいつア評ひのねえ様に圖にしよう、何でも長いのを取つたのが、お山をやるのだけ。」

ト喜次郎が圖をこしらへ差し出せば、てんでに下洒落を云ひながら是れを引くに、虚呂松長いのに當りければ、跋助、野良七、飛八、下太郎の五人のものは不承々に、唄人、三味線、また後見と役割をきめ、喜次「サア／＼すつぱり揃つた。そろ／＼稽古に取りか、らう。」茶め「オット承知之助。」ト立ちながら飛八が焼いてゐる切餅を、ちよいと一ツ撮んで頬ばり、「ア、うめえ／＼。そりやア宜いが喜次さん、何か持たすばいけめえ。オット妙、サア此のしんばり棒だ。お前は何をもつ。」喜次「自己は孫の手だ。」下太「マア待たツし。此處らを些とかたづけよう。」虚ろ「ア、能く喰ひちらかしたなア、丸で安達が原だぜ。」野「貴様も餅にばかりか、つて居ねえで、此處らの物を運ばつし。」ト、皿どんぶりを勝手の方へ押しかけたけ、跋「サア／＼舞臺が出来た。」茶め「ありがてえ／＼。」喜次「自己が狂歌をよむ、お前が聞きとがめて、逃ぐるとして逃さうかと、自己の袂をしつかり取る、エ、サ、無言つて取つちやアいかねえといふに、何だアな可怪しな目附をして。」茶め「ゲエツゲエ、ア、おめへが餘り急ぎ込むんだから、餅を鵜飲にしてしまつた、ア、くるしい。ソラよしか、逃ぐるとして逃さうかと袂を掴む。」喜次「其の手を採つて突き戻す。」茶め「たじ／＼／＼と三足さがつて、イヤどつこいと踏み止める。」喜次「ヨ引シ、そこで背中の木太刀を取つて打ち込む。」茶め「ヤ、カウカ。」喜次「ア、いた、／＼、エ、此の東埔塞ア、何故人の天窗を打つんだい。」茶め「ハ、アお蔭で額のお出子が凹んだ。」

らう。」喜次「夫りやア宜いが、孫の手をどこかへなくした。」下太「おめへ腰にさして居るぢやアねえか。」喜次「違へねえ。ソラ打ち込む、かう請ける。くるりと廻つて。」茶め「ドッコイ、ト、、ヤウン。」喜次「コレサ其様にギツクリにらんぢやア狂言になつていかねえ、何でも正真と見せなけりやア可笑しくねえのだ。」茶め「夫れでも成駒屋が、このところでウ、ンと一ばん幅をきかせたから。」野ら「チヨツ何ぞといふと成駒だの音羽屋だのと、わりい料簡の奴ぢやアねえか。」茶め「なぜわりいだ、男といひ仕打といひ。」喜次「いいサ、ソラ斯ういく、カウ、、はア。」茶め「この所でトオンとぎばを突いて、一番身の軽い所を見せて遣りてえ。」喜次「其様なら前のところを斯うやつてソラ、ソコ、ソコ、はア、イヤドッコイ、はア、そらそこでぎばだ。」茶め「オット承知。」ト、兩足前へ投げ出し、尻へにドツサリ居りながら、片手を疊へ突く機に、火鉢にかけた網のふちをはね飛ばせば、焼きかけたる切餅はばりト四方へ飛び散つて、茶め吉が襟の中へほつたり這入れば、茶め「アアツ、ア、ツ、、ト、あわて跣ね起き、「ア、餅のなかへ襟がア、ツ、、。」喜次「コレサなにをふざけるのだ。」茶め「エ、ふざける所か、ア、ツ、、。」と首を前へ突き出すと、焼餅はする／＼ト下の方へ落ちる故、「ア、ツア、ツ、。」下太「ナニ餅の中へ襟が入つた、ドレ／＼。」茶め「ア、ツ、、背中だ／＼。」下太「是れか／＼。」と、著物の上から押へ付けければ、茶め「ア、ツ、ア、ア上から押され

てたまるものか。」下太「オット承知、隠家さへ當りが付けば、著物の上から餅飯を取捕まへ、かういふあんべえに引張ると、餅と體の皮の間が透くから、カチ／＼山の難はのがれる。」ト、云ひながら餅と間違へて、ふんどしの結び玉を股引ぐるみグツト引くと、餅は帯の間をくゞつて尻の所へまたするずる。茶め「ア、ツ、、コリヤ何様する、尻が餅へはひつたわ。ア、ツ、ア、。」ト飛び上る拍子に、疊に落ちてゐる餅をぐつしやり踏み付けて、「ア、ツ、ア、ツ、、。」ト足を上げてふるつても、踵へびつたりくつ付いて放れぬ故、ちん／＼もぐらではねて居る足元へ、後方の方から飛八が、焼いた餅をちよいと一ツ投げ出し、知らぬ顔をしてゐるト、茶め吉はまた踏み付け、「ア、ツ、ア、。」ト、後へどつさり尻を突くと、股引の間へ落ち込んだ餅を尻にて平潰し、「ア、ツ、、アツこりやア此奴等ア、ア、ツ、ア、。」跣「アハ、アきてれつ奇の字だ。茶め公立引があるなら、其處で一番尻を放つてくれ、さうするト、餅ぞめ屁責は厭はねどといふ洒落が出るから。」茶め「コ、此奴らア夫れどころか。」喜次「ヤレ／＼哀れに踏み付けたなア。」下太「お蔭で、靴の割目がうまつたらう。」野ら「足袋を脱がなけりやア、此の難はなかつたに、足袋とは／＼のほ、よほ／＼／＼焼餅また踏むわいな。」茶め「チヨツ此様に尻へひつついて仕舞つた。ア、いた、。毛がみり／＼いふわ。」ト、一人もち／＼尻へ付いた餅をへがしながら、股引のまへのところから振り出せば、飛「ソリヤこそ御安産だわ。」喜次「ヤレ

ヤレお目出たいく〜。」と、連中一同の大笑ひとなり、夫れより稽古もあらましますみて、なほ當日の評定に、各餘念はなかりけり。

二編 卷之中

斯くていよく初卯の日と成りければ、龜戸の里なる妙義の社へ參詣せんと、彼の七人の連中は兼て工みし茶番の趣向に、衣裳小道具とり調へ、喜次郎は歌修行の僧、茶め吉は武者修行の武士、虚呂松は年増女のこしらへ、また跣助、野良七、飛八、下太郎の四人は唄人、彈人、後見と役割をきめ河岸の柳屋よりして小機轉の利きたる若者を雇ひ、船押し出し兩國川を横ぎりて、豎川通を漕ぎのほるに、例の龜子れんぢう用意の酒を飲み始め、酔ひのまはるに隨つて、また一倍の勢ひつき、茶め「此のすつきりとして凜々しい拵へを、船の積みこみにして置くのは、土中の玉で惜しいもんだ。早く婦人どもに見せて、眼の保養がさせて遣りてえから、自己アあんがして岡を行くぜ。」虚ろ「ホンニ私も歩行く方がいいのだヨ。全體船は血の道にさはつて、寸白に悪いのだから嫌ひサ。モシ船頭はん、誠にお氣の毒なのでありますけれど、其處らの棧橋へちよつと著けておくんはないな、アノ後生になるンで有りませすから。」飛「ウ、ツどうだエ、去年の夏大山へ往つた時、斯くのごとき飢盛に出ツかはした

事があつたつけ。此のまア氣障味へ直段づけしたらば、何程ぐらゐの相場だらう。」飛「釋迦牟尼佛にふませれば、無量劫といふ入札で程もかぎりもわからねえのだ。」虚ろ「ナンノお前はん方は譯も知らないで、安ッほくお言ひなはるけれど、人は美面より牀上手、そりやアもう可愛がつて〜、手前になら命を撮みとられても惜しくはねえ、ホンニ殿御の命とりだと言つてお呉んなはるお人があるんで有りますヨ引。」茶め「だまれ〜コリヤ船頭、かやうな鼻持のならぬ女郎が居つては、神免二刀流の武藝のけがれぢや。身共はこゝより上船いたす、かしこの岸に船よせさふらへ。ナニ同船の方々、御縁つきずば重ねて逢はう。アツア蒼海原のしん〜たるよい天氣は、とう〜たる初春の詠めぢやヨなア。」下太「兩人ともチト取り逆上せてゐる様子だが、是れでもいざ鎌倉といふ時、じたばたと跣ねまはる役に立たうか。」飛「役に立たうが居らうが、そこに構はず蓋に構はず、餘り岡へ上りたがるから、其處らの河岸から追ひ放して見ようぢやアねえか。」喜次「だが虚呂公、お前は天窗が鬘だから、何程女ぶりを見せたくつても、むき出しぢやア歩行けめえぜ。」虚ろ「私も左様思ふから頭巾を持つて來たんでありますヨ。だがネ、染めが葡萄鼠だといひのだが、革色だから誠に氣に入らないので有りますノサ。」野ら「だけれど鳶色でねえから宜い、鳶色だト面の染めと一ツだから、前だか後だか向き分らずで、後見がまご〜するわ。」虚ろ「アレまア野良さんの口の悪いこと、憎らしいねえ。」飛「ア

アいた、、、、、エ、イ何で人を抓るんだい。」 虚ろ「オヤ何様したら宜からうネエ、野良さんの尻だと思つたら、お前はんのが此様なとこまで出廣がつてゐるのかえ。いかな事でもまア、轆轤首なお尻ぢやア有りませんかねエ。」 喜次「サア、女形の方は、頭巾をかぶつたら岡へ上つて仕舞ひなせえ。ソオレ帯を揺り直したり、ア、世話がやけてならねえぞ。其處でこのお武家様だが。」 茶め「身共か、身どもなら草鞋をはいて居るわ。」 喜次「紫の袷紗へ木太刀をく、つたやつを忘れめえヨ。」 茶め「アイやお氣遣ひめさるな。先刻よりか脊負つて居まうす。」 下太「まア棧橋まで出なせえ、大小は自己が探つてやるから。」 茶め「アツア小穢い小性でござるナア。」 野ら「エ、イ言ひぐさをいはねえで、さつさと上らねえノかい。」 茶め「身共も彼様なむさくろしい奴等の中に居ようより、速かに上陸いたさうと存するが、ひやりがきれて動かれまうさぬ。」 飛「サア大丈夫だから上んなせえ。」 下太「ソラ大小だ。」 茶め「オ、トよし。」 喜次「エ、イそつちへ差しては右だわ。」 茶め「アツア弘法にも筆のあやまりツ。彼様して左ねぢりに貫木さしか。」 野ら「左ねぢりの大小なら、柄や鞘に瓜の種がまじつては居ねえか。」 飛「ヤレ、穢い糞さむらひだぞ。」 茶め「ナニ慮外をまうすと、手は見せぬぞ。」 下太「腰をさぐり、オツト仕舞つたり。コウ飛公その隅に扇があるから探つて下ッし。」 飛「此の扇子か、ナンダこりやア飛公のおしにしてみてもいにくるるな重みがあるぜ、何様したのだ。」 茶め「是れは籠でこしらへたので籠

扇と申し、此方の様に武ばつたる武士は皆所持いたすわ。」 喜次「何だかべらほうと手厚くたくらんで来たなア。」 茶め「我ながらも是れ程凛々しくならうとは思はなんだ。コリヤ船人、船を動かすまい、浪をたてると美姿がうね／＼になつて宜しからぬわ。」 野ら「アノ馬鹿を見なせえ、首をふつたり捻つたりして水鏡だわ。」 下太「ア、それを取ると坊主になるぞ。」 茶め「だまれ／＼。アツア平常がいきごとにて作つてゐるので、兎角にはけが横つちよへ曲つてならぬ。」 喜次「オイ船頭さん、後見どもを追ひ上げたら、早く船を出してくんな、何時までもかたが付かねえから。」 虚ろ「アレサ待つておくんなはいよオ、エ、モじれつてえ。夫れぢやテ後刻にきつとざいますヨウ。」 喜次「喜次郎は船の中から首を出し、喜次「夫れぢやア後見しつかり恃んだぜ。」 下太「オツト承知。」 野ら「後にしつかり請けようぜ。」 下太「何れ一旦落ち合つた上。」 喜次「例の茶屋だぜ。」 茶め「よし／＼。」 下太「いふうち、船はだん／＼に間遠くぞなりにけり。茶め吉は武者修行、虚呂松は女のすがたの異なる形も酒ゆゑか、事とも思はぬ盲目蛇、茶め「ナウお虚呂さん、足下は女形、こつちは武道立役といふのだから、しばしもおツつるんで歩行といふ譯には往くめえ。」 虚ろ「ホンニねえ、そしてお前さんのやうな野夫オなお武家方と一所に歩行くと、圍者かなんそのやうに思はれて、外聞が悪いので有りますから、私やア此の通を往きまふワ。」 茶め「身共は是れより本海道を、サ、家來ども參りをらウ。」 下太「ごたいそな事を吠えやアがるぜ。」

そして見なせえアノ威張つて歩くことワ。」下太「こつちの東埔塞もあのさまワイ。」下太「そりやア宜いが、足下はどつちの東埔塞へ著く積りのだ。」跂「ちよつと思へば武者だけれど、頭巾をかぶつて居るから、まだしも虚ろ松の方だらうか。」下太「何にしても二人が貧乏ツくじだ。アレく見なせえ虚ろ松の野郎めえ、あんなに高く棲をとつて、赤い蹴出なんぞをびらくびらつかせて、ア、御免々々、おいらア身の毛がよだつ程否になつて来た。」跂「夫れだつて仕方がねえわサ。ヤなんだ茶め吉のすこたん、アレあれだ、犬を蹴飛ばして追つかけられやアがつた。エ、イあの形わい、實にこてへられねえ奴等だゾ。」下太「どうも外にあきらめの付け様がねえから、拳を打つてかけた方が女、勝つた方が武者に付くとしようぢやアねえか。」跂「負けた方がいいのか勝つた方が宜いのか。」下太「ナニサ宜い悪いに構はず左様きめねえと、果てしが釋らねえからサ。」跂「少々馬鹿ぐるが仕方がねえ。本拳か狐か。」下太「チト流行には後れたりだが、藤八で参るべイ。」跂「藤八なら螳螂が斧だ。さア来い。」下太「イヤ、ヨイくく、ハア是れはあひこ、ドンと出しな。」跂「ハツト最初お下けなさい。」下太「ひよこりと藤八つゝいてちよいと。アツ、こりやアおへねえ。」跂「何だく。」下太「糞を踏んだイ。」跂「ア臭えく。おらア糞船が来たのかと思つた。ドレく人糞か犬糞か。オヤく正薄色だから先づは人糞の方だ。」下太「ナンノ人糞なら側に紙がおちてゐるわス。」跂「右へも左へも捨れてゐるねえが、人

にしる犬にしる餘程出来のいきく座だと見えるナア。」下太「そりやア宜いが此の足を何様しよう。」跂「章魚ならば、一本ぐらゐる切つて捨ててもいいけれどなア。」下太「ア、段々に臭くなる、エ、エ、ゲツゲエイ。」跂「イヤおれも胸が悪く成つて来た。早くそこの上場で洗ひなせえな。」下太「女難は勿論盗難劔難、もろくの災難をのがさしめ給へと祈つて置くのだが、糞難ばかりは氣が付かなんだので此様なめに逢つただ。」ト川の端の段を立ち下り、下太「跂公足下もあらはつせえな、たゞ見てゐることはあるめえス。」跂「自己ア糞を踏みもしねえに。」下太「踏まねえとつて、そこが突合といふものだわス。」跂「馬鹿アいひねえナ。」下太「突合のわりいことをするト彼様だぞ。」跂「エ、イよさねえかい。羽織へ染みでもつけて見ろ、身上だア。」ト二人は暫時川の端に押問答をしてゐるうち、虚呂松は割下水通、茶め吉は法恩寺橋通の方に至るに、人の目に付く出立ち故、往來の男女何者ならんと袖ひきあうて是れを見るに、茶め吉は例のうぬほれに十分請けたりと心嬉しく、いそぐしながら澄ましかへつて歩行き行く。後の方から來蒐りたる武士、天窓はひつつめの大奴、朱鞘の長大小を貫木差に横たへ、大綱の馬乗袴をはき、ゆき短き紋付の著物を著したるが、召し連れたる下部に何かひそく私語くと、下部はすこし足をはやめ、茶め吉に追付いて腰折りかぐめ、僕「モシなア、些とものお聞き申したうござりやす。龜井戸の天神さめへ参るには、此の道さア行きや

して宜うござりやせうか。」ト聞かれて、茶め吉はうち合點き、往來のものにも聞えよがしに、一調子はり上げ、すこし綺語めかして、茶め「在下もいまだ當地は不案内なれど、軍法劍者の妖術をもつて飛行自在に往來する。モシ龜井戸へ往きたくば後にしたがひ來られヨ。」劍「そんだらハア貴君さまも、お江戸のお方では御座らねえのかネ。」茶め「いかにも左様、もと在下は因州鳥取の浪人平井權は、デでは御座らぬ、肥後國熊毛の産ぶつ六三本宮四と申すもの。」僕「夫れでは兵法サア御修行にお出なされたのでござりやすか。」ト問はれて茶め吉、この男の様子を見るに、何も知りさうもなき山出しゆる、能きものを生捕つたりと心によろこび、「ヘンその許の愚案の通り、在下母の胎内にある稚きころより劍法をこのみ、始めて桃園に義をむすんで、はやく黄巾の賊を平らけんと、彦山權現に祈願をこめ、一日千人の力をさづかり、故郷毛谷村にかへらんと、下邳圮橋を通りしに、はからずも黄石公に出であひ、皆づる姫が手引を以て、六韜三畧虎の巻の兵書を探り、引つかへして鞍馬山に馳せ上り、また僧正が谷へ往きたるが、こゝに面白い話があるて。」僕「へ、エ御大層な事でございまするなア。」茶め「マア聞きなせえ。その僧正が谷の前後左右に、雲霞のごとく凡そ六人ほどの天狗ばらが、列をただしてずらりと居竝ぶと言ふので、もつともそれが中の頭だちたる大天狗が在下を見ると、すいと立つて何方へか往かんとする故、在下早くそばへより、ヤア逃ぐるとして逃さうかと、紙布の袂をしつか

り取ると、その手を拂いて突きもどしたが、流石は天狗の糞力に、天晴無雙の在下も、一足二足たじたじとよろめきたりしが、駈と踏みしめ、ヤアちよこさいな賣僧の腕立、觀念しろと言ひながら、背中にしよひたる木刀の、しん張棒を抜き取つて、打つて蒐ると彼方にも、如意の孫の右手手に持ち、かつしくと請け止めるト、こゝからが笠原と宮本の鍋蓋のたてに成つて、打ち込む請けるト、ト、ンと身をしさり、しんばり棒を肩にとり、暗がり峠の土となれといふ見えてウンとりきんだが、此のウンは在下がちと能くなかつたさうだけれど、夫れに構はずまた打ち込むところを、はつと請け止めて下を拂ふ上を拂ふ、たじくくとよろめきながら、天狗どもに身の軽いところを見せて遣らうと思つて、トオンときばを突くと、その業があまりにすばらしいので、我が身ながら少し慢身の心が生ずるかと思ふと、忽ち襟の中に焼餅といふものが飛び込むと、脊中はさながら火を脊負ひたるごとく、一身燃ゆるにひとしき故、かねて聞く天狗道には、一日に五たび大焦熱の苦しみを請けるト、されば在下も既に魔道へ落ちたるかと、心づくより脊中をくぐる焼餅を、股引のまたの穴より振り出し、すぐ水の印を結んで湯風呂の羽目を打ちくだき、白倉一家の奴等を殺し、暫時浮世を忍ばんと、身を山伏の姿にかへ、安宅の關をうち越えて、栗生、篠塚、畑、互利の四天王もろともに、大江山なる千ぢやうが嶽へ押しよせ、酒呑童子をとりひしぎ、富士淺間の神を拜し、彼の人穴を立ち出でて狩

場の暗の闇紛れ、敵祐經が陣所をたづね、はからずも九紋龍史進に出合ひ、姉宮城野は白柄の長刀、在下は鏈鎌の奥義をきはめ、名を辨慶とあらためて、五條の橋に寐てるる所を、勝すか保六に足をふまれ、はつと思ひて目をさますと、後方に立つたる八百屋のお七、不義はお家の法度と思へど、軍師孔明がす、めにまかせ、鷲坂番内等を打ちこらし、彼が古郷なる山崎村の與市兵衛が方へ至るに、折しも後醍醐天皇は笠置の山へ籠らせられ、楠正成にも參れよとの詔、とるものもとりあへず遊君阿古屋をひきいだし、色にはなまじ連は邪魔、ひとり先がけ高名せんと、鐵さい棒を脇ばさみ、御所の總門押し破り、梁山泊の麓なる二の口村にぞ著きにける。僕なる程ハア仰山なお稽古でござりますなア。」茶め「いやもう難修行に衆生濟度して學んだだけあつて、牛馬唐犬はもとより、歌舞妓十八番の武藝はことごとく秘肉を極め、かつ陰陽和合の法に通じ、春三夏六の道理をあきらめずといふなし。在下當地に罷り下りて、先づ一刀流、眞影流、柳剛流、むねん流、眞ぎやう刀流、明知流、柳生流、まつた鞍馬流、音羽屋流、大和屋流、成駒屋流、高島屋流、乃至竹本鶴賀流、常磐津富本清本流、都々一とつちり端唄流、跡ひき流にくだ巻流、甘いもの流、立喰流、ちよほくれちよんがれちやらまか流、とこまかしてよい所流など、かく諸流の先生達と手合はせ試合をいたしたれど、神免二形流の業法をふるひ、立ち合ふ時はむべ山風の嵐をもつて、奈良の郡の八重櫻を吹きなびかすが如く

にて、更に齒に立つものをおほえず。あはれ骨のある劍術者もあらばと、腕をさすりて今日もまださきより立ち出でたれど、稽古場らしきものさへ見かけず。餘りの本意なさに初卯の日と聞き、せめては妙義の社へなと參詣せんとの所までまゐつたり。その許にも道場らしきもの見あらば、知らしたまへ。」と言ひながら、北吹く風のさむきをこらへ、腰なる鐵扇抜き取つて、ばさりくと打ち扇ぐ、その形そぶりをじろく見ながら、僕夫れだらハア申しませうが、拙者主人が殊のほか劍道執心だて道サア聞くふりをして、御様子ナウお尋ね申して參れと申しつけられましたでナア。」茶め「エ、エ何の事た、其様ならお前の旦那が劍術が好きで、自己の様子を聞いて來いと言つたのか。ナンノをかしろくもねえ悪い洒落だ。そしてお前も些た遣ふんだらう。」ト、少しうそ氣味わるく成るゆゑ、「オヤさつぱり忘れた、喜次さんが待つてゐるんだらう。早く往かう、馬鹿なつらな。」と、足をはやめて逃支度する後から、「イヤモシちよつと御意得たい。御修行人々々々々。」と呼び留められて、恠としながら聞かぬふりにて往かんとするを、僕はしつかり袂を掴まへ、「お待ちなしえやし、拙者主人がお目に懸りたいとお呼ばりまうすでナア。」茶め「馬鹿なことを言ひなせえ、其様に安ッほくお目にか、られてたまるものか。袂を放しなせえと言つたら放しねえヨウ。」僕「御所望の通り、主人が試合サア願へてえと申しやせうから、お待ちなさろト言うたりやお待ちなさろ。」茶め「こりやア情ねえ、モウ

二編 卷之下

再説茶め吉は七八人の武士に、前後左右をうち圍まれ、息さへ支へて出来ぬ心地に、是非も菜の葉へ振鹽の、しをくとして龜戸の方へ一二町行くト、ある冠木門のうちへ無理むたいに引き込まれ、茶め「へいくへいく、私儀は些とおさきをお急ぎでございますから。」團吾「イエく左様な御斟酌なく、まづくあれへ。」茶め「何サお急ぎなさるのは私。」幸九「サアく是れへお上り下され。」茶め「へいく。」權蔵「去來お通りなされ。」茶め「へいく。」談次「おあがりなされぬか。」茶め「へいへいア、是れは情ない。跣助や下太公は何様したらうなア。」團吾「ナニ跣助で下太公とは、身共へのお當てこすりで御座るか、縦ひ跣助で下太公に致せ、師匠此四郎より免許皆傳の拙者。」茶め「イエエ跣助下太公と申したは私の友達の事。」幸九「何は冤もあれ、あれへお上りめされ。」茶め「へいへいア、く左様な御免。」僕「ヤアナンゼ草鞋サアお脱ぎなさんねえで、玄關へおふみ込みなされる。」茶め「へ、エへいく御免下さい。へいくへいく。」と周章てふためき、草鞋をぬぎそこへ置き、恐怖びつくり又式臺へ上りかけると、僕「コレく、お刀サア差したる儘にてお上りなされては失禮で御座らう。」茶め「へ、へいく、へいく、ア、ア何様も誠になれませぬこと故、何事もとり違へましてへいく。」と兩刀をとつて、草鞋と一所に土間へ置き、茶め「此の上御失禮がござつたらりもそつと小さな聲でお願い致します。其様にいかめしくお呵り被成ト、肝へこたへて成りません、へいく。」と震へく式臺へ上りながら、劍術者の家にては這入口の兩方に待伏して、不意に組み付くなどいふ事を兼て聞きかじりある故、若しや左様いふ事でもありはせぬかと、きよとくしながら敷居へ足を踏みかけ、玄關へ上らんとするト、脊中に脊負ひたる袱紗包へ括りし木太刀の先が鴨居へ突懸り、後の方へよろけ、ハット思ふその拍子に、式臺の中段を足踏みはづしてどたくどつたり、眞仰向に轉がり落ち、扱は上から手を出して抛られたるかト肝を潰し、「ア、いた、く、く、エ、悪いお冗談を。ア、いた、く、く、ナンノ此様なことと知つたら、此の役は虚呂松にでもさせたものヲ。ア、いた、く、く、脾腹の筋がアツた、く、く。」と小言たらく起きに蒐れど、脊中に縛せし木刀が支へて五體は自由にならず、轉りくして居るを、クツリく笑ひながら團吾は手を探り引き起せば、茶め吉顔をしかめながら立ち上り、「是れは先生、ア、いた、く、く、痛いお世話に相なります。」トいふ時、鄰の下屋敷でズドンと放す大筒に、エ、と恟り茶め吉は亦尻餅をべつたり突き、「ア、いた、く、く、た。」○案下再説下太郎跣助の兩人は、虚呂松と茶め吉を見うしなひ其の行方を知らざれば、下太郎は虚呂松を尋ね、跣助は茶め吉が後をしたうて、所々方々捜しても見付からねば、猶あちこちと尋ね歩

行きて法恩寺橋通へ出で来り、龜戸の方より来る人に、武者修行體の者を見かけざるやと問ふに、その武者修行の人は、今劍術の稽古道具をかつぎたる人が七八人にて、彼處の冠木門のうちへ連れ込みたりと聞き、「イヤアそいつア臭い噺だ。」と教はりし門へ往き、そつと中を覗いて見ると、果して玄關のかたはらの土間に、茶め吉が差したる朱鞘の大小が、草鞋と一所にかためてある故、さてこそ心に點頭き、人の居ぬのを幸ひにこはく門のうちへ這入り、玄關へ行きて見るに、茶め吉は衝立の陰に茶煙草盆などひかへ、けんな顔してかまこまり居るゆゑ、跣助は式臺へ手を突き首のべいだし小さな聲にて、「オイく宮本先生、オイく武藏先生といつたら、オイく。」とよばれて、茶め「へ、へ、へいく。」跣「此處だヨ。」茶め「へいく。」跣「エ、イ奥の方を見て拜ばかりして居やアがるわ。コ此處だヨオ。」茶め「へ、へい、ヤなんだ跣公か、ア、ア有りがてえノ。」と、溜息しながら、「自己アもう大變なめに逢つたぜ。」と、四邊きよろ／＼拔足をして式臺へ下り来り、「オだれも居ねえのか。跣「足下はなんで此様なところへ這入りこんでゐるんだ。」茶め「へんなんで所のさわぎかえ、這入らねえといつて見なせえ、すぐに打ち殺して生肝でも抜きさうな見脈だから、誠にもう據ねえぜつにかかつて上つたのだ。」跣「チヨツ夫れだから一人でひやかしに來なさんなといふのだ。足下が上つたら仕方がねえ、おいらだつて格子の先のすぐ歸りといふ譯にやアいかねえ。お前の遊君にさう言つて、

座敷ばかりでも宜いから、面の白いのを一人よんでくんなせえ。」茶め「エ、イ人の氣も知らねえで、むだ口所が。コウく其處らに誰も見えねえなら、お前はそ草鞋と大小を持つて逃げてくんな、自己ア此處にやア居た、まれねえ。」と言ふより早く飛び出せば、跣助も何處となく底氣味悪く成つて來て、四邊散眼々々草鞋と大小を引渡ひ、一生懸命逃げ出す。茶め吉はこけつまるびつ四五丁程走り、寺の地内へ驅け込む故、跣助もまたつゞいて驅け込み、跣「オ、せつねえ。」茶め「自己もオ、せつねえ。夫れは宜いが追蒐けて來やアしめえかなア。」跣「ナンノ誰が來るものか。」茶め「それぢやア此處で仕度をしよう。」と、草鞋をはき大小を差しなどして、ホット一息つくなるべし。爰にまた虚呂松は、女の姿の衣裳さへ帶さへ花美な形なりに、拔衣紋のござれ腰、小褌をたく撮みあげ、赤き蹴出をひらつかせ、引きすり歩く駒下駄の、音さへコロ／＼ガラ／＼と、呑味づくめな身振ゆゑ、頭巾は深く冠りても、往來の人の目に付くにや、何かひそ／＼耳こすり、私語きあうて往くあれば、笑ひを含みて通るもある故、彌からだに品をつけ、透進と歩行きながら、早後見は來さうなものと、折々後をふりかへり、見れどもいまだ下太郎もまた跣助も見えざれば、無多口をきく相人もなく、一人歩行の寂しさに、葎簀張の茶屋へ這入り、後見の者を待ちあはす心にて、何かわるふざけなどしてゐると、表の方を彼の見えばうな石町の大愚が、相も變らぬ大めかしの、オホン／＼

で行くを見附け、慌てて茶屋を駆け出し、虚ろ「モシエ、アノ大愚はん、大愚はんッたらじれつたい、お待ちなはいよう、大愚はん。」ト呼びかけられて大愚は振り向き、見れば見なれぬ大女が、頭巾に顔をすつほり包めば、誰とも當りの付かざる故、不怪しさうに監へて、大愚「アノ僕に聲をかけ給ひたるは、貴嬢でありやすかネ。」虚ろ「ハイサ、私なのでありますヨ。」ト、何か呑味な腰つきして、いきなりすつと側へより、大愚のからだへ憑れ掛れば、大愚は周章てちよつと飛び除き肝を潰した顔をして、上目でじろく見る可笑しサ。虚ろ「何だらうねえ、逃げたり何かして大概ぢやア有りませんか。そして初卯には是非誘ふからト、約束して置きながら出し抜いてサ。夫れだから大方餘所のお楽しみでも連れてお出でのに違ひあるまいと、思へばくや獅子文殊の獅子、トツピキピイの角兵衛獅子で、逆さに立つて歩いて、私の様な一文獅子では、御意に入らぬは知れてゐるが、人の女獅子をスボンとぬいて、彼様して出てお出でなはつたかと思ふと、なんほお前はんが雄獅子でも、起請の詞はくひ獅子と、思へば眞に腹の立つ、私は戀の手負獅子、見すてられればるのし、や、祭の先の獅子頭、餘所の囃しも恥かしし、エ、悔ししや憎らしし、腹立たしし。」と言ひながら、手當り次第振り廻せば大愚は彌、胸り驚き、「エ、アレサ、あ、いた、エ、ア、。」と、飛び除きく、不思議さうに、頭巾のうちを覗きても、何様も見知らぬ女なれば、大愚「僕が御名をお呼びのからにやア、知らぬえ人ぢやア

有りやすめえが、何分思ひ出せやせん。」と、あつけに取られしその風情、虚ろ松はづに乗つて、「おとほけ被成にも程があるンでありますヨウ。」と、大愚が顔を媚目でじイツと見入れながら、「アノオタマでも今朝までも、枕並べて一所に寝て、其方向けの此方向けの、いとらしいの可愛の、肌目こまかだの餅肌だのと恥かしがるを撫でツ摩りツ、人をさんく、翳つて置いて、誰だか知らぬの何の彼の、其様なそのよな言譯を、小さい時からなまなかに、手習までも一ツ所、何やら雙紙へ書いたのを其方に見せて問うたらば、戀といふ字と言うたのを、結び始めの殿御ぢやと、思つて居るにそのやうな。」ト、大愚が體へかじりつけば、大愚はエ、と震へあがり、冷汗をかきながら、頭巾の中を能く能く見て、大愚「エ、なんの事だ、面白からねえ。何人かと思ひ苦すれば虚呂松大人、チョツ悪しき洒落をし給ふものかな。アレく、人が集ひてじろく見るわス。何らの御催しか知らねえが、その美姿では眞に詫び入る、是ればツかりは閉口つた。夫れにネモシ、聞き給へ、今日は大人もお懇意の蘭英齋大人が、狩野家の妙筆を揮つて、押上邊から請地村の邊を、眞景にかいて遣るからといふ約を結び、先生は波曉子椿亭子などいふ俳天狗と共に、面の白いのお兩三人しき従へ、臥龍の園中へ頼くより風駕がきしつて居るといふのだから、拙も遅參に及んでは、其の罪また輕からずス。モシ大人、といふ譯だから、失敬は大人におん見なしとして、お先へ御免を蒙り、羽織も恐れ入谷の鬼子母神に對す

るやつかネ。何は冤もあれ寛りツとおしけり。オホンノ」と逃げ出す、大愚の袂をしつかりつらまへ、虚ろ「なんだらっネエ、オホンノ」と其のやうな、黄色い事をお言ひなはらずに、一所に往つておくんなはいヨウ。何ほ私がどた福だとして、天の岩戸の御扉を、開けば同じ女子のはし、お雑煮ばしや鐵火ばし、せめては天神ばしまでも、お供をさして下さんせ。」ト、否がるところへ付け込んで、悪しつっこもた付き掛れば、大愚は殆んどあぐねし様にて、「チョツ是れは何様だ、大人とも思ひ侍らねえ、悪しきふざけはよし給へ。ア、いた、、、、又振り給ふか、何様もならねえゾ。アレノ段々に人が集ふ、よし給へと云へば止し給へナ。」ト、こまり果てたるその様子。虚呂松は船の中にて、飲みたる酒が次第にまはるのみならず、女の頭巾をすほつりと、冠つて顔をつゝみしかば、天窗はふらふら目はちよろ／＼、機嫌上戸の癖として、しきりに一人で面白がり、虚ろ「私やお酒を給へたせろか、誠に逆上せていけないので有りますわ。」ト、元より大の自惚故、剝出しにて面を見せ、十分請ける氣に成りて、冠りし頭巾を一寸取れば、大丸鬚の根の所へ、切こて／＼と捻り付け、其方此方へ、笄さし、牛の様なる襟元から、鼻の先まで眞白に、塗る白粉のむらはけせし、顔突き出して鬚の毛を、搔き上げながら、「オ、熱や。」ト大愚が體へしなだれ掛れば、往來の人は是れを見て、笑ふも有れば囁すも有るに、大愚も今はたまりかね、大愚「オ、アレ、ちよつと見給へ、アレノ、是れは奇てれ

つなものだ、なんであらう、アレノ」と言はれて、虚呂松立ち止り、「何か珍らしい物でも有りませのかエ。」ト彼方を向く時、後から來かゝるでつくり肥満つた男の陰へ、ちよいと隠れて横町へ、大愚はこそ／＼逃げ込むを、虚呂松は氣が付かず、「マア悪らしい、何にも有りもしない物を。顔を見せるが否だといつて、人に彼地をつん向かせてサ。夫れほど私が否ならば、程よく生まれ来て來ぬがよい。往來なかでも眞晝でも、惚れたに加減がなりません。此方の殿御。」と言ひながら、側へ來かゝる太つた男を、大愚と間違へ身をよせて、腰のあたりへかじり付けば、太つた男は肝を潰し、「コ、この氣違めエ何をする。」ト、握りツ拳を振り上げて、横ツ小鬚を突き飛ばされ、虚呂松は仰天し、「何様するのだ。」ト振り返る所をコツキリ又打たれ、虚ろ「ア、いた、、、、いてえぞ／＼、べらんめえノ、何で自己を打つたのだ。」ト、躍氣と成つて総り蒐れば、太つた男は彌腹立ち「なんの愚鈍踏み潰すぞ。」ト大手を廣げて虚呂松が天窗をいきなり引摺み、捻ち倒さんと力を入れ、引けば鬚はほつかり脱け、力まけて仰向に、でんぐりかへるト生憎に、浚ひ上げたる小溝泥の、中へばつたり轉がり込み、體は半端埋まるを、見るより虚ろ松突立ち上り、「けはひ化粧や振の袖、女々しくつくるは世を忍ぶ、假の姿と知らざるか。べ、、、、ベイノべつかつかう。」ト、尻を叩いて一散に、逃げ出す先の横町から荷ひて出づる糞桶に、出合頭突つかゝるト、桶は揺れてドンブラコと、翻れる糞を虚呂松は、半身あ

びて向うへよろけ、鼻を撮んで立ちすくみ、虚ろ「ア、ツエ、、オ、臭えくく。」往來の人、「オ、くせえ、オ、臭え。」虚ろ「ヘツクシヤウ。オ、臭え、オ、オ臭え。」

案上再説、船に残りし喜次郎、飛八、野良七の三人は、建川通を漕ぎ上り、天神川へ横ぎりて、程よき岸へ船著けさせ、豫て落ち合ふ約束の、茶屋へ上つて待ちかまへ、何時まで立つても虚呂松も又茶め吉も出て来ぬは、もしや突っかけ天神の、社の方へ行きたるかと、思へば萬事不安にて、心にかかる事のみゆるゑ、三人は相談つけ、此處にて彼是氣を揉むより、天神橋の橋下にて、待つこそ宜けれと決著なし、再び船に乗り移り、猶川上へ漕ぎのほつて、天神橋の下に著けさせ、喜次郎は虚ろ松茶め吉らが様子を見て来んと、野ら七飛八を船に残し、一人陸に上りて、其地此地尋ね探す頃は、人もおひく出盛りて、よき汐時とぞ成りにける。爰にまた茶め吉は、支度せんとて逃げ込みたる寺の、地内を立ち出でて、後見跣助と諸共に、ひたすら道を急ぎつゝ、豫て相談きめ置きたる、待合茶屋へ至らんと、法恩寺橋どほりを真直に、天神橋の橋でまへまで来り、彼方を見ると喜次郎は、彼の歌修行のこしらへにて、向河岸を散眼々々しながらあるいて居る故、茶め「ヤ、アレく喜次さんが歩行いて居るぞ。」跣「ドレく。フウン何さま兩方の脚であるいてゐるワ。」茶め「随分請けるこしらへだナア。見なせえ、觀音經の一手や自我佛の構へやう位は、心得て居さうぢやアねえか。」跣「そりやア

宜いが、何様か此地の方へ足の先がむいて來たぜ。」茶め「シテ見ると調度橋の上でぶつつかる見當だが、直におつ始める料簡ぢやアねえかナア。」跣「チヨツ待ちたまへ。」ト橋の下を覗いて見、「イヤアしめしめ、船も來て居るワ。しかし虚呂松が何様であらうか。」と、橋の袂の小高きところへ驅け行き、川縁どほりを伸び上り見ると、割下水の方より、彼の草色の頭巾をかぶりて、虚呂松らしき者が驅けて來るゆるゑ、茶め「イヨウ見えるく。何でも直におつばじめる手筈にして有るに違へねえ。お前は早く船へ往つて、その趣を通じなせえ。」跣「オットよしく。」茶め「ト、、トンが切つかけだぜ。」跣「案じなさんな、承知だよ。」と、例の早卒同志が二人で許りのみこんで、跣助は棧橋を下り、茶め吉は身構へしながら橋の上へ行き向ふ。喜次郎はかかるべしとは夢しらず、猶虚呂松茶め吉の二人をたづね、有漏々々として此方へ來る橋の半ばで、茶め吉が袖する程に行き違ひても、羣衆といひ、向うにばかり氣を入れて、心付かずに往かんとする、紙布の袂を敷から棒に、腕を伸ばしてしつかりつらまへ、「ヤア逃けるとて逃さうか。」ト引きとめれば、恟し、振り向き見ると茶め吉ゆるゑ、苦りきつたる顔をして、喜次「チヨツ出抜に何様したものだ、後見は居ねえのか。まだ狂歌も讀まねえうちに、何で其様に取違るんだイ。」茶め「出抜だらうが取違ようが、もう彼様なつちやア武士の意地、縦ひ狂歌は讀まねえでも、讀みさうな面だから、未前を察してとらへた袂、成らば手柄に採つて見る。ナ、

ナ、なんと、ヤイ坊主。」ト少し氣取つて仕かければ、通りかゝりの老若男女、アレ喧嘩よと立ち騒ぎ右へ左へ驅け走るに、喜次郎も今は是非なく、「コハ理不盡なるお武士、何科あつて留むるぞ、きりきり放して通し給へ。」ト、紙布の袂を捕へし手を、一寸拂つて突き戻せば、茶め吉後へたじくと、よろける足を踏みしめて、「ヤアちよございな賣僧の腕立、觀念しろ。」と手を伸ばし背中の木刀抜かんとして、先に芋九郎が家に轉びし時、木太刀は縛せし袱紗と共に、彼處の玄關へ置きざりて逃げ來りしを思ひ出し、ハツと狼狽へあたりを見ると、橋の上に荷をひそけし、蜜相商人の天秤棒が建てかけ有れば、周章で驅け寄り引渡へて持ち來り、茶め「汝等が様なひよつと坊主は、木太刀などでは勿體ねえ、天秤棒で相應だ、覺悟をしろ。」と打つてかゝるに、喜次郎は困りきつたる顔しながらも、爲方なければ不承々々、襟にさしたる如意を取り、トゞあしらひて立ち廻る。然る程に又虚呂松は、糞取桶に突き當り、むざんや半身黄に染みて、その臭きこと夥しけれど、喧嘩の相人につらまりては、何のやうなる目に逢はうも知れずと、鬢は掴みとられても、幸ひ袂にのこりし頭巾を冠りながら逃げ來れば、往來の人は是れを見て、「ソレ糞女だ、ヤレ糞女だ、オ、臭やエ、エくせえ。」ト、かなた此方へよけて通せば、天神橋の橋際まで眞暗さんばう驅けて來ると、をりよく試合の最中ゆる、甘いことだと舌打しながら、彼の糞だらけな形をして、遠慮もゆるしやくも有らばこそ、虚ろ「まよ、ア待つて下さん

せ。」ト、二人が中へ割り入るに、その臭さ五臓をとほせば、喜次郎も茶め吉も、ウンとばかりに反りかへり、「こりや何様したのだ其の形は、エ、エ臭え、オ、くさや、寄つ付かれてはたまらぬ。」と、天秤棒を投げ出し、茶め吉あわてて逃げ出せば、喜次郎もまた逃げ出すゆる、そりやこそ喧嘩が此地へ來た、ヤレ糞女につらまるな。」と、橋の四邊の混雜は、宛然鼎の沸くがごとし。是れより先に跣助は棧橋を下りたちて、船の中へ飛び乗り見るに、起きて居るは船頭ばかり、野良八も飛八も、容子を見に出し喜次郎が、歸りの遅きを待ちかねてや、踏んぞりかへつて大鼻息、前後も知らず寐入つて居るに、コレは何様だと揺ぶれど、叩けどさらに正體なきを、無理無體に引きずり起し、橋の上には立廻りが、早始まりしと聞くよりも、二人は寐耳に水調子の、合ふもあはぬも足踏の、相圖も更にいらばこそ、周章でてその三味線とり、ベンベコジャンジャラベンベコと、減多やたらに弾きたてる所へ喜次郎茶め吉は鼻をつまんで逃げ來り、船の中へ飛んで入る。此の時調度下太郎も、有漏々々此處へ來かゝりて、此の有様を見るよりも、同じく船へ入らんとして、橋から驅け來る虚呂松に、思はずばつたり突き當り、下太「これはなんだ、オ、臭え、糞だ、オ、くせえ。」虚ろ「わちきも誠に臭い臭い。」と、二人も船へ飛び乗れば、待ち構へたる船頭は、すこしもすかさず立ち上り、舳を抜いて船棹を、グット突つばるその拍子に、船はゆらく中流へゆらめき出づれば、飛八野ら七此處を專途と

撥打ち付け、ジャンジャジャン／＼、スチャラカチャン／＼。飛「オ、くせえ。」野「オ、くせえ。」
 三味せんジャンジャ、ジャン／＼。喜次「オ、臭え。」唄「吹けよ糞風あがれよ簾アれ。」三味せんジャンジ
 ヤン／＼、一回「オ、くせえ。」唄「中の小唄アの顔見たアや。」三味せんジャンジャ、ジャン／＼、スチャ
 ラカ、チャン／＼と、天神川を押し下り、豎川通へ漕ぎ戻りぬ。

七偏人三編叙

怎麼妙竹林話の腹稿と云つば、人心不同七偏人、劉伯倫に似た酒風漢あれば、阮籍の如く醉放人
 を白眼むもあり、阮咸に似て犢鼻褌を竹竿に掛けて、七夕祭をなす如き白漢あれば、王戎の如く日
 輪と白眼み競する倥傯あり。稽康に似て酒許り飲んで無言なるあれば、尙秀の如き癖好あり。又山濤
 に似た多辯あり。性愚あり性直ありて、計較に興あれば、言語に絶倒ある、其の筆頭の機關は、覗い
 て知れぬ江湖上の、滑稽洒落の中道を探り、人情世態を細末に穿ち、猪踞も後れぬ當時の流行、世界
 の魁作者の旭、大庾萬株の榎亭主人、其の名は四方に隠れなく、勻ひは筑紫の邊地までも、風に薫
 りて飛椽の、とんだ評判よしと聞き、書肆は次編を矢の催促、金鷺子は弓の張臂なして、當りを規ふ
 得手の拳、茲に三編稿脱りて、未だ序文のなきを僥倖、僕も雜魚の大魚交り、韶陽魚の齒怒端書を、
 人並らしくも述ぶるに南。

春霞樓の北窓に筆を染めて

鶴 亭 秀 賀 識

扱も七人の能樂者どもは、春の朝の酒機嫌、妙義参りの初茶番、天神橋の一趣向、ヤンヤと言はせる計較の、手はずが瓦落裏くひちがひ、遣りそこねしも一興と、用意の船にうち乗りて、豎川通を漕ぎ戻りしが、其の後はさせる事もなく、昨日に今日とうち過ぎて、暑さ彌増す夏の日も、水無月半端に成りにけり。扱も彼の青柳橋なる能樂亭には、主人の喜次郎縁先に髪を結はせて居る側に、寢ころんで居る下太郎跂助、喜次郎は髪結に鬢のところを漉かせながら、「剃公お前は上方だの。」かみゆひ「左様でござります。」喜次「上は何の邊だ。」かみゆひ「伊勢でござります。」下太「伊勢ならば膝栗毛の喜多八が、古市で髪を結はせたなアお前ぢやアねえか。」かみゆひ「膝栗毛の喜多八さんぢやつたやら、何ぢややらえらい旅人ぢやで、とツと分らんがナ。」跂おめへの前で左様言つたら腹を立つだらうが、伊勢あたりは髪はいひやうが、何様も下手だ。ア、とエ、夫れく古い落噺に、蝮蛇といふ名は何様して付けたのだらうと聞いたら、彼は蝮といふものが蛇だから、蝮蛇と付けたのだと言つたら、扱々蛇れば蛇るものだと言つたといふ噺が有るが、何でも上方の髪結は、江戸の髪結から見りやア、髪結

といふのぢやねえ、化粧といふので、お前なんぞのつかふのは髪剃ぢやアねえ、化粧といふのだ。突
然して喜次様の化毛でも剃り落すといけねえぜ。」喜次「宜いよう騒雜しい。ナウ親方、いろのできね
え奴といふと、口が悪くつて成らねえものだ。」跂「エ下太公、今お前の左様いつた膝栗毛にある喜多
八が、古市で髪を引つめられたと言ふ一件は、眞に彼だつたらうか。」下太「何の彼様な事が有るも
んか。自己なんぞも引詰つた髪が好きだから、思入固く結つて貰ふ方がせい／＼して、能い心持だ。」
喜次「左様でもねえ、悪く引詰められると、天窓へ何か嚙り付いて居るやうで、耐へられねえもんだ。」
下太「所が天窓を持つて提下けられる様なのが能いのだ。」跂「夫れでもお前の髪は随分寛く束ぬてある
ぜ。」下太「是れだから何様も氣に入らねえのよ。」と、二人が噤して居るうちに、喜次郎は髪を結び上
げ「ヤレ／＼大きに御苦勞だつた。」と、立ち上りて後方を振り向き「何様だ下太さん、お前も結つて
貰はねえか。」下太「左様さ結つてもいい。何様だ化粧さん、ぐつと引詰めて遣つて貰へてえが、引詰
める事を知つて居るかネ。」かみゆひ「お江戸なれんてなア宜うは結はれんが、遣つて見ませうかいな。」
下太「其様なら一番束ぬて見てくんねえ。」と、喜次郎が立つたる跡へ居り込み、銅盥の水にて顔を濡ら
せば、髪結は後へ廻り「是りやえらいよいお髭ぢやア。」下太「宜いといふのでもねえが、只女惚れ
のする髭サ。」下太「下太公の髭は赤い方が多いから、伸ばして機欄帝屋へ脚したら宜からう。」かみゆひ「彼

様いふお髭を長うしたらとツと埒明かん。私の知つとる人がなア、ちやうど此方の様な顔でなア、
機欄の毛のやうな髭を長う伸ばしてぢやつたが、子供等が蜻蛉をしばるとて、其の人の顔をなア、馬
の尻と見違へ、赤い髭を尻尾ぢやと思つて、引き抜いては逃げて行きよるので、蜻蛉の居る時分、お
もてへ往ぬると、えらい災難をきるからとて、家にばかり居てぢやつた。」下太「馬の尻だなぞとおつ
う當て付けるノ。」かみゆひ「オット動くと切りますぞえ。」下太「切らなくつても、切られるよりやア痛
えから澤山だア。エ跂さん、自己の知つて居る男が、此の髪結公と東埔塞二ツといふ鹽梅に似て居
る顔よ、其奴が堀の内様へ參つた時、四ツ谷の街道を牡丹餅を買つて喰ひながら歩行いて居ると、向
うから來た馬糞浚ひが、竹の先へ附けた鮑ツ貝を、牡丹餅をつまんで口へ入れようといふ拍子に、顯
のところへぐいと突き付けたから、何をしやアがる鈍癡氣めエといふと、馬糞浚ひが肝を潰し、コリ
ヤ何様ぢや、馬の尻の穴から糞が出るのかと思つたら、人間が牡丹餅を喰つて居るのか。物を言つた
から口だと思ふが、黙つて居ては何様しても尻の穴としか見えぬと言つたさうだ。」かみゆひ「サア頭上
を濡さんせ。」下太「オット承知、そら來た。」と、天窓を濡らして突き付ければ、髪結は下太郎が月代
を揉みながら「イヤ此方さんのお頭を見たで思ひだした、先頃柳原で一面に凸凹のあるえらい大きな
藥罐の直を付けたがな。」下太「フウム、青柳橋を廻る髪結の天窓に似て居る藥罐が出て居ると言つた

が、大方夫れだらう。」喜次「何だかべらほうと舌戦みあつて居るのオ。」跂「下太公の天窓の上へ、親方の天窓が重なつて居ると、まるで銅の瓢箪といふ鹽梅に見えるから宜いちやアねえか。」かみゆひ「兀けた天窓の青うなり、凸凹も見えんやうに成る傳授が有るがな。その傳授は、稗を買うて来て粘へ雑ぜ、その稗粒を天窓の赤う成つたところへ平たりと塗り付け、水を打つては乾かんやうにして置くと頂天の熱氣で一晩も過たぬ中に、其の稗粒が蒼う芽をふくので、月代よりは何程か綺麗になる事ぢやが。」下太「オット化結さん、其様な根揃へちやアいかねえ、もつとぐつと引詰めてくんな。」かみゆひ「私やえらう詰める事は不得手ぢやでなア。」ト、何かぐづくして居る故、下太郎は圖に乗つて「膝栗毛の喜多八ぢやアねえが、上方仕込は根を詰めて結び得ねえから困る。もつと思ひ切つてぐつと遣つて見なせえ。何でも自己の様な客には、結人の方から二十八文は出して宜いのだ。根をつめて結ふことを教へて貰ふのなものヲ。」かみゆひ「是りやもうお前はんの言はしやる事が本間ぢやわいの。」ト言ひながら、下太郎が髪を力一ぱい引詰めれば、天窓の皮へ四ツ五ツひだが出来、眉毛も眼も釣り上つて仕舞ふゆゑ、下太郎ははつと思へど、今更寛めてとも言はれねば、下太「まだ少し緩いやうだけれど、この位なら不承して置かう。」かみゆひ「こりや大分端毛が長うなつたさかい、鬚の方へ融通して結んで置さるぞえ。」ト、下太郎が天窓の鬚を後のがへぐつと引き出して結び仕舞ふト、髪は結ばれ鬚も

を直に引き下け、「旦那さん左様なら。」と忙がしきうに出でて行く。喜次郎は下太郎の顔を見て、「オヤオヤお前の顔は何様したのだ。」跂「ホンニなう、开して其の鬚は何のことだ。ヤア／＼天窓へ内藤東埔塞を見たやうに、豎に幾筋も鬚積が出来たぞ。」喜次「其のはすだア、毛穴が一本々に持ち上つて居るのなものヲ。开して、オヤ／＼泣辨慶を見たやうな眉毛をして、眼はもう夫れつきり明かねえのか。」下太「何にしても晴々とした。マア一ぶく遣らかさう。」ト、首を居ゑて火鉢の側へ來り、何か掻きさぐつてゐたりしが、「オイ跂さん、此處らに自己の煙管と煙草入が在るだらう、とつてくんねえ。」跂「いけ懶墮な男ぢやアねえか、自分でとらッしな。」下太「探らうと思ふけれど見ツからねえものを。」跂「直き膝の脇にあらア。开して何故首をすゑて向うばかり向いてゐるのだイ。」下太「下の方が見られる位なら、お前にとつてくれろと言つて頼みやアしねえわ。」喜次「エ、それ茶を注いで置いた湯飲をひつくりけへしやアがつたわ。何で下も見られねえ程、髪を引詰めたんだイ。」跂「引詰めたしたんぢやアねえ、化結だの何のと言つて惡まれ口をきいたもんだから、引詰められたのだア。」此の時表の格子が明き狼狽して入り來る野良七飛八「オイ／＼煮次さんや跂公や、下太さんは何處へ往つた。」跂「其處に居るのが見えねえのか。」野良「エどれ／＼。」と下太郎を見て、「ヤお前何様した。オヤオヤ其の顔は百眼の通人といふ眼に成つたぢやアねえか。」飛「ウ、ツ其の鬚は何といふのだ。自己

アお前ぢやアねえと思つた。オヤ／＼天窗の毛の穴が一本々々に盛り上つて居らア、何故此様に引詰めて結つたのだ。夫れとも茶番の趣向でも有るといふのか。」下太「氣樂な事を言ひなさんない。」飛「オヤ否に熬れやアがるぢやアねえか。」野良「下太公は癪が起つたのだらう、眼付を見ねえな。」飛「何にしても通り過ぎちやア詰らねえ。オイ喜次さん、下太公が首ツ丈といふ麥湯の姉さん殿が向うから来たから、一寸見なせえ。」と窗へ驅け行き、格子の間から首を出し、「早く／＼。」と呼び立てるに、喜次郎もどれ／＼と立ち出でて、「アウム、なか／＼美しい代物だ。オイ下太公、早く来て其の引詰めたところを見せて遣らつし。」下太「其様な甘口で謀される様な、自己だと思つて居るのか。」野良「否に疑りやアがるぜ。」飛「天窗の皮を引釣つたので、根性へ斜みが出たのかも知れねえ。」此の時表を通りかかつた年増女と新造が、野良七と飛八を見て、こしま「オヤ野良さん、此處が貴君のお家なので御座いますか。」しんぞ「飛八さん昨晩は御馳走。」野良「些とおよりの、此處は自己の妾宅だから。」飛「野良さんの圍女といふのをお知己にするから。」ト言ひながら、彼方に一人居つてゐる下太郎が手を探つて、「早く往つて顔を見せて遣らつせえ。」ト、無理無體に引き立てれば、下太「アイタ、、、エ何をひどい事をしやアがるのだイ。」飛「何故横目で人を見るんだ。首は傾らねえのか。」下太「大聲をすると鬚へ響くから靜かにしろイ。」飛「オヤ／＼お座頭を見たやうだ、ソレ／＼煙草盆へ蹴爪突くわ。何で此

様な天窗に結やアがつたのだなア。」と窗の所へ連れてゆき、飛「サア野良さんのお圍様を連れて來たぜ。」と言ふ時、下太郎も窗の格子から首を出し、「此處はわちまきの家なんだから、些とお這入んなはいなねえ。」ト言はれて、女は顔見合はせ、少し猶豫ひ居たりしが、新造「オヤ下太さんで御座いますか。」こしま「ホンニ下太さんだよ。」新造「晩には急度おいで被成ヨ。」こしま「他へいらつしやると聞きませんよ。」下太「亦恍惚を請けさせようといふ料簡か、何様も成らねえぞ。」こしま「オヤ逆にじだよ。」しんぞ「眞正にお往でなさいヨ。八ツに成つてもセツに成つても待つて居りますから。」下太「ト言つて墮落の邪魔をされて、少熬なんぞぢやア恐れるぜ。」喜次「へんおたのしみな世かいだなア。」ト、手をのばして下太郎の尻の傍をチツクリつめれば、下太「アイタ、タ、。」と、身を反らす拍子に、窗の上に在る輪七五三をかけた折釘へ、鬚が緊り引つかゝり、ぶら下げられた如くに成る故、たゞさへいたき鬚の毛がいよく／＼と引釣つて、耐へかねれど例の見えぼう、首衝きのばし足爪立て、いたさを忍んで鬚ぶしを引掛けたなり、そしらぬかほ。下太「晩には枝豆と茹玉子の總仕舞とやらかしやせう。」こしま「きつとでございますヨ。」しんぞ「下太さんは大層丈がお高う御座いますねえ、开しておくびが長いから恰好のよいこと。」こしま「夜お目にかゝると、此様におたかいやうにやア見えないねえ。」野良「何にしても這入んねえな、一杯遣付けるとしようぢやアねえか。」こしま「有りがたう御座いますが、ちつと急ぎま

すから。」しんぞ「左様なら晩ほどはお待ちまうして居りますヨ。」野良「穴ツぱひりをしちやアいかねえ
 ぜ。」下太郎はよこめにて、「二人揃つてあるいちやア眞に二千兩だ。」飛「自己アぐつとかひ上げて、二
 萬兩といふ入札にしよう。」しんぞ「オホ、、、左様なら。」しんぞ「其様なおしやかし被成と、晩にひ
 どいめにあはせませすヨ。」と、二人はこゝを往き過ぎる。喜次「なか／＼おつな代物だ。」飛「年増も新造
 も、大元氣よ。」野良「晩に一所に出陣するサ。」喜次「自己が往つたら兪の鼻が明くだらうと思つて遠
 慮してゐるのだ。」飛「ところが年増の方は、ずつと自己にのつて居るといふ奴だから。」と、話しな
 がら此方へ來れど、下太郎はなほ窓の外へ首を出して見てゐる容子に、
 下大「エ。」飛「もう諦めて此方へ來さつし。」下大「エ。」野良「イヤア下太公の天窗が格子へ支へて引込
 まねえのだ。」喜次「徳利へ指をつんこんで抜けねえ時、うしろから擦ると、ハツと思ふ拍子で抜ける
 といふから、下太公も後から擦つたら、天窗がすぽんと抜けるだらう。」下大「エ、其様な事をされて
 たまるものか。」飛「夫れでも首が抜けねえぢやア猶たまるめえ。ドン／＼。」と、後へ廻り脇の下を擦
 れば、下大「エ、此奴らア、ア、イタ、、、タ、、、エ、ア、首から格子が抜けねえのぢやアねえ、鬚
 ツぶしへ何か引つか、ア、イタ、、、エ、此奴らア。」飛「オヤ蹴飛ばすな。」
 下大「ア、御免だア、タ、、、。」喜次「ヤア／＼此奴ア妙だ。折釘へ鬚ツぶしがひつ

懸つてゐるのだ。」野良「オヤ／＼可愛さうに茹魚章同然だ。」喜次「ドレ／＼自己が探つて遣らう。も
 つと首を上の方へ、こいつア丈夫に引掛つた。」下大「ア、イタ、、、。」喜次「エ、弱蟲な、我慢
 をしろい。」下大「夫れだつて是れで首は有りつたけ長くしたのだ、丈のびまでして居るんだものチ。」
 飛「オット宜いものが有つた。」喜次「鉄をもつて來てどうするつもりなのだ。」飛「これで鬚ツ節をちよつ
 きり切つてしまつたら宜からう。」下大「エ、圖方もねえことをいやアがる。」
 下大「ヤレ／＼手ひどい羅生
 だらうから、最うちつと左様して詠めて居るサ。」喜次「それ探れたわ。」
 下大「流石は無雙
 門だ。しかしお蔭でねが緩んだ。」野良「ホンニ生まれ付きの通りに眼尻が下つた。」
 下大「流石は無雙
 の自己だから、涕も翻さず辛抱したが、彼の髮結の外道めが、いちに成つて引詰めやアがつたので、
 天窗を木に懸けてめて居られた様だつたア。」
 下大「書いたのも謔ぢやアねえな
 う。」喜次「全體人を馬鹿にしすぎるから、あんなめに逢ふのだアな。眞を明かせば先刻の髮結は、本
 郷四丁目の葛牀の正吉といふのだが、自己が故意と上かと言つて聞いた物だから、向うが口を合はせ
 て、伊勢だと答へたのだア。すると果して、
 下大「毛穴が一々ひり／＼すらア。」野良「夫
 けられて仕舞つたのだ。」
 下大「忌々しい目に逢はしやアがつた。毛穴が一々ひり／＼すらア。」野良「夫
 れでも顔の風の變つた所を、
 下大「エ喜次さん、晩に一所に

歩行びねえナ。」喜次「ありやア梅の本といふ行燈の出てるのか。」野良「左様さく、そして年増の名がお麥で、新造の名がお白湯といふのだ。」飛「なか／＼面白い代物サ。」喜次「夫れぢやア晩に行つて見ようか。」下太「所が年増のお麥めは自己に九分九厘來つて居て、新造のお白湯は九分九厘九毛、今紙一重といふ所で出来るのだから、迷はして置かずに、ぜひ拵へて仕舞ひてえと思ふのだ。ナウ跂さん。」跂「眞に新造は下太公に氣が有るのサ。其處で年増の方は、自己に十分油が乗つて居るといふ證據は、熬れつたいよと言ひながら抓られた痣が、是れ見ねえな。」と二の腕を捲り、「オット此方では無かつた、此方の手よ。ノ、ソラ、紫式部の筆の綾といふところが、薄り残つて居るだらう。是れだものを、耐へられねえのも無理は有るめえ。」下太「夫れにノ、新造めが、男が美くつて程の宜いものは急度水性だが、おまはんは男もよし、程も能くつて實が有るのだから、頼もしいのだといやアがつたアな。」飛「ア、いた、エ、何故人の背中をくらはすんだイ。」下太「二ツや三ツ叩かれたつて、自己の様な好男子に似りやア、まんざら損も往くめえが。」飛「呆れけへらア、鈍癡氣めえ。」跂「其處で晩に僉が彼奴のところへ往つてくれると極つたら、下太しうと二人で、連中に待みが有る、といふなア外ではねえ、例の嗜みの隠藝をあらはして、彌惚れさして仕舞はうといふ段取だ。」下太「全體太棒でぐつと瀧く住きてえのだが、未だ義太のがは不飲込みだから、矢張り流行の哥澤節で出かけよう

といふのだ。」跂「そこで自己が例の美音で唄ひ付けると、下太公が三味すつて門附といふ趣向だが、下太公の三味線では撥あたりがいいが、何分手が廻らなくつて調子が合はねえから中だけれど、そこは自己が聲と唄ひ廻して、紛却して仕舞ふ積りだ。」下太「足下が調子をとつ外すのと、相の手を待たねえのは、三味線で繕はうと思つてるのに、唄ひまはして紛却すもねえもんだ。」飛「其の妙なのが二人で門附に出て、石でも打つ付けられてえといふ心願なのか。」跂「人の善い事を嫉嫉む奴等にやア嘶は出來ねえ。エ喜次さん、お前の知つて居る通り、下太公が弾いておいらが唄はうといふなア、凡そ端唄多しといへども、我が物と思へば輕し傘の雪といふのと、夕暮に詠め見倦かぬ隅田川といふのと、櫻エ、さくら山茶花水仙といふのと、三つしりやア無えから、連中へ恃むのは此處の一件だ。先づお前達が梅の本の牀几に腰を懸けて居て、彼の年増や新造が嬉しがる様に、自己や下太公の噂なんぞをして戲遊つて居る所へ、自己や下太公が、瓶覗きか何かの手拭を眞深に冠つて顔を隠し、銚子縮の單物、本古久織のお美帯に、桐の厚齒の下駄か何かで、極淺りとこしらへ込み、チンチリンチ、チリンチ、テン、ツテ、トツチン、チンチテ、トチ、リ、ツシヤン、ト三味すりながら通り掛ると、お前達が半分小意氣な門附だ、一番呼んで遣らせて見ようと言つて、二人を呼び込み、誰でも知つて居るものを唄はせなくツちやア、下手か上手か分らねえから、といふ風で、極つた物よりやア端唄を

遣つてくんねえ、夫れも夕暮なんぞが宜からうと言つて、望んで貰ふのだ。夫れより夕暮を唄つて仕舞ふと、我が物をもう一番と追ひ蒐けのお好みで、また我が物を唄ふ所が、例の美音名節で、惚々するやうに遣らかすもんだから、彼の年増と新造がうつとりする程水性に成り、思はず流す涎の滑りで地平の砂へ跣さんが、身に染々と戀しいなどと、我を忘れて書くところを、ほんに遣る瀬がないわいなと唄ひ納め、小意氣に冠つた手拭を採つて除け、此の愛敬で莞爾と笑ひながらお麥さん、茶釜へ臍でも入らなんだかと、言ひつゝ、ずつと這入つて見なせえ、人目がなけりやア黙りで抱り付くのは知れて居らア。」下太お前に年増が抱き付くうちにやア、自己はお白湯ばうに頼端か何かを喰ひ付かれて居るといふのは、能い手廻しぢやアねえか。」野良其様な事を言つて居て、眞正に茶釜でも割れたらば、妙な物が出来るだらう。」と言ふ時、勝手の流しにて手桶の箍が反ねたのかバチン、水の翻れる音サア、引。

三編 卷之中

日は暮れたれど此の頃の暑さに、結句日中より往來賑ふ往還を、喜次郎、野良七、飛八の懶墮男うち連れだち、いつも機嫌のたかばなし。野良ナウ飛八、跣助と下太州は、梅の本の女てれつにやア、

よつほど熱坊になつてゐるなア。」飛「だから門附の趣向か何かで、思ひ附かれようといふ存じ寄りのだアな。」喜次「跣助もなか／＼甘え聲だし、下太もおつりにし味するけれど、何にしても其の數凡そ第三ツと言ふのぢやア仕様がねえなア。」野良「兩人共おひうちに打合はして在るから、數は無くつてもヤンヤとうける氣でゐるんだアな。ところを一番面白可笑しく苦しまして、樂しむなどといふし法が有りさうな物ぢやアねえか。」飛「左様さなア。」野良「かうしたら何様だらう、是れからすぐに梅の本へ酒肴を持ち込み、一獻きこし召しながら、お麥とお白湯に思入網繆き、きつきやと言はせて居る所へ、跣助と下太州が大めかしで、チ、リ、テツ、ン、トツ、ル、テンなどと弾いて來ても、一向聞き付けねえ振で構ひ付けずに置かうといふのだ。すると奴等が氣を揉んで、比羅金様へ這入つた賊盜を見たやうに、何度もく、此方人の牀几の前へきて、まごつくと言ふのは一興ぢやアねえか。」飛「併し夫れぢやア請け込みが不約束に成るから、さうで無く往きてえもんだ。」野良「そんなら丸つきり餘所の見世へ上つてゐて、やつらが梅の本のまへを彼地へ往つたり此地へ往つたり、まご／＼まご／＼する所を見て、樂しんで居ようぢやアねえか。」飛「夫れでも矢張此方のぶまにならアな。」野良「後で梅の本と間違へて、ツイよその見世へ這入りこんで、待つて居たといやア宜ぢやアねえか。」喜次「兩人をくるしましめるといふお茶番は、自己の方寸に有るから、まアどうするか黙つて見て居さつし。」

野良「喜次さんの方寸も餘り當には成らねえノ。」飛「何にしても賑しきことだなア。」喜次「此處の見世ぢやアねえか、行燈に梅の本と書いて有るぜ。」野良「急げば早き古郷の、二の口村にぞ著きにけりだ。」飛「イヤ今晩は、お麥さまにお白湯さま、能いお天氣でおめでたうございッ。」野良「年増と新造の標致と程が大評判に付き、岡惚の我々までかたみを廣く思ふでござい。」と言ひながら、梅の本と誌したる麥湯の見世へ這入りこみ、傍の牀几に腰を掛ければ、晝喜次郎が能樂亭の前を通りし年増と新造が其處へ來て、麥「野良さん飛さん、先程は。」喜次「晩に往くと被仰つたけれど、よもやと思つたら能く彼爲入つて下すつたねえ、眞正に實有りだよ。」喜次「先刻お麥さんといふお名だといふお前さんと、お白湯さんと云ふお名だといふお前さんと、自己の家の前を通御が有つたのを、一眼見るより何となくお愛慕しく成つて、何分我慢が出来ねえから、日の暮れるのを俟ちかねて、二人を引張つて來たのだアね。」麥「オヤ／＼左様で御座いますか、能くまアお連れまうして來て下すつたねえ。」喜次「私やア實ありだと思つたら、夫れぢやア旦那が引張つて來て下すつたのだヨ、憎らしい。」飛「アツタ、タ、エ、手ひどい抓り様をする、膿み掛つた根太の天窗を、ア、いてえ／＼。」と云ふうち、お麥は煙草を吸ひ付け、「旦那一ぶく召し上げ。」と、喜次郎が前へ出せば、喜次「難有え／＼。併し此の煙草を此處でむざ／＼飲むなア惜しいもんだ。」喜次「ア、レ憎らしい旦那だよ。」野良「アイタ、タ、エ、何故

大人しくして居るものヲ抓るんだイ。」麥「オヤ鹿相、此の旦那かと思つて。」野良「此の達磨かと思つて、此方の達磨を抓られてたまるものか。夫れとも思入が有つて、間違へた振で氣を引いて見たのなら、堪忍して遣らう。」此の時お白湯は盆の上へ茶碗を並べて持ち來り、「櫻のお湯に致しましたヨ。」と銘々の前へ出せば、野良「茶碗を探る振をして、手を握つて見ようと思ふが、何と握り返してくれる事は出來めえか。」喜次「オホ、タ、握り返しますとも。」野良「ますともだけが覺束ねえノ。」喜次「覺付いてたまるものか、お白湯さんには自己といふ情合が有るのだものヲ。尤も其の情人といふ事は、お白湯さんもまだ知るめえけれど、去年の十月出雲の大社で、自己とお白湯さんといふ割振に縁結びの臺帳へ記してあるのを見て來たのだ。夫れだから今日は他人でも明日は墮落に成るに違へねえと、極りを付けて居るのだア。」麥「オヤ／＼旦那、夫れぢやア私の方は、何ほど思つても無多なので有りますネ。」喜次「イヤ／＼お前の名の所にも自己の名が書いて有つたから、兩人とも情人に取持つて下さる思召しかも知れねえ。」飛「オットお前の名は其の後字消で塗つて仕舞つて、自己の名を其の上へお書きなすつたから、お麥さんは自己の墮落に違へねえ。」と、何か三人は麥湯の女に戲遊つてゐる。そのうちに後からおひ／＼くる客に、おばくとおさゆは亦よその牀几へ行つてしまふゆゑ、野良「時にきじさん、跣助と下太州のこねえうち早く方寸の謀計を廻らして置けばいい。」喜次「今廻らさうと思

つてゐるさいちうだ。」飛「所を未だ廻らねえうちに、門附どのがでかけて来ると言ふのが落ちやアねえか。」ト暗る牀几の傍へ、箒をかゝへて莞爾々々しながら、六十許りのおやぢがきたり、「旦那ア、淪玉子と杖豆のヲ買つて呉れさつしやイ。おれお愛想に盆踊のヲ躍るべえから。」喜次「爺公、おめへでえぶ御機嫌だの。」爺「今そこな酒屋でやたとやらを肴に、一合ぶつくりけへしたら、圖無く浮かれて来たがぢや。」喜次「お前若エうちに些たア道樂をしたことアあるか。」爺「おれかう見えても色師の天井といふだつたからネ。先づ男が好いに聲がいい、程が宜いだから、郷村の女子どもまでが惚れこんだといふ物だ。」飛「さうだらうヨ。今でせへ目尻がさがつて、鼻が素人ごしらへのおそなへといふ鹽梅なんざア、なか／＼うまみの有る顔だ。」喜次「どうだ爺さん、音曲のはうは些とアやつた事があるか。」爺「音曲だらでかいもんだ、聲が美えからネ、郷村の源右衛門が麥畑へ下りた鴈のヲ追ふとてイヤこりやア鴈どもヲ何故来たホウと云うて呼ばるのは、五町四方しか響かんぢやが、自己追ひに出て、イヤこりや鴈どもヲ何故来たホウと云うて呼ばると、八町四方響くから、道樂寺さまのお林に眠つて居る木菟どもまでが驚くこつちやが。」喜次「そいつア強勢な聲だ。時に爺さん枝豆と淪玉子は、不残で何程ばかりあるのだ。」爺「六百許りも有りますべえ。」喜次「夫れぢやアそいつを不残買つて遣るから、今夜は商賣を是れツきりとして、自己に雇はれてくれねえか、ト言つて六ヶしいことを頼む

のぢやアねえ、今に此處へ男連の門附が来るから、其の門附をお前が呼び込んで。」ト、爺の耳へ口を寄せ、何か頻りに私語いて、懐中から金を出し、紙へ包みて親父に渡せば、親爺は無上に點頭いて、「ハ、ハ、ハア自己此様な道化した事のヲ大好きだで、味よく對談を遣つて見せやすべえ。」喜次「夫れぢやア爺さん、お前は其方の腰掛へ往つて離れて居ねえぢやアいかねえ。」爺「門附めらが来たたら、相圖のヲ頼みますぞえ。」喜次「飲みこんで居るよ。」飛「姨捨山へ投りこんで、狸の餌食にでも仕舞ふと言ふ様な爺を引摺り込んで、彼が方寸を廻らしたのか。」野良「彼様な半可通な半醉爺に、門附を呼び込ましたつて詰るめえが。」喜次「半可通の半醉だから、此方の誂ひ向きなのだ。まア黙つて自己の爲る事を見て置いて、後の手本にするがいい。」野良「枝豆と淪玉子の有る中は、何とでも言ひなせえ。随分六百丈の所は請けて居て遣るから。」飛「オイ／＼お婆さん、玉子と豆の大番振舞が始まつたから、お白湯さんを誘つて些と下司張りに來ねえナ。」喜次「オヤ難有う。お白湯さん。」喜次「聞えましたよオ。」喜次「早い耳だねえ。」喜次「玉子といふ聲がしちやア、我慢が出来ないのだからネ。」喜次「サアサア思入遣らかしねえ。」喜次「私やア枝豆が大好き。」飛「自己も勢分を付けて、八百投でも推始めようか。」喜次「オホ、ハ、ハ、ハ。」喜次「女は鶏卵を喰べても何にも役には立ちませんねえ。」野良「役に立たねえ事はねえ、澤山喰へば随分腹は強つて來らア。」飛「時にお婆さん、ちつと改めてお前に恃みが

有る、ト言ふなア外でもねえ、情合に成つて貰ひてえのだと聞いたら、お前が私には勘平さんといふ
 間夫があるトいふだらうが、其の勘平さんといふまぶの邪魔にはならねえのだ。なぜならば、今すぐ
 ぢやアねえ、此の次の世にいろに成つてくれといふのだ。尤も今すぐに成つてくれりやア夫れ程な事
 はねえのだが、子の日の小松と来て、曳く手数多のお麥さんだから、たとひこがれて死ぬからと言つ
 たつて、諾と言はねえのはこつちも承知だ。エお麥さん、死んで生まれ變るこんどの世から、かあい
 相だからいろになつて遣らうと承知してくれても宜いだらう。若し承知してくれるなら、此の世から
 都合をして置かねえけりやア成らねえ、と言ふのは、お前が八十で死ねば、自己は七十三で死に、お
 前が百で死ねば、自己は九十三で死なうと言ふのだから、そのおめへの死んで行く年を聞いて置きて
 えのだ。なぜならば、七年先へ死んで七年先へ生まれてると、自己が二十三に成る時おめへが十六
 に成るから、ちやうど七ツめで相性といひ年頃と云ひ、五分でも抜目のねえ墮落がきようといふの
 だ。夫れにおいらは成駒屋と坂彦と成田屋で茹へ雑ぜた様な男に生まれ、お前は大和屋と音羽屋と紀
 國屋で搔き廻したといふ様な女に生まれて出るから、二人並んだ姿と言ふのは、梅に柳か櫻に桃か、
 牡丹芍薬あやめに杜若」と言ひながら枝豆をとつて喰はうとして、「コウ／＼自己のお麥さんをくだい
 て居るうち、不殘殺にしてしまつたぜ。」野良「此の世ではからに成つても、今度の世にはお前にくは

れるとよ。」ほく「飛さん夫れでは後世は、おまへさんと情合になりますから、其の時のつけとも結納とも思つて、一ぶくつけておくんはないな。」さり「私やア生まれかはずつて、恍惚のききてに成りま
 すから、其の時の請賃の前借に、玉子を思入れ喰べますヨ。」喜次「开りやア能いがち、いめエ、アレ
 アレ下駄を枕にして寐始めやアがる。オイ／＼爺さん、起きて居なくつちやアいけねえぜ。」お「芋
 の畑へ猪の番に往きやしても、そべり込んで居ると、猪めらがだれも居んねえとおもつて出てくるだ
 ア。それだからおれ臥りこんで居ると、門附めらも誰も居んねえと思つて出てくるだア。」野良「ウ、
 ツ。」飛「し、と鳥追なら一所にしてもいいけれど、野猪と門附を従弟か兄弟のやうにでも思つて居や
 アがらア。」飛「アレ／＼たうとう寐て仕舞やアがつた。」喜次「オイ／＼爺さん、寐て仕舞つちやア
 けねえと言ふ事よなア。」お「やれ分解んねえ自己猪なう番に。」喜次「これサ爺様、猪の番を爲るの
 と、一所にしちやア違ふだらうぢやアねえか。」お「ハア違ふかね、夫れぢやア自己監へ損ねへた。
 何でも猪が四四で十六、門附が三味線のヲ持つて來るで、其の三味線の三筋の糸の三と、猫の皮の四
 乳の四とを掛け合はして、三四十二と成るから、四四の十六と三四十二だら、大え變りもねえと思つ
 たぢや。」野良「何でも宜いから起きて居てくれねえぢや往かねえ。」爺「折角一寐入り爲べえと思つた
 に、何でもハア儘に成んねえ浮世だア。」ト、むずり／＼起き上れば、飛「ヤア爺さん、お前の鬚ツ節へ